京都府遺跡調査概報

第46冊

1. 桑飼上遺跡
2. 国道9号バイパス関係遺跡
   (1) 八木嶋遺跡第2次
   (2) 川向北古墓
3. 平安宮大極殿院跡
4. 第二京阪道路関係遺跡（内里八丁遺跡）
5. 木津地区所在遺跡
   (1) 瓦谷古墳
   (2) 瓦谷遺跡
   (3) 瀬後谷遺跡

1991

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昨年開設から満10年を迎えました。当センターでは、これを記念し、特別展覧会や特別講演会の開催及び論文集の刊行等の事業を実施してきたところでありますが、これらの諸事業の遂行にあたりまして皆様方の御協力を賜わりましたことを、厚くお礼申し上げます。ふりかえりますと、当センターの設立以後10年間に、公共事業は年々増加の一途をたどり、それに伴い、発掘調査は単に件数の増加だけでなく、近年は特に大規模化する傾向にあります。こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成２年～３年度に実施した発掘調査のうち、建設省近畿地方建設局、京都府福祉部保険課、住宅・都市整備公団の依頼を受けて実施した、桑飼上遺跡・八木嶋遺跡・川向北古墓・平安宮大極殿院跡・内里八丁遺跡・瓦谷古墳・瓦谷遺跡・瀬後谷遺跡の各発掘調査を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また、埋蔵文化財を理解する上で、なにがしかの役に立つところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された上記の諸機関をはじめ、京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会・園部町教育委員会・八木町教育委員会・京都市文化観光課・八幡市教育委員会・木津町教育委員会などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成３年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　福　山　敏　男

凡　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．桑飼上遺跡　　2．国道９号バイパス関係遺跡　　3．平安宮大極殿院跡

4．第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)　　5．木津地区所在遺跡

2．　各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	平2.4.3～ 平3.3.5	建設省近畿地方建設局	岸岡貴英
2．国道9号バイパス関連遺跡			建設省近畿地方建設局	鵜島三壽 田代　弘
(1)八木嶋遺跡第２次	船井郡八木町 八木島	平2.4.17～ 平3.3.8		
(2)川向北古墳	船井郡園部町 小山東	平2.12.17～ 平3.3.11		
3．平安宮大極殿院跡	京都市上京区千本通椹木町東入小山町	平3.3.4～3.7 平3.4.15～5.21	京都府福祉部保険課	引原茂治
4．第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)	八幡市内里	平2.4.17～ 平3.2.27	建設省近畿地方建設局	竹原一彦
5．木津地区所在遺跡			住宅・都市整備公団	石井清司 伊賀高弘
(1)瓦谷古墳	相楽郡木津町 市坂瓦谷	平2.7.12～ 11.5		
(2)瓦谷遺跡	相楽郡木津町 市坂瓦谷	平2.4.9～ 12.20		
(3)瀬後谷遺跡	相楽郡木津町 市坂瀬後谷	平3.1.8～ 3.6		

3．本冊の編集は、調査第１課資料係が当った。

目　　次

1．　桑飼上遺跡平成２年度発掘調査概要 …… 1
2．　国道９号バイパス関係遺跡平成２年度発掘調査概要 …… 9
（1）　八木嶋遺跡第２次 …… 11
（2）　川向北古墓 …… 22
3．　平安宮大極殿院跡発掘調査概要 …… 25
4．　第二京阪道路関係遺跡（内里八丁遺跡）発掘調査概要 …… 33
5．　木津地区所在遺跡平成２年度発掘調査概要 …… 51
（1）　瓦谷古墳 …… 53
（2）　瓦谷遺跡 …… 71
（3）　瀬後谷遺跡（第４次調査） …… 82

挿 図 目 次

1．桑飼上遺跡

第１図　遺跡所在地 …… 1

第２図　調査区配置図 …… 2

第３図　検出遺構図 …… 3

第４図　竪穴式住居跡26実測図 …… 4

第５図　方形周溝墓１・２実測図 …… 5

第６図　出土土器実測図 …… 7

2．国道９号バイパス関係遺跡

第７図　調査地周辺遺跡分布図 …… 10

（１）八木嶋遺跡第２次

第８図　調査区配置図 …… 11

第９図　Ａ地区土坑ＳＫ01実測図 …… 12

第10図　Ｂ地区遺構平面図 …… 13

第11図　Ｃ地区溝平面図 …… 14

第12図　Ｅ地区遺構平面図 …… 15

第13図　掘立柱建物跡ＳＢ23実測図 …… 17

第14図　Ｂ地区出土遺物実測図 …… 18

第15図　Ｃ地区出土遺物実測図 …… 19

第16図　Ｅ地区出土遺物実測図 …… 20

（２）川向北古墓

第17図　調査地位置図 …… 22

第18図　トレンチ配置図 …… 23

第19図　出土遺物 …… 23

3．平安宮大極殿院跡

第20図　調査地位置図 …… 25

第21図　平安宮復原図 …… 25

第22図　調査地実測図 …… 27

第23図　出土遺物実測図（瓦） …… 29

第24図　出土遺物実測図（陶磁器・土器） …… 30

第25図　調査地関係図……32

4．第二京阪道路関係遺跡（内里八丁遺跡）

第26図　調査地周辺遺跡分布図……34

第27図　調査区配置図……35

第28図　第２遺構面平面図……36

第29図　方形周溝墓実測図……37

第30図　出土遺物実測図……39

第31図　ＳＤ39出土遺物実測図……40

第32図　第３遺構面平面図……41

第33図　水田跡39稲株痕跡分布状況図……45

第34図　水田跡出土遺物実測図……46

5．木津地区所在遺跡

第35図　調査地位置図……52

（１）瓦谷古墳

第36図　瓦谷遺跡・瓦谷古墳調査区配置図……54

第37図　瓦谷古墳墳丘地形図……55

第38図　墳頂部断面図（内部主体横断面図）……56

第39図　内部主体平面図（副葬品配置図）……57

第40図　埴輪棺05実測図……58

第41図　埴輪棺06実測図……59

第42図　第１主体出土遺物実測図……62

第43図　第２主体出土遺物実測図……64

第44図　埴輪類実測図(1)……67

第45図　埴輪類実測図(2)……68

（２）瓦谷遺跡

第46図　調査区全体図（遺構平面図）……72

第47図　ＳＢ9031実測図……74

第48図　出土遺物実測図(1)……76

第49図　出土遺物実測図(2)……78

第50図　出土遺物実測図(3)……80

（３）瀬後谷遺跡（第４次調査）

第51図　調査区配置図……83

図 版 目 次

1．桑飼上遺跡

図版第１　(1)桑飼上遺跡全景(西から)

(2)竪穴式住居跡30・31(東から)

図版第２　(1)竪穴式住居跡26(南から)

(2)方形周溝墓１(南から)

図版第３　出土遺物　弥生土器

2．国道９号バイパス関係遺跡

(1)　八木嶋遺跡第２次

図版第４　(1)調査地遠景(上方が北)　(2)調査地遠景(上方が東)

図版第５　(1)A地区全景(北西から)　(2)B地区全景(東から)

図版第６　(1)C地区　木器出土状況

(2)C地区　調査風景

図版第７　(1)E地区　掘立柱建物跡ＳＢ23検出状況(西から)

(2)E地区全景(南から)

3．平安宮大極殿院跡

図版第８　(1)調査前全景(東から)

(2)土坑ＳＫ19瓦出土状況(北から)

図版第９　(1)近世遺構検出状況(東から)

(2)調査地完掘状況(東から)

図版第10　(1)調査地完掘状況(西から)

(2)部分断割断面(南から)

図版第11　出土遺物

4．第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)

図版第12　(1)A地区第１遺構面(北から)

(2)A地区第２遺構面(北から)

図版第13　(1)方形周溝墓(南から)　(2)埋葬主体部(南から)

図版第14　(1)溝ＳＤ39高杯出土状況

(2)溝ＳＤ39甕出土状況

図版第15　(1)A地区第３遺構面全景(南から)

(2)水田遺構及び稲株痕跡(南から)
図版第16　(1)東壁断面にみる水田42北側畦畔
(2)畦畔検出状況
図版第17　(1)稲株痕跡　(2)稲株痕跡列
図版第18　(1)A種稲株痕跡　(2)A種稲株痕跡断面
図版第19　(1)水田跡滞水状況(南から)
(2)水田58出土遺物
5.木津地区所在遺跡
(1)瓦谷古墳
図版第20　(1)調査前全景(南から)
(2)主体部全景(第2主体完掘状態　南から)
図版第21　(1)主体部完掘状態(南から)
(2)第1主体棺内木製容器内鏃出土状態(南から)
図版第22　(1)埴輪棺05検出状態(北西から)
(2)埴輪棺06全景(北東から)
図版第23　(1)埴輪棺07検出状態(北東から)
(2)墳丘裾柱列全景(北から)
図版第24　(1)仿製変形四獣鏡(獣首形鏡)
(2)靫
図版第25　(1)銅鏃・鏃形石製品
(2)方形板革綴短甲
図版第26　(1)第1主体出土鉄鏃
(2)第2主体靫内出土鉄鏃
図版第27　(1)第1主体出土鉄ヤリ
(2)第2主体出土鉄ヤリ・鉄ホコ
図版第28　(1)小札革綴冑
(2)埴輪棺07使用特殊壺(形埴輪)
(2)瓦谷遺跡
図版第29　(1)調査地全景(西から)
(2)SK9034(手前)・SK9035全景(東から)
図版第30　(1)SB9031全景(北西から)
(2)木樋状木製品出土状態(北東から)

図版第31　(1)ＳＤ9010遺物出土状態
(2)ＳＤ9007遺物出土状態

（３）瀬後谷遺跡

図版第32　(1)１号窯検出状態（東から）
(2)２号窯検出状態（北東から）

１．桑飼上遺跡平成２年度発掘調査概要

１．はじめに

舞鶴市桑飼上遺跡の発掘調査は、今年度で４年目になる。この遺跡は、舞鶴市志高遺跡や綾部市青野遺跡と同じく由良川の自然堤防上に立地する。近年、由良川中～下流域は発掘調査が盛んになり、多数の土坑が検出された三宅遺跡や分銅形土製品が出土した興遺跡等、著名な遺跡が見つかっている。

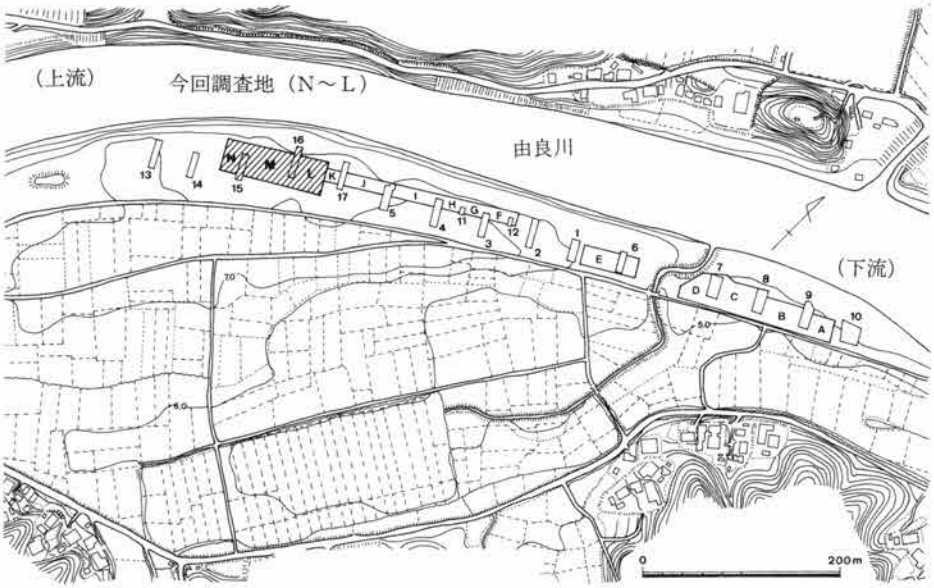
第１図　遺跡所在地

この調査は、由良川改修工事に先立ち、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所の依頼を受けて、当調査研究センターが継続して実施している。今年度は、昨年度調査区の上流にあたり、遺跡の西端部分を調査した。現地調査は、当調査研究センターの調査第２課調査第１係長水谷寿克、同調査員細川康晴、石崎善久、岸岡貴英、野島　永が担当した。調査期間は平成２年４月３日～翌３年３月５日を要し、調査面積は約4,000㎡である。整理作業は岸岡貴英が担当した。

調査に際しては、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所・舞鶴市教育委員会社会教育課・京都府教育委員会・同中丹教育局・同舞鶴地方振興局・京都府立丹後郷土資料館等の多くの関係諸機関、さらに地元の桑飼上地区の方々等の御協力を得た。また、地元桑飼上地区をはじめ有志の方々には、作業員・整理員・調査補助員として調査に従事していただいた(注1)。加えて多くの方々から御指導・御教示を賜った(注2)。記して感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は建設省近畿地方建設局が負担した。

２．調査概要

今年度の調査の対象となったのは、これまでの調査でもっとも上流の地区（Ｌ～Ｎ）である。この地区は昭和63年度に試掘調査（試掘トレンチ13～17）を行っており、その結果試掘トレンチ15・16で上下２層の遺構面を確認した(注3)。つまり、上層では奈良時代を中心とした



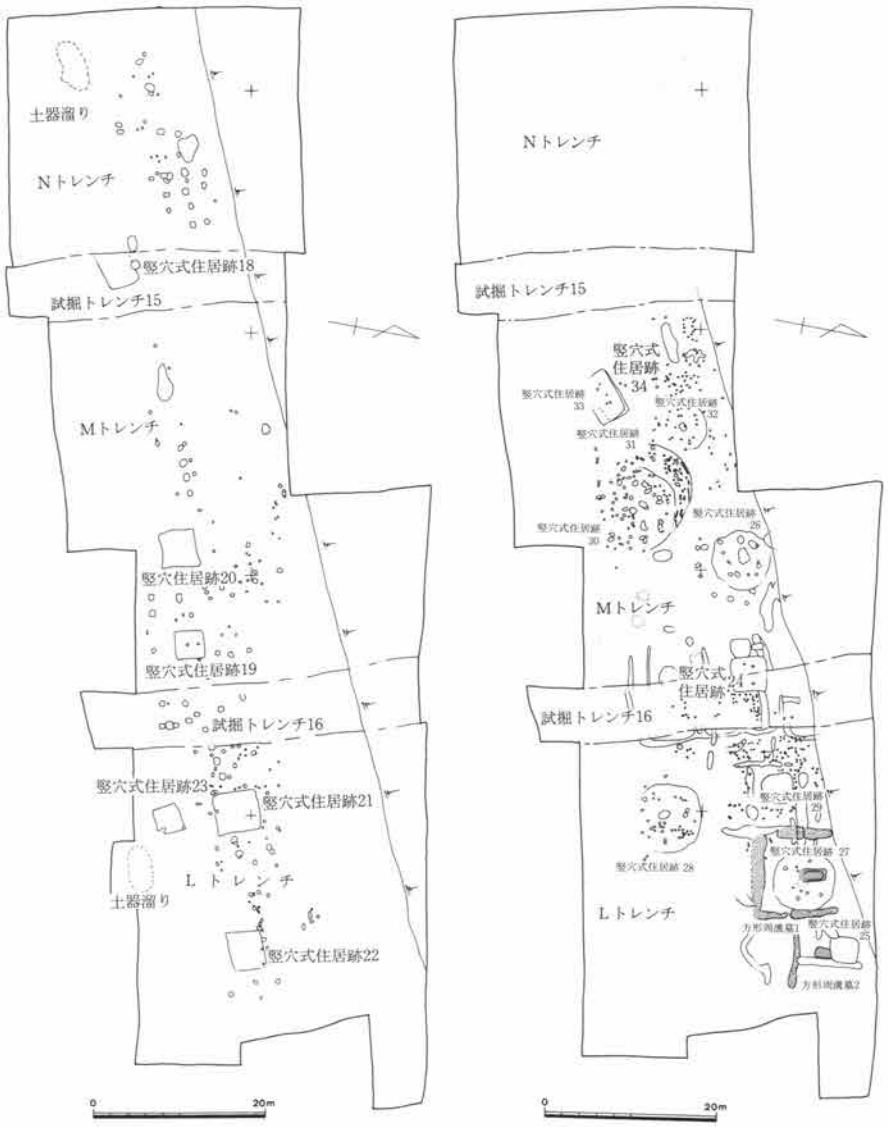
第２図　調査区配置図

時期の竪穴式住居跡や方形の柱掘形をもつ掘立柱建物跡群を、下層では弥生時代の竪穴式住居跡や土坑などを検出しており、上下２層にわたって集落跡の広がりが予想された。

今回の調査では、これらの結果を参考にして、試掘トレンチ15・16を中心に東西120m×南北35mの部分（L～Nトレンチ）に調査トレンチを設定した。

上層遺構の調査は、近世以降の堆積土をすべて重機で掘削し、さらに上層遺構面に達するまで人力で荒掘りし、その後遺構面の精査を行った。近世以降の堆積土の下には、M～Nトレンチにかけて、奈良時代後半から平安時代初めの包含層である茶褐色砂質土が広がっていた。しかし、この面では、Nトレンチの土器溜り以外、顕著な遺構を検出できなかった。そこでL～Mトレンチを中心にして、古墳時代後期末～奈良時代前期の包含層である青灰色粘土と、上層では奈良時代前期の遺物がみられる黄褐色砂質土の面まで掘り下げた。その結果、竪穴式住居跡や方形の柱掘形を全面にわたって検出した。竪穴式住居跡は計６基あり、そのうち１基（竪穴式住居跡23）は「青野型住居跡」といわれているものである。この住居跡は、他の住居跡より少し検出面が低い。このことから、青灰色粘土自体はいくつかの遺構面を形成した可能性がある。しかし、遺構面として広がりを確認できたのは１面だけであった。また、方形の柱掘形は一辺60～80cmの大きさをもち、トレンチ全体を東西帯状に広がる。しかし、掘立柱建物の規模や規格等を想定することはむずかしい。他に古墓を１基検出した。棺内から数珠や古銭が出土したが、時期を確定するまでには至っていない。

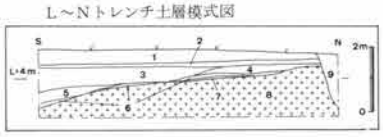
下層遺構の調査は、上層遺構面から下層遺構面まで深いところで１m近いレベル差があったため、一部重機を使用し、かなりの部分を人力により掘削した。ここで下層の状況を見ると、黒灰色シルトや黄褐色砂質土は、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物を含む。その



上層遺構面（古墳時代後期～奈良時代）

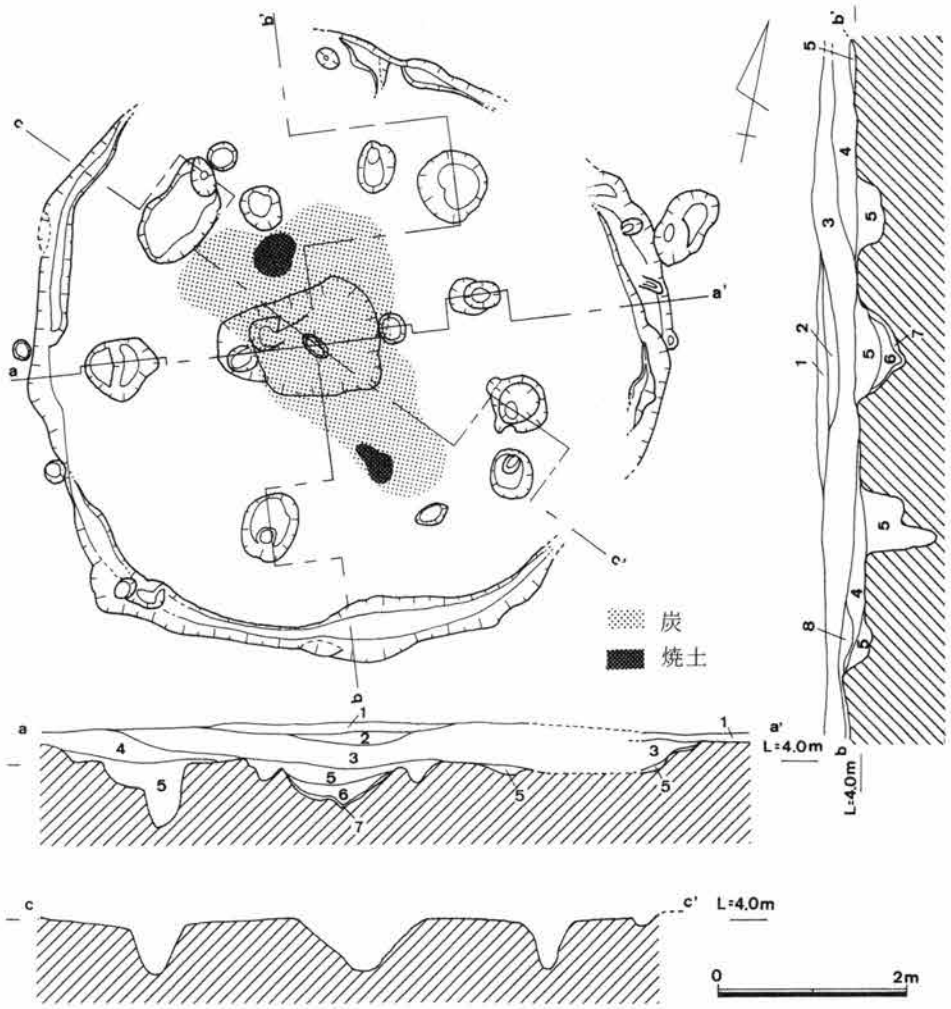
下層遺構面(弥生時代中期～古墳時代前期)

L～Nトレンチ土層模式図



1 灰茶褐色砂質土（近世以降の堆積土）
2 茶褐色砂質土
3 青灰色粘質土
4 黄褐色砂質土
5 黒灰色シルト
6 黄褐色粗砂
7 黒色シルト
8 黄褐色粘土
9 茶褐色粗砂（現由良川の氾濫原）

第３図　検出遺構図

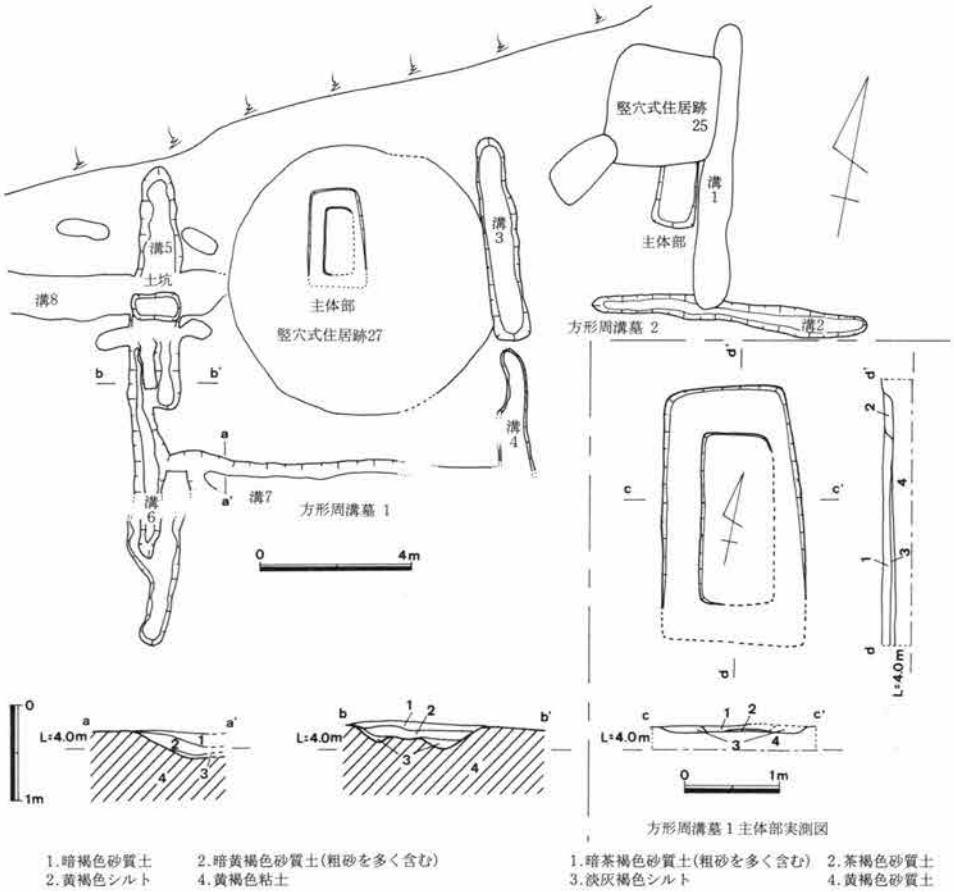


第４図　竪穴式住居跡26実測図

1.暗茶褐色砂質土　2.茶褐色粗砂　3.茶褐色砂質土　4.暗黄褐色砂質土　5.淡茶褐色砂質土
6.黄褐色シルト　7.黒色シルト(炭層)

下層にある無遺物層の黄褐色粗砂は、厚薄をもちつつ南半分に分布する。以下は、部分的に弥生時代中期の包含層である黒色シルトが存在しつつ、安定したベース面である黄褐色粘土に至る。下層の遺構の大部分は、黄褐色粘土の上面で検出しているが、一部の遺構は黄灰色粗砂の上面で検出している。遺構としては、弥生時代の方形周溝墓・竪穴式住居跡や古墳時代の竪穴式住居跡、そのほかに土坑・ピット等を多数検出している。

また、弥生時代のベース面となっている黄褐色粘土層下の状況を確認するため、上層遺構調査終了後、下層遺構検出時に重機により掘削を行った。地点は、Ｎトレンチ南隅であり、黄褐色粘土上面から約2.0～2.5m程掘削した。土層は、黄褐色粘土～緑灰色シルトに



第５図　方形周溝墓1・2実測図

変化しつつも、遺構・遺物は確認できなかった。そのため、この地区は黄褐色粘土の上面で調査を終了した。

３．遺構と遺物について

上層遺構・下層遺構とも多数の遺構が検出された。個々の遺構のおおまかな概要については、すでに報告しているので、今回は竪穴式住居跡26と方形周溝墓のみ報告する[注4]。出土遺物は、青灰色粘土や黒灰色シルトを中心にして、須恵器・土師器・弥生土器・石器・玉類等が多数出土し、ほかに玉作り関係遺物もみられた。今回は、紙面の都合から出土した弥生土器のうち、代表的なものを報告するにとどめる。また、個々の遺構・遺物の詳細な内容の検討は、今後の整理報告に譲ることにする。

①竪穴式住居跡26

直径6.8mのほぼ円形の竪穴式住居跡である。壁の残存高は約25cmを測る。周溝は断続的

にめぐっている。床面はほぼ平坦である。焼土は中央土坑をはさんで２か所みられ、炭が中央部分に広がっていた。柱穴と思われるピットは十数個検出された。柱穴底部のレベルと配置から５本柱と思われる。中央土坑は隅丸方形状になる。その堆積土は、３層に分けられるが、最下層はシルト質の炭層⑦が薄く堆積する。また、竪穴式住居跡の埋土②・③層からは、多数の土器が出土した。住居廃棄後、一括投棄された可能性がある。ほかに石斧や鉄斧等も出土した。

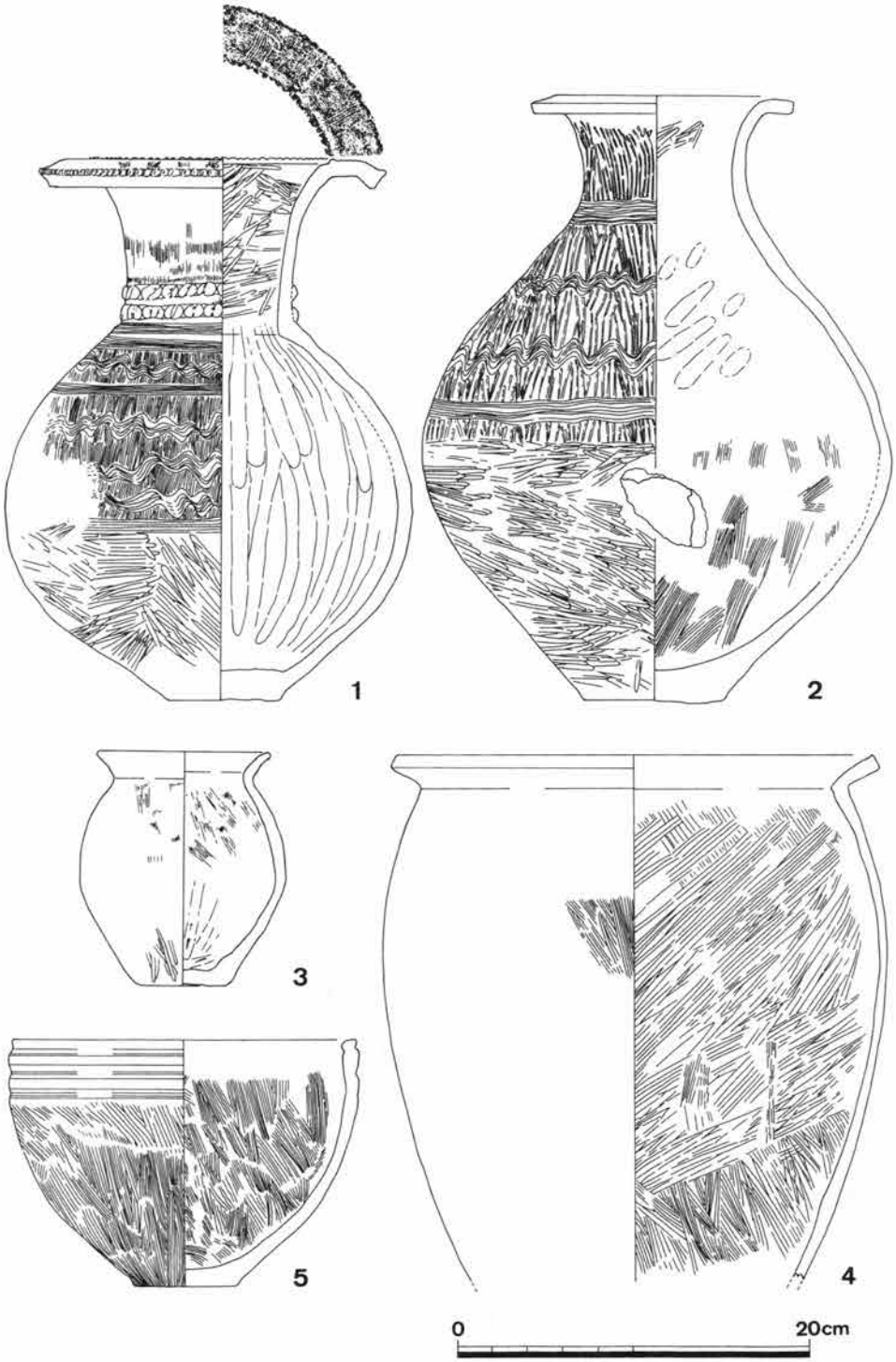
②方形周溝墓（１・２）

方形周溝墓１は、主体部１基と「コ」の字形に溝を検出した。規模及び形態を復原すると、約9m×11m程の長方形プランになる。埋葬施設は第１主体部が竪穴式住居跡27の埋土を掘り込むかたちで検出された。墓壙の規模は長さ2.5m×幅1.5m、棺規模は長さ1.8m×幅0.7mに推定できる。土器は溝５～溝７で多量に出土した。溝の堆積土は上層①・中層②・下層③の３層からなり、ほとんどの土器は上層①・中層②から出土した。また、溝５の底面では長方形の土坑を検出した。溝内埋葬の可能性を指摘したい。

方形周溝墓２は、２方向の溝と埋葬施設を１基検出した。溝２は方形周溝墓１と共有する。主体部は隅丸長方形の墓壙を持ち、溝と主軸を同じくしている。また墓壙の北側を竪穴式住居跡25により切られている。主体部からは、木棺痕跡を検出できなかった。墓壙規模は長さ1.8m×幅0.8mに推定できる。墓壙の底面から14個の管玉が出土した。

③出土土器

１・２は広口壺である。１は球形の体部を持ち、体部中央に最大腹径がある。口縁は水平に開いた後、少し下方に垂れ下がる。文様は口縁内面に１条の刻み目凸文帯を付加し、頸部に２条の指頭圧痕文凸帯がめぐる。口縁部上端には、刻み目文が施される。また、口縁部内面を櫛描直線文と櫛描波状文により加飾している。体部上半部には櫛描直線文と櫛描波状文が交互に配されるが、胴部の櫛描文は一部ミガキにより消されている。口縁部にも、櫛描直線文と櫛描波状文が交互に施されている。調整は外面の頸部～体部上半部にハケを、体部下半部にはミガキが施されている。体部内面には強いユビナデの跡が明瞭に残る。また頸部内面にはていねいなミガキが見られる。口径約19.7cm・器高約31.0cm・底径約6.4cm・最大腹径約22.8cmを測る。２は水平に広がる口縁部を持ち、体部中央に最大腹径を有する。胴部の下半には焼成後の穿孔がみられる。文様は、櫛描直線文と櫛描波状文が体部上半部に施されている。調整は、外面の体部上半部に荒いハケ目を、下半部には横もしくは斜め方向のミガキを密に施す。内面は体部下半部～底部にハケ目が、上半部にはユビナデの跡が明瞭に残る。頸部内面にはミガキが見られる。口径約14.6cm・器高約34.8cm・底径約7.9cm・最大腹径約26.1cmを測る。３は小型、４は大型の甕である。３の口縁は「く」



第６図　出土土器実測図

1.Ｌトレンチ弥生時代包含層　2.竪穴式住居跡29埋土　3・4.竪穴式住居跡26埋土
5.方形周溝墓１(溝７埋土)

の字に外反し、端部は丸くおさめる。調整は、外面をハケ目ののちミガキを施す。内面はハケ目を施したのち、ユビナデで仕上げている。口径9.6cm・器高13.0cm・底径4.9cm・最大腹径11.7cmを測る。４は長胴気味の体部をもつ。口縁は「く」の字に外反し、端部は面を持つ。内外面ともハケ目を施している。口径27.2cm・残存高29.3cmである。５は、口縁部付近に３条の凹線文をめぐらす鉢である。口縁端部はやや内側につまみ出し、内傾する面をもつ。調整は、外面を体部・底部ともハケ目で仕上げている。内面は口縁部を回転ナデ、体部をハケ目、底部を不定方向のナデで仕上げている。口径20.7cm・器高14.0cm・底径5.9cmを測る。

４．まとめ

今回の調査で、桑飼上遺跡では弥生時代中期から奈良時代まで、断続的ではあるが、集落が形成され続けたことが明らかになった。特に、弥生時代中期・古墳時代中期・奈良時代前半の資料は集落研究の上で重要である。詳細な検討は今後の報告に譲りたい。

最後に、桑飼上地区の佐藤　哲氏には、さまざまな面でご協力いただいた。記して感謝の言葉にかえたい。

（岸岡貴英）

注１　調査に参加した方々は以下のとおりである（敬称略）。

臼井三郎・臼井信夫・倉橋吉雄・佐藤健一・佐藤哲・佐藤又健・土井康雄・谷口正行・宮野勝行・吉岡勇治・吉岡譲・井上久子・臼井あき子・梅原トシ江・江口啓子・河合美智子・河合好乃・嵯峨ひさ江・佐藤弘美・佐藤増江・佐藤修子・佐藤ヤス子・新宮久野・谷口成美・土井淑子・中村ひろみ・野田友子・本田美津子・真下朝野・真下トメ子・真下幸江・水口和子・矢野千代子・荒堀裕巳・岡本泰典・加藤晴彦・木村雅哉・高田洋・辻川哲朗・西角雅士・松本達也・上田貴子・佐藤佳美・野田裕子・藤井路子・小谷弥太郎・𠮷なをみ・井之本知美・臼井宏美・長田京子・日置京子・布川依子・真下春美・貢鏡子・村上喜美子

注２　御指導、御助言いただいた方は次のとおりである（敬称略）。

小橋拓司・佐藤晃一・杉原和雄・杉本嘉美・堤圭三郎・成瀬敏郎・長谷川達・肥後弘幸・細川康晴・森下　衛・吉岡博之

注３　細川康晴「桑飼上遺跡昭和63年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第35冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

注４　岸岡貴英「桑飼上遺跡の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第40号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991

２．国道９号バイパス関係遺跡 平成２年度発掘調査概要

はじめに

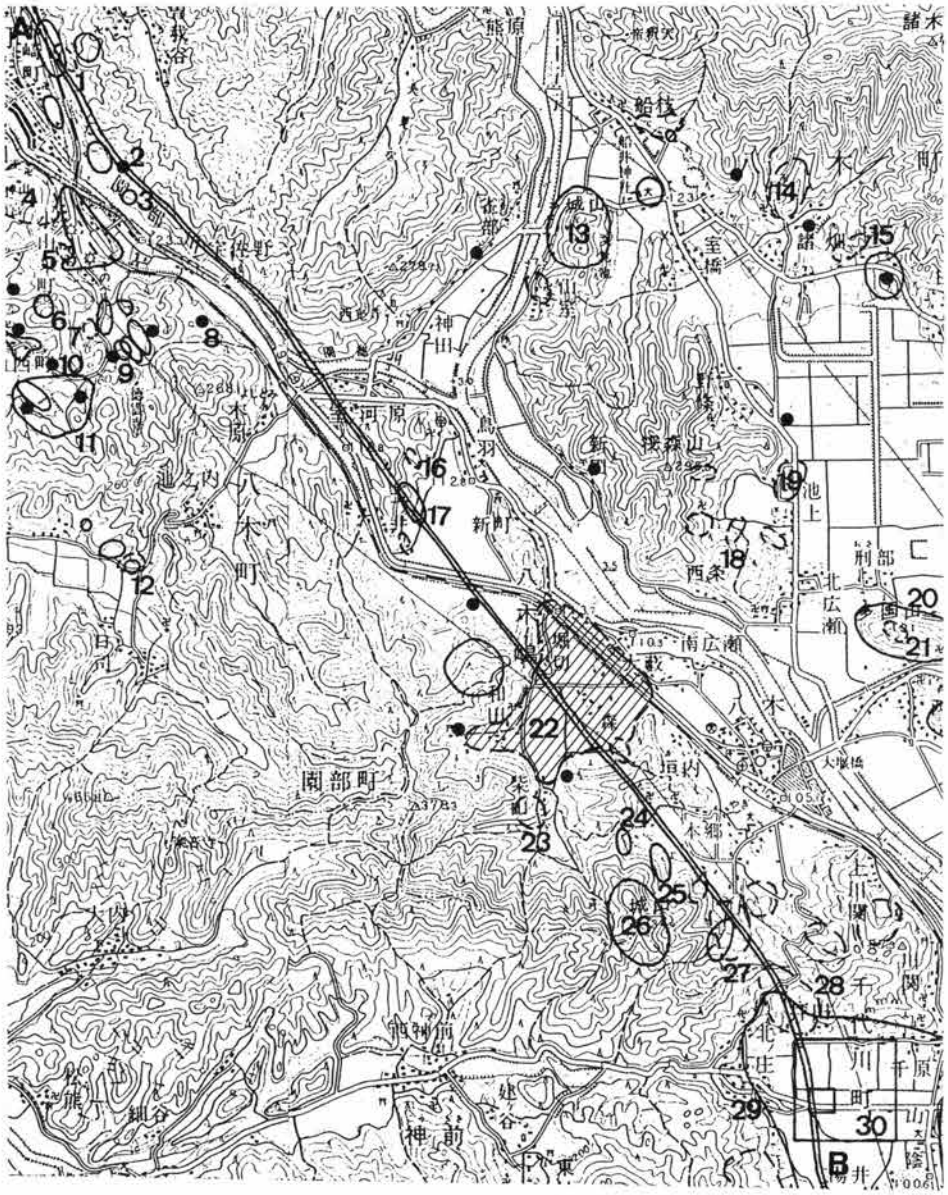
国道９号バイパス関係遺跡は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、国道９号バイパス（京都縦貫道）建設に伴い調査を行う遺跡の総称である。バイパス予定路線は、京都市右京区大枝沓掛町から亀岡市・船井郡八木町・園部町を経て丹波町須知へ至る全長約32kmである。これに係る遺跡の発掘調査は、昭和50年度から行っており、その成果は京都府教育委員会・当調査研究センターが刊行している発掘調査報告書・概報で報告している。(注1)

今年度発掘調査を実施したのは、八木嶋遺跡、川向古墓群、川向北１号墳である。八木嶋遺跡は、大堰川に流れ込む東所川の堆積作用により形成された扇状地の自然堤防上に立地する。昨年度路線内の10数か所で試掘調査を行ったところ、古墳時代～鎌倉時代を中心とする遺構・遺物が確認されたため、今年度は昨年度の試掘結果を踏まえて面的調査を実施することになった。

川向古墓群は、園部町大字小山東に所在する。バイパス予定路線が決定した後、再度分布調査を行ったところ、小字川向に後期古墳で４基以上からなると思われる川向北古墳群や、中世墓の可能性がある川向古墓群を新たに確認したため、協議の後、今年度は川向古墓群として遺跡の試掘調査を実施することになった。川向北１号墳は、今年度は地形測量のみを行った。

八木嶋遺跡の発掘調査は、平成２年４月17日から平成３年３月8日まで、約8,000㎡を対象として実施した。川向古墓群は平成２年12月17日から３月11日まで、約600㎡を対象に実施し、同期間中に川向北１号墳の地形測量をあわせて実施した。調査は、調査第２課調査第２係長辻本和美、同調査員田代　弘、鵜島三壽、柴　暁彦が担当した。調査に際し、八木町教育委員会、園部町教育委員会、京都府教育委員会、京都府南丹教育局などの諸機関から多大な協力をいただいた。また、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員、整理員、調査補助員として参加協力があった。記して謝意を表したい。なお、発掘調査にかかわるすべての経費は建設省近畿地方建設局が負担された。本書は、各遺跡の担当者が執筆し、文末に名を記した。(注2)

（鵜島三壽）



第７図　調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

1.善願寺古墳群　2.川向北１号墳　3.向川原経塚　4.天神山古墳群　5.春日神社裏山古墳群
6.小山城跡(五合山城)　7.小山古墳群　8.うさの古墳　9.徳雲寺窯跡群　10.柿木谷古墳
11.大向古墳群　12.カマカケ窯跡群　13.新庄城跡　14.大谷口古墳群　15.福本古墳群
16.鳥羽古墳群　17.鳥羽瓦窯跡　18.寺内古墳群　19.狐塚古墳群　20.刑部城跡(鞍谷山)
21.多国山古墳群　22.八木嶋遺跡　23.坊田古墳群　24.堂山窯跡　25.古谷窯跡
26.八木城跡(神前北山城跡)　27.小谷古墳群　28.拝田古墳群　29.千代川遺跡　30.丹波国府推定地
A～B.バイパス予定路線

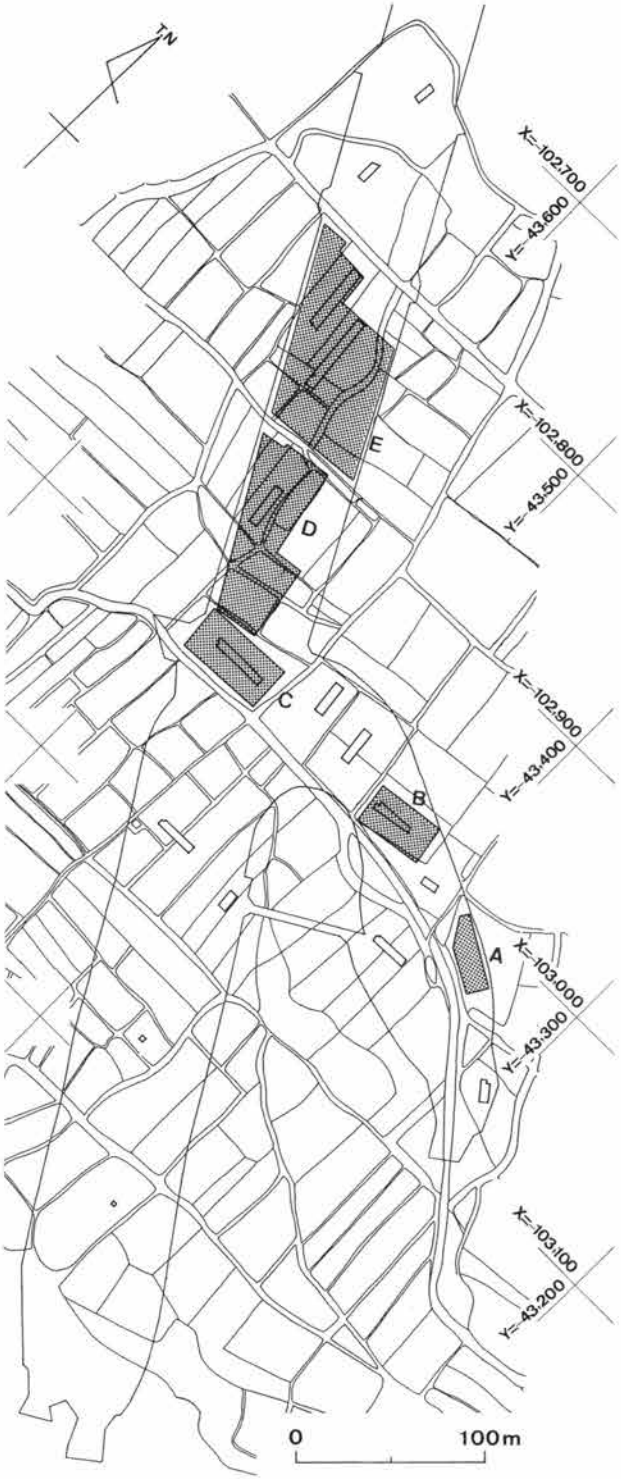
（1）八木嶋遺跡第２次

１．はじめに

八木嶋遺跡は、船井郡八木町八木嶋に所在し、亀岡市との境界にそびえる城山（標高330m）の北麓に位置している。遺跡の範囲は、この城山から流れる東所川の堆積作用により形成された扇状地上のほぼ全域に及んでいる。

八木嶋遺跡の位置する扇状地の周辺には、森古墳群、神田古墳、柴山古墳、坊田古墳群などの古墳群が分布している。これらの中でも、坊田古墳群は５基とまとまって確認されている。坊田５号墳は、1978年京都府教育委員会により、発掘調査が行われており、概要の判明する古墳として貴重である。(注3) この古墳は、内部主体に横穴式石室を持つ、直径16mの円墳である。築造時期は、６世紀末から７世紀初頭にかけてであり、７世紀前半まで追葬されたことがわかっている。口丹波地方は、横穴式石室の発掘調査が少ないこともあって、貴重な成果をあげた古墳といえる。

八木嶋遺跡では、昨年度の



第８図　調査区配置図（1/4,000）

試掘調査の結果、７・８トレンチで掘立柱建物跡、５トレンチで古墳時代の溝、13トレンチで鎌倉時代の掘立柱建物跡、溝などを確認した。遺物は古墳時代から鎌倉時代のものがまんべんなく出土し、なかでも緑釉・灰釉陶器などが注目される。したがって、これらのトレンチを中心に面的調査を実施することにした。東所川から南は試掘したものの、後世の削平が著しく、表土を除去するとすぐに地山が現われ、遺構は認められなかった。

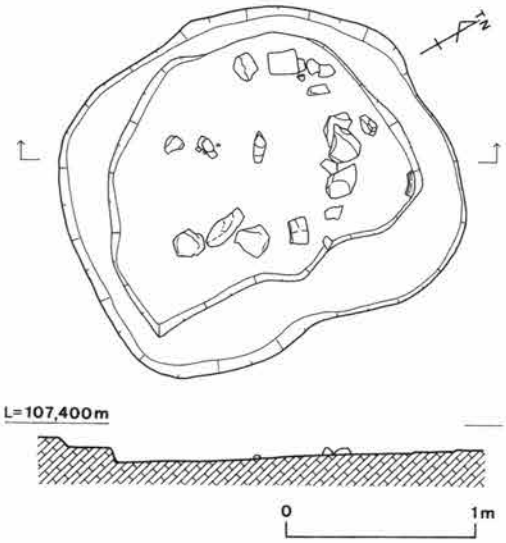
２．調査の概要

発掘調査にあたっては、まず、昨年度の調査成果を踏まえて、遺構・遺物が良好な状態で確認されたトレンチを中心に、Ａ～Ｅの５地区にわたって調査区を設定して発掘調査をはじめた。以下、簡単に各調査区の状況について説明する。

①検出遺構

Ａ地区

今回発掘調査を実施した調査区の中では一番南側に位置している。調査区の南側で、直径20cmを測る柱穴を数個検出したものの、建物跡としてまとまって確認するには至らなかった。調査区北側では、鎌倉時代の土坑を３基確認した。土坑ＳＫ01は、不整円形を呈し、長軸約2.1m・単軸約2mを測る。中からは、拳大の石とともに瓦器椀、土師器皿などの小破片がまとまって出土した。順次掘り進めていくと、土坑の中には比較的偏平な石を用いて約1m四方の区画を設けていた。ＳＫ02は、一辺約1.5mの隅丸方形を呈する。土坑の中央部は、径約60cm・深さ40～50cmで掘り込まれている。この部分のみ埋土は青灰色粘砂土であった。この中からは白磁椀、瓦器椀、土師器皿などが重なった状態で出土した。土坑の形、土器の出土状況から墓の可能性が考えられる。



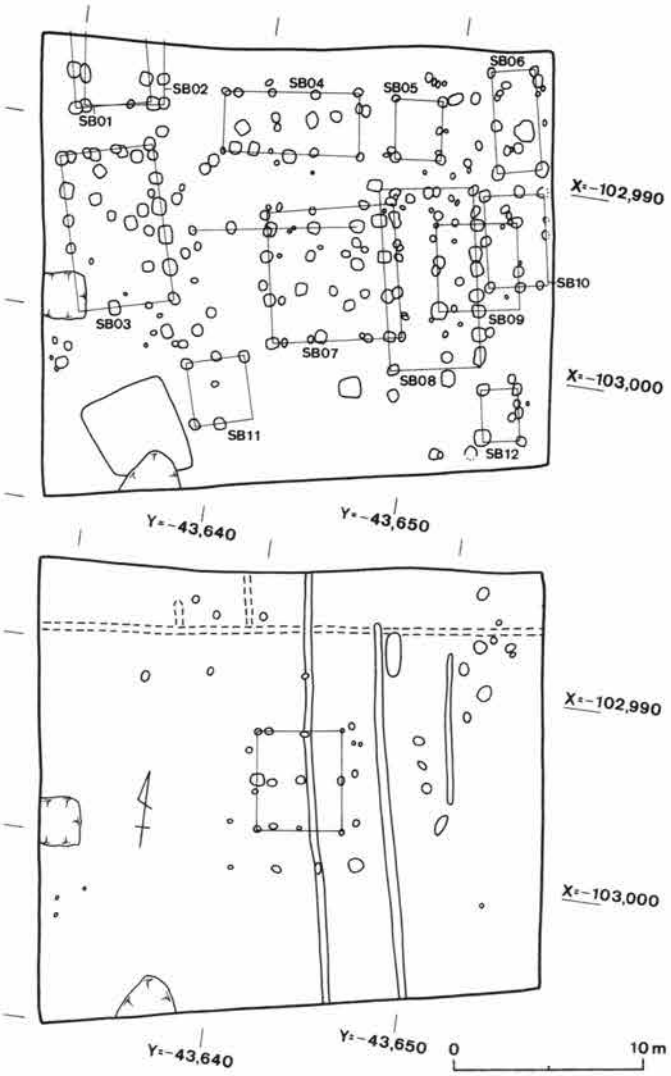
第９図　Ａ地区土坑ＳＫ01実測図(1/40)

この調査区からは、包含層出土の遺物として、布留式の甕などが摩滅することなく出土したため、周辺には古墳時代の遺構が広がっているものと思われる。また、奈良・平安時代の須恵器とともに、風字硯が１点出土した。

Ｂ地区

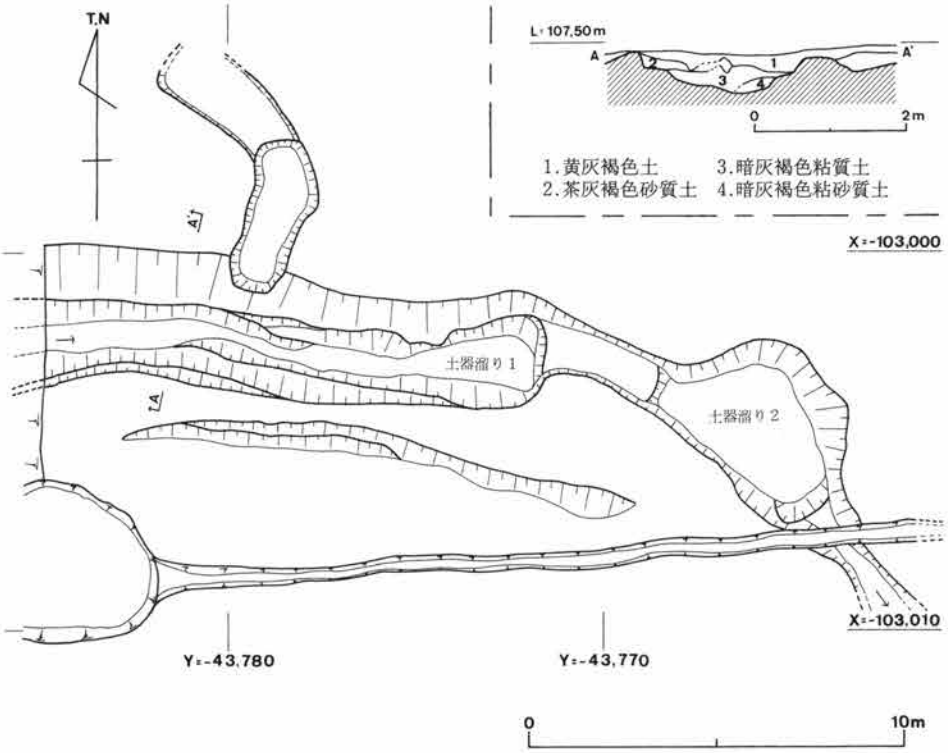
この調査区では、遺構面が２面確認された。上層からは、鎌倉時代の溝、

土壙墓、掘立柱建物跡などを確認した。溝は、南北方向に走るもので、幅約20cm・深さ約10cmを測る。掘立柱建物跡は、東西１間・南北１間の規模である。柱穴は円形で、直径約30cm・深さ約20cmを測る。柱穴内より瓦器の小片が出土している。土坑は、この掘立柱建物跡から約５mのところに確認された。形は長楕円形を呈し、長軸約2.4m・短軸約0.8mである。土坑内は、人頭台の板石を土坑の両端に面をもたせている。この土坑の中からは、わずかに土師器の細片が出土した。



第10図　Ｂ地区遺構平面図（1/40）
（上：平安時代　　下：鎌倉時代）

下層で、平安時代の掘立柱建物跡を12棟確認した。掘立柱建物跡ＳＢ03は、桁行３間（５m）×梁間５間(8.4m)を測る大きな建物跡である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cmのものと、円形で直径約40cmのものの両方がある。ＳＢ08は、今回検出した建物跡の中でもＳＢ03と同様に規模の大きな南北棟の建物跡である。桁行２間（５m）×梁間５間(9.6m)で、面積は48m²を測る。これらの建物跡は、柱穴の中に緑釉陶器の椀が入っていたものなどがあることから、いずれも平安時代のものと考えられる。また、遺物包含層中であるが、風字硯も確認されている。Ａ地区で出土したものとあわせると２点となり、この掘立柱建物跡群の性格を考える上でも貴重な資料である。この地区で確認された平安時代の建物跡は調査地外まで広がるので、Ａ・Ｂ地



第11図　C地区　溝平面図(1/200)

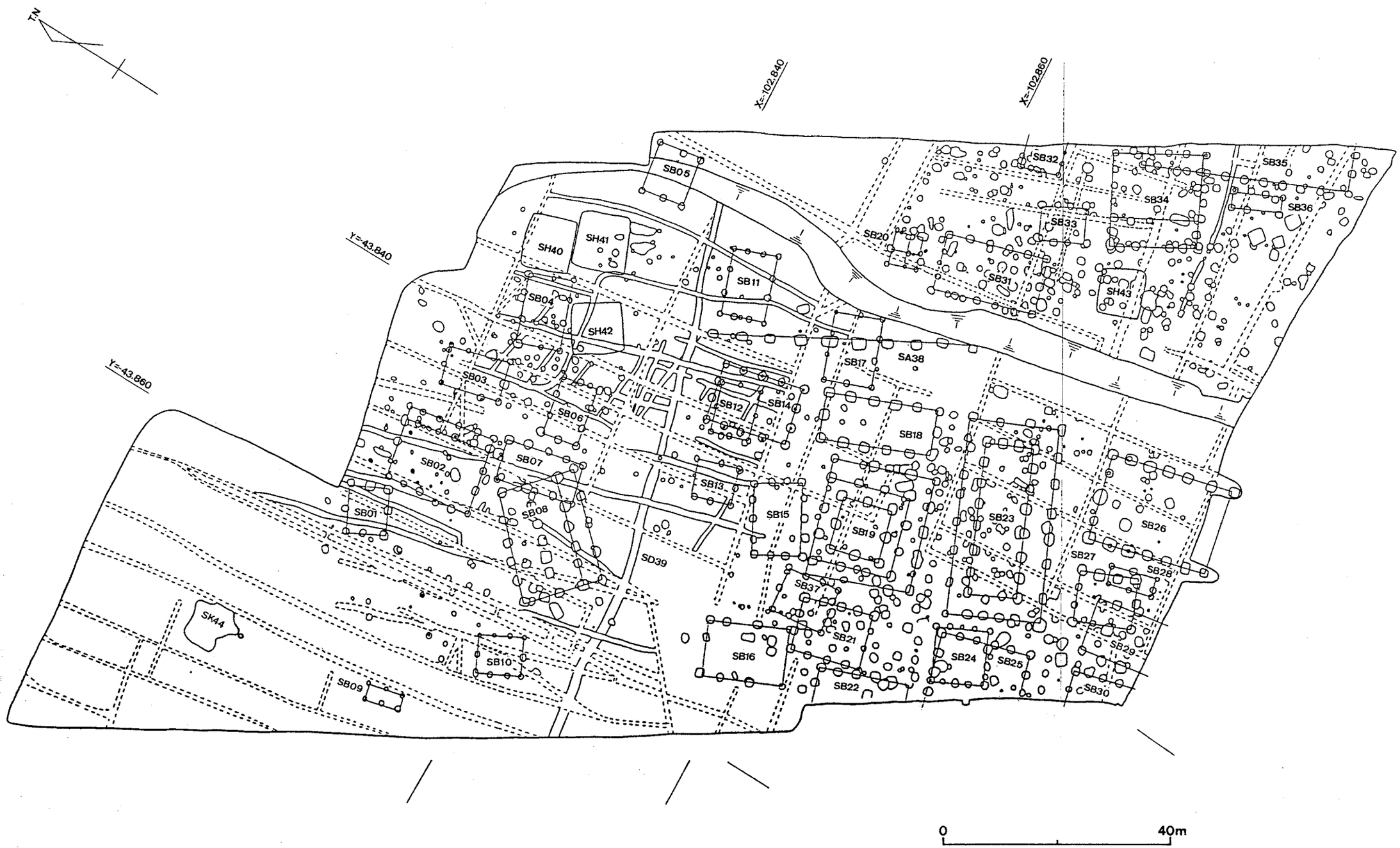
区周辺には平安時代、官衙に関連するような建物跡群が存在したものと思われる。

C地区

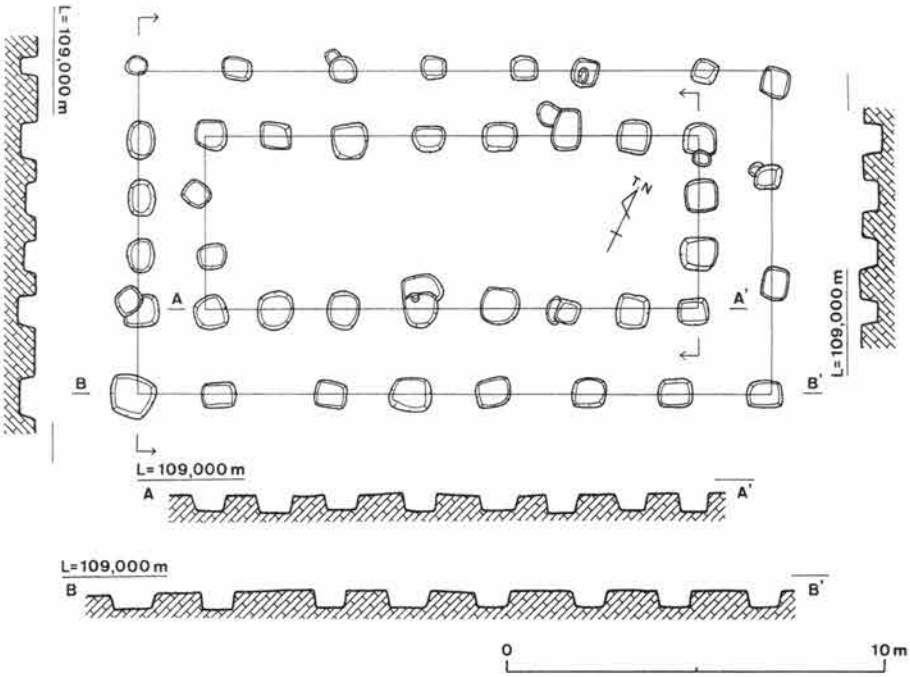
この調査区は、隣に東所川が流れ、地形的には、周辺よりもやや低くなっている。後世の削平を受けたためか柱穴などは確認し得なかったが、調査地内を北西から南東方向に流れる溝を１条検出した。

溝の構築には、まず、埋没した自然流路の上に青灰色粘土を積み上げ、平坦面を造る。この平坦面に溝を造るために、直径約30cm・長さ約15mの大きさの木を横倒しに据え、この木が安定するようにつっかい棒のように木を斜めに差し込み、その上から順次粘土を積み溝の肩部を構成している。こうしてでき上がった溝の肩部には杭を打ち込み、自然木、建築部材、中には柱を利用してしがらみを造っている。この柱は、ほぞも残る完形で、長さ約2.5m・直径約10cm、底部から80cmのところに摩滅跡がある。溝内には、土器溜りが２か所認められ、ここから須恵器・土師器・木器などが整理箱にして約150箱出土した。

土器溜り１は、多量の須恵器・土師器とともに、最下層からは、製塩土器の小破片、土玉4個、木製鏃、動物の骨が出土している。土器溜り２は、溝の膨らんだ部分で、いわゆる溜り状を呈し、形は、長軸５m・短軸４mを測る不整円形である。この土器溜り２の特徴



第12図　E地区遺構平面図(1/800)



第13図　掘立柱建物跡ＳＢ23実測図(1/200)

は、多量の須恵器・土師器とともに、木器の未製品がまとまって出土した点である。器種としては鋤が一番多く、その他、竪杵や建築部材なども出土した。出土した木器はすべて未製品であることから、この溜りの部分に木器の未製品を集積していたことが考えられる。この溝の上層遺物として、ＴＫ209併行期の土器が出土するが、この時期にこの溝は埋没したと考えられる。溝周辺は、周囲に比べて低いため、埋土の状況から沼状を呈していたものと思われ、埋土中からは墨書土器や古銭(延喜通宝、乾元大宝)などが出土した。

Ｄ地区

Ｃ地区での溝の検出により、それに伴う住居跡などの確認が期待されたが、Ｃ地区に接する南半分は、近世の土坑を数基確認したのみであった。Ｅ地区に接する北半部からは、掘立柱建物跡４棟、井戸跡１基などを検出した。掘立柱建物跡や井戸跡に伴う遺物はないため、遺構の帰属時期などは不明である。

Ｅ地区

この調査区からは、掘立柱建物跡、柵列、竪穴式住居跡、溝、土坑などが確認された。Ｅ地区の調査面積は、約4,000㎡あり、ここから掘立柱建物跡37棟、竪穴式住居跡4基、土坑1基などを検出した。建物跡の時期は、出土した遺物から見て６世紀末から７世紀前半にかけてのものに限られる。掘立柱建物跡の中でもＳＢ23は東西棟で四面廂を持つ特に大き

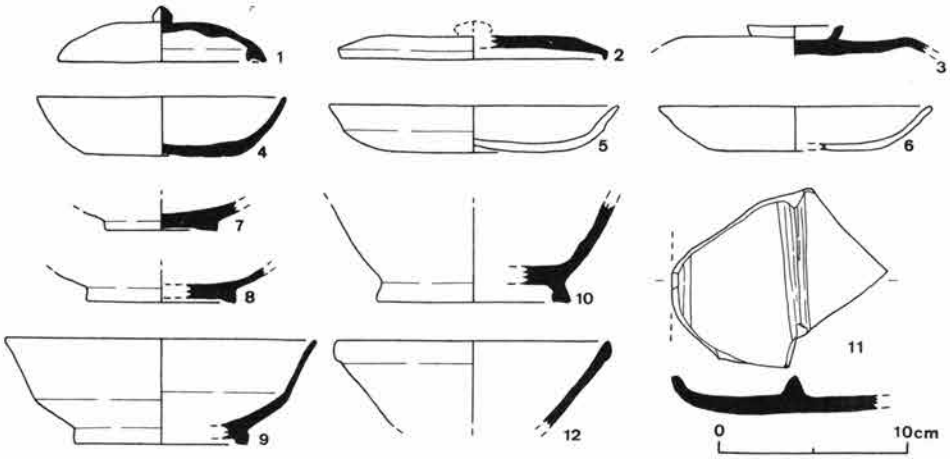
な建物跡である。身舎は桁行７間×梁間３間で、廂の部分を含めると東西17m×南北8.7mを測り、建物跡の面積は140m²を越える。柱掘形の大きさは、方形で一辺約60～80cmを測る。出土した土器から建物跡の時期は7世紀前半と考えられる。身舎と廂は柱通りがそろっておらず、廂は梁間西側５間、東側３間で、変則的な平面形を呈している。ＳＢ19も四面廂を持ち、身舎は、２間×２間で、廂は３間×３間である。北側を除いて４間の規模で孫廂が取り付いている。ＳＢ26は桁行６間×梁間４間の南北棟の建物跡である。面積は、東西7.5m×南北11.2mの約85m²であり、ＳＢ23に次いで大きなものである。この建物跡の柱掘形の大きさは37棟の中でも一番大きく、一辺約１mを測る。

これらの建物跡群の周囲には大規模な堀などは確認されていない。ただし、同時期の溝が１条検出されている。この溝ＳＤ39は、ＳＢ23から30m北にあり、東西方向にのびるもので、溝の幅は約80cm・深さ約20cmを測る。この溝の北側には、柱掘形のやや小さい建物跡群があるため、掘立柱建物跡群を区画する溝だと考えられる。また、この溝から南に向かって柵列がのびる。柵列ＳＡ38は、９間(24.5m)以上である。柱掘形は、約70cm×90cmと大型で、長方形のものが多い。掘立柱建物跡群と同時に竪穴式住居跡も検出されている。出土遺物が土師器の細片に限られ、時期は不明であるが、掘立柱建物跡との切り合い関係はないのでほぼ同時期のものであろう。

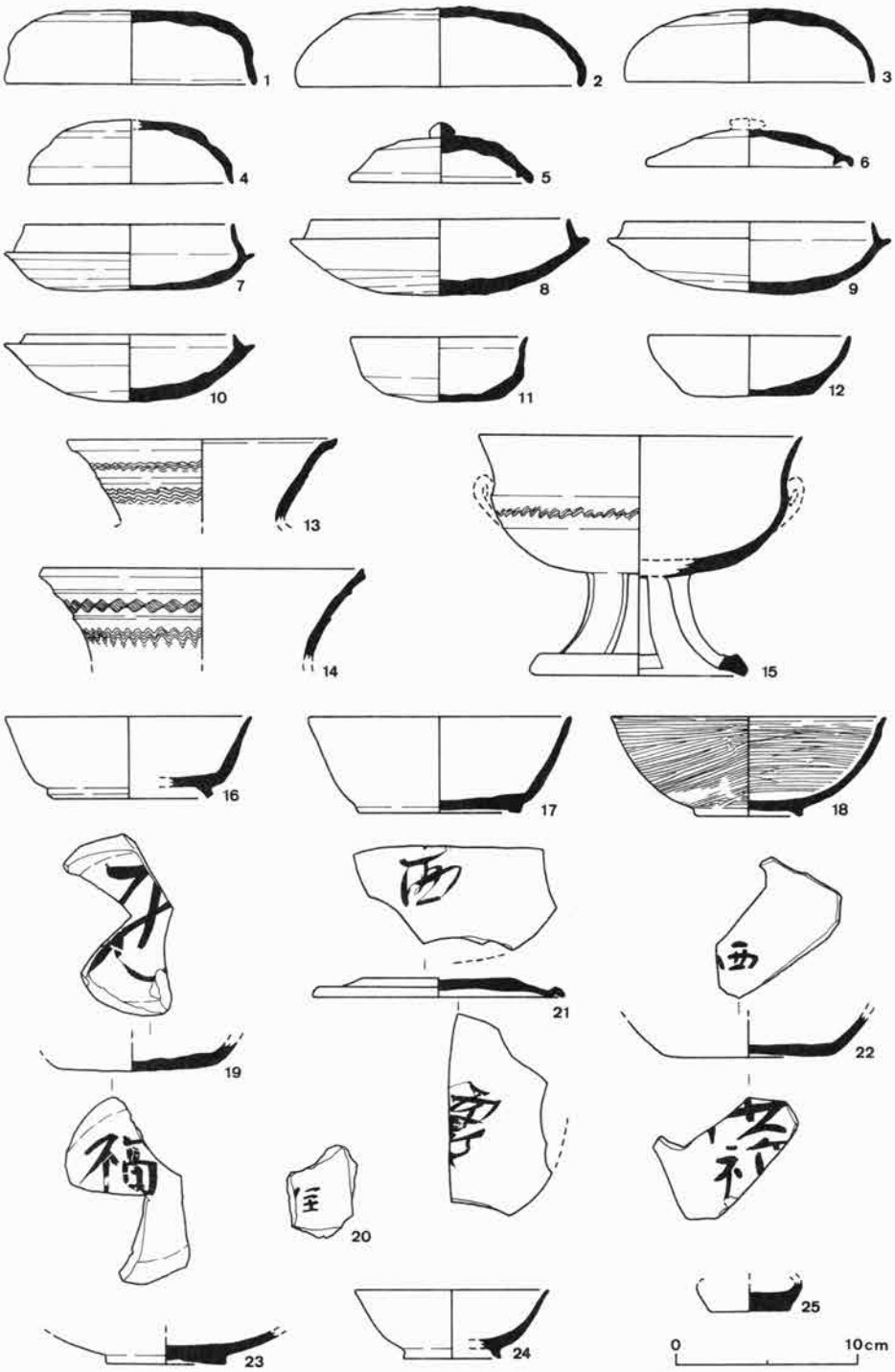
Ｅ地区で確認された６世紀末から７世紀前半の掘立柱建物跡群は、ＳＢ23をはじめとして規模が大きく、建物配置の状況からこの時期の豪族居館跡と考えられる。

②出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱にして約250箱に及んだ。内容としては、Ｃ地



第14図　Ｂ地区出土遺物実測図(1/4)



第15図　Ｃ地区出土遺物実測図(1/4)

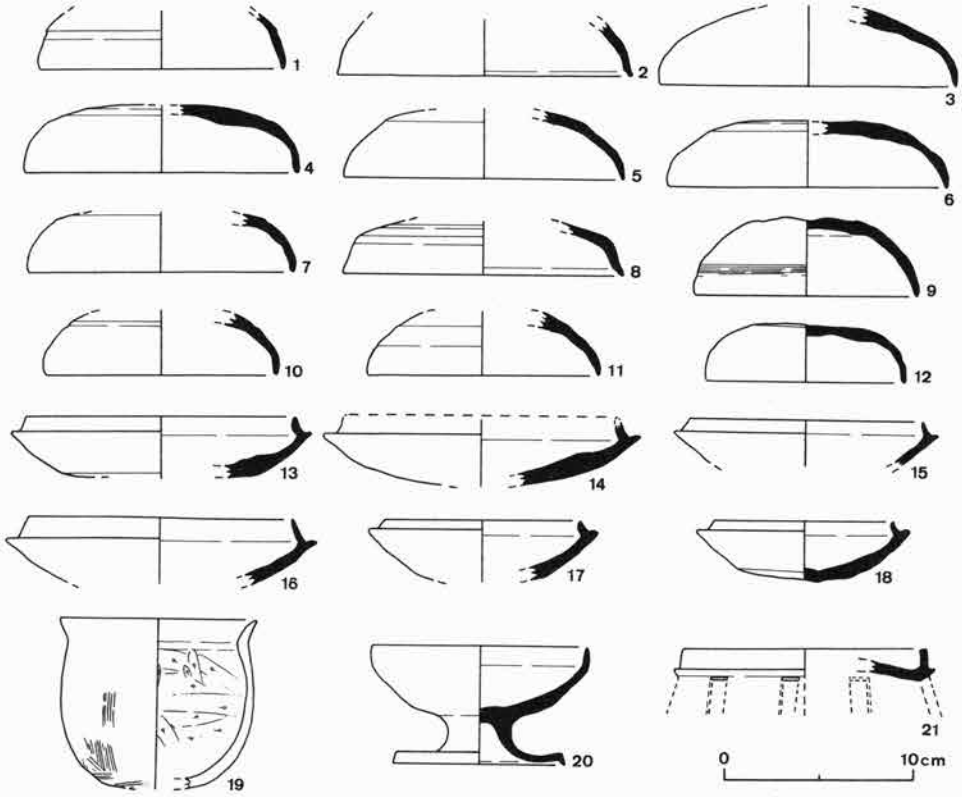
区で出土した古墳時代の須恵器・土師器が９割を占める。そのほかでは、Ｄ地区で縄文土器片１点、Ｂ・Ｃ地区で平安時代の遺物が認められるといったものである。以下、調査区ごとに概要を報告する。

Ａ地区

鎌倉時代の土坑から瓦器椀、皿、土師器皿、白磁椀が出土した。これ以外では、古墳時代の杯身、杯蓋や平安時代の風字硯も出土した。

Ｂ地区

この調査区では、古墳時代から鎌倉時代に至る遺物がまんべんなく出土しているが、中でも、平安時代の遺物が一番多く、特徴的である。1～3は須恵器蓋、４は須恵器椀、5・6は土師器皿、7～9は緑釉陶器椀、10は須恵器壺の底部、11は風字硯、12は白磁椀である。9は、口径16.2cm・器高5.6cm・底径9.0cmを測る。体部中段に明瞭な稜をもつ。色調は緑灰色を呈し、全面にわたって釉薬が施されている。風字硯は、破片であるため全長は不明で



第16図　Ｅ地区出土遺物実測図(1/4)

1・3・9・11・14・18.ＳＢ23　2・8・15.ＳＢ26　4.ＳＢ11　5・12・16.ＳＢ18
7.ＳＢ19　10.ＳＢ14　13.ＳＢ21　17.ＳＢ13　19.ＳＤ39

あるが、幅は14cm前後である。表面は使用に伴い摩滅している。

C地区(第15図)

この地区を特徴づける遺物は、古墳時代の須恵器、土師器と平安時代の墨書土器及び緑釉陶器である。1～6は杯蓋、7～12は杯身、13・14は壺、15は高杯、16・17は杯身、18は椀、23は皿、24は椀、25は耳杯である。杯蓋は時期幅があるが、溝から出土したものの多くが陶邑編年のＴＫ10～ＴＫ209に併行する時期のものである。

墨書土器は、計40点ほどを数えるが、ほとんど平安時代のものと考えられる。今回の調査で出土した墨書土器の大きな特徴は、内外面ともに墨書が認められる点である。19は、杯の見込み部分は判読できないが、底部外面には「福」と書く。20は「住」であろう。21は、蓋の外面に「□西」、内面は「西□」と書く。22は、杯の見込みに「西」、底部外面に「□福」と書かれている。このように、出土した墨書土器は「西」・「西福」と書かれたものがほとんどを占める。

E地区

第16図には、掘立柱建物跡の柱穴内から出土したものを中心に並べてみた。1のように、混入したと考えられるものもあるが、ほとんどは、ＴＫ209～217に併行するものである。ただし、蓋杯に見られるように口径の大きなものと小さなものに分かれるため、建物跡の時期も幅があるようである。E地区の遺物は古墳時代のものが大半であるが、包含層中より、奈良・平安時代の土器とともに21の円面硯の破片も出土している。

3．おわりに

今回の八木嶋遺跡の発掘調査で確認された古墳時代の掘立柱建物跡は、その数、規模から考えて、いわゆる豪族居館とするにふさわしいものである。掘立柱建物跡群は、東西方向にまだまだ広がるが、９号バイパス予定路線外のため、その東西の幅は確認し得なかった。しかし、建物跡の南北方向に関しては、D・E地区での調査成果による限り、濠、柵列などは存在していない。したがって、明確な居館の区画設定はなされていなかったと考えられる。

また、B地区では平安時代の掘立柱建物跡群がまとまって確認できた。これは、A・B地区出土の風字硯、C地区出土の墨書土器、E地区出土の円面硯とあわせて考えると調査地周辺には、官衙的な施設の存在が想定できる。

このように、今回の八木嶋遺跡は多大な成果をあげることができた。古墳時代及び平安時代の掘立柱建物跡群の全体像をつかむ上でも、周辺部の調査が期待される。

(鵜島三壽)

(2)川向北古墓

1．はじめに

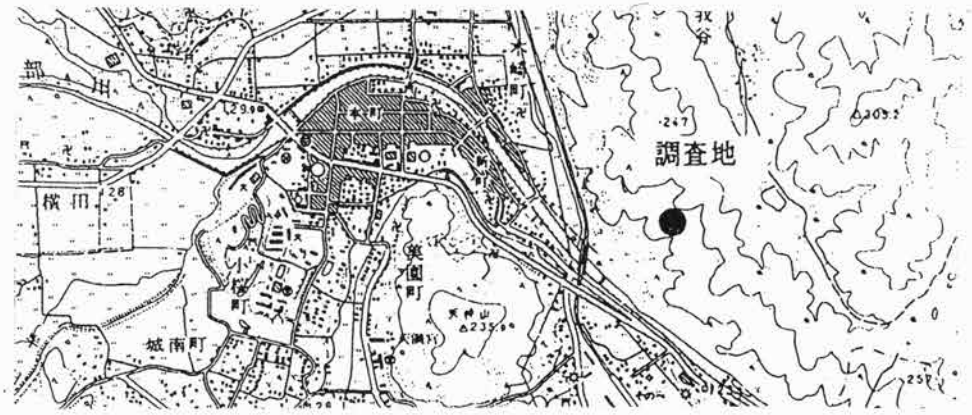
川向北古墓は、京都府園部町小山東に所在し、標高約140m前後の丘陵上に位置する。この丘陵には径２～３ｍのマウンドが散在するだけでなく、五輪塔などもみられることから、中世から近世にかけて営まれた墓所と考えられている。また、隣接する丘陵上には後期古墳があり、古墳時代後期に属する遺構が存在する可能性も指摘されている。

今回、この遺跡に隣接して国道９号バイパスが建設されることになったため、当調査研究センターでは建設省近畿地方建設局の依頼を受けて調査を実施した。今回は、遺構の有無・遺物の散布状況を確認する目的で、試掘調査を行った。

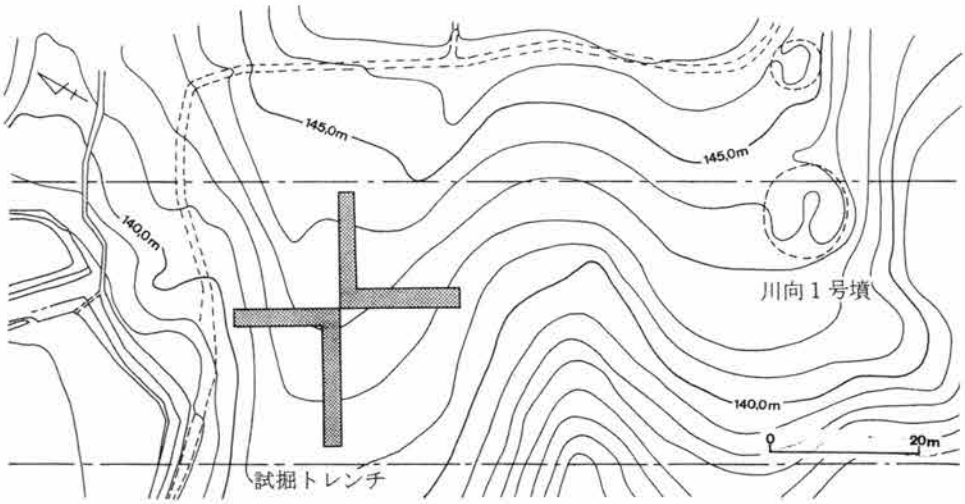
2．調査の方法と概要

調査に当たっては、伐採木の処理後、まず丘陵稜線とこれに交わるトレンチを設定し(第18図)、引き続いて人力による掘削を行った。表土直下で、地山である黄色粘質土が現われた。この面で精査したが、遺構は確認できなかった。その後、一部を立ち割って土層の確認を行ったが、岩盤に達したので、遺構の存在する可能性はないと判断し、調査を終了した。

遺構は確認できなかったが、表土の中から砕片化した遺物を数点採集することができた。遺物は、三時期あり、弥生時代後期に属すると思われる土器破片、古墳時代後期の須恵器杯蓋の破片、鎌倉時代の瓦器椀の砕片である。

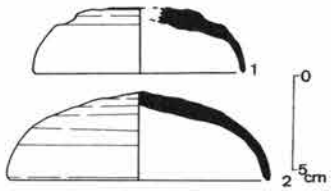


第17図　調査地位置図(1/25,000)



第18図　トレンチ配置図

出土した須恵器には図示しうるものが２点あった(第19図１・２)。１は、口径11cm・器高約3.4cmを測り、２は口径約14cm・器高約4.6cmである。時期的には、１は６世紀末頃、２は６世紀後半頃のものと推定される。



第19図　出土遺物

３．おわりに

今回の試掘対象地では、以上のとおり、遺構は確認できなかった。しかし、弥生時代後期頃、古墳時代後期、鎌倉時代頃の遺物が砕片ではあるが出土しており、かつてこの地点に各時代の何らかの遺構が存在していた可能性が考えられる。この丘陵は第２次世界大戦中に宅地として開墾されており、この際にこうした遺構が削平され、破壊されたものと思われる。

今後、隣接丘陵にある川向北古墳の調査が実施される予定であるが、古墳の築造以前、またはそれ以降の遺構・遺物が出土することも予想される。

（田代　弘）

注１　堤圭三郎「国道９号バイパス関係遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』　京都府教育委員会)をはじめ、1981年度からは当調査研究センターが継続して調査を行っている。国道９号バイパス関係遺跡には、亀岡市に所在する篠窯跡群・太田遺跡・北金岐遺跡・小金岐古墳群・千代川遺跡などがある。

注２　明田安男　石橋愛子　伊豆田順彦　今西敬子　宇都宮理子　荻野冨紗子　大槻益子　岡本竜之　岡本美和子　柏尾依子　川勝修　黒田美代子　小槻小福　後藤尚規　小森雅夫　小森ゆく子　斎藤澄代　芝敦子　白井貴広　瀬川良三　谷口明子　竹上てる　竹上美代子　宅間美津子　田中寛治　田中佐知子　田村末雄　土井正文　友井章之　中島健治　中村美鈴　中西宏　西村香代子　長田康平　橋本稔　畑誠治　疋田季美枝　広瀬伊太郎　広瀬恵美子　広瀬恵子　広瀬彦一　広瀬弘治　広瀬作二　広瀬忠一　広瀬辰次　広瀬義夫　広瀬八重子　広瀬恭伸　広瀬洋子　広瀬こと　広瀬美也子　広瀬フジ子　広瀬友治　広瀬伝治　藤田博明　藤崎高志　堀源一　堀はるの　堀智行　牧野當子　松岡稔春　松下道子　松本末野　松本芳雄　水口義一　三澤繁忠　宮崎紗知子　村上典子　森直樹　森本大樹　八木妙子　八木菊枝　山田きん子　山本和之介　湯浅義雄　吉谷美佐子

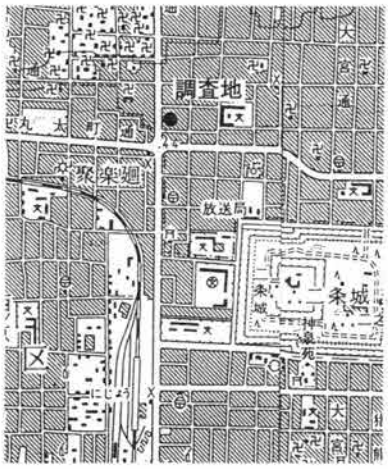
注３　堤圭三郎「坊田５号墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』　京都府教育委員会)　1979

3．平安宮大極殿院跡発掘調査概要

1．は じ め に

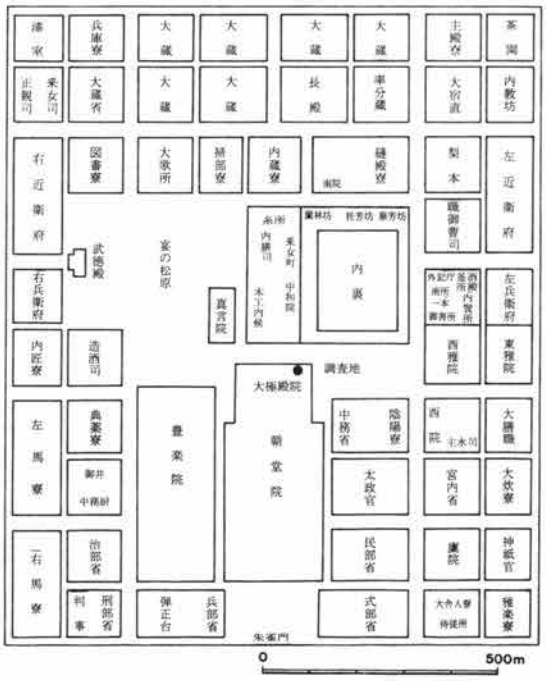
今回の調査は、京都市上京区千本通下椹木町東入ル上ル小山町908のきょうと社会保険センター内で実施したものである。同センターの増改築工事に伴うもので、京都府福祉部保険課の依頼を受けて、当調査研究センターが発掘調査を行った。調査に係わる経費は、すべて京都府福祉部保険課が負担した。

調査地は、過去の調査成果から、平安宮大極殿院の北回廊部分にあたると考えられる。今回の調査地の西隣りでは、(財)京都市埋蔵文化財研究所の調査によって、北回廊基壇の南北両端部が確認されている。(注1)



第20図　調査地位置図(1/25,000)

現地調査は、平成２・３年度にかけて実施した。調査面積は、約85㎡である。平成２年度調査は、当調査研究センター調査第２課調査第２係長辻本和美と同主任調査員引原茂治が担当し、平成３年度調査は、同調査第２係長奥村清一郎と同主任調査員引原茂治が担当した。調査に当たっては、京都府福祉部保険課をはじめ、きょうと社会保険センター・教育庁指導部文化財保護課・(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市埋蔵文化財調査センターなどから協力していただいた。ことに、(財)京都市埋蔵文



第21図　平安宮復原図

化財研究所長杉山信三氏には、現地でご指導・ご教示いただいた。このほか、調査補助員・整理員として、有志の方々に協力していただいた。(注2) 記して感謝したい。

2．調　査　経　過

平成２年度の現地調査は、年度末の平成３年３月４日から７日まで実施した。小型重機で掘削範囲内のアスファルトを除去し、部分的に掘削を行った。その結果、地表下約1.4mで緑釉瓦などを含む層を確認した。

平成３年度の現地調査は、平成３年４月15日から開始した。小型重機によって江戸時代以降の盛土を除去し、その後、人手で掘削・精査を行った。土坑などの遺構を検出したが、時期のわかる遺構はすべて江戸時代のものであった。結果的に、大極殿院北回廊の基壇遺構は、後世の土取りなどによって削り取られ、残存していなかった。出土遺物は、平安時代の瓦類と近世陶磁器が主なものであった。また、５月17日に関係者説明会を行った。関係者のほか、市民の方々も参加された。その後、図面作成や断ち割りなどの作業を行い、21日に現地調査を終了した。

3．調　査　内　容

調査地の層序は、最上層が現代の整地層であるアスファルト・バラスの層(1)であり、その下にさらに近現代の盛土層(2・3)がある。その下には、江戸時代の盛土が数層(4～6)みとめられる。江戸時代の盛土を除去すると、地山の黄色シルト及び礫層が島状に露呈する。地山面は、土取りなどで削られたためか、凹凸が激しい。

検出遺構はほとんど江戸時代以降のもので、それ以前の明確な遺構はない。遺構は、土坑・ピットであるが、性格は不明なものが多い。主な遺構について、次に列記する。

土坑ＳＫ４　調査地北東隅で検出した。掘形内に角礫を含む土を厚く入れ、その上に漆喰を貼る。池状の遺構か。時期を示す遺物はないが、層位的には新しい遺構とみられる。

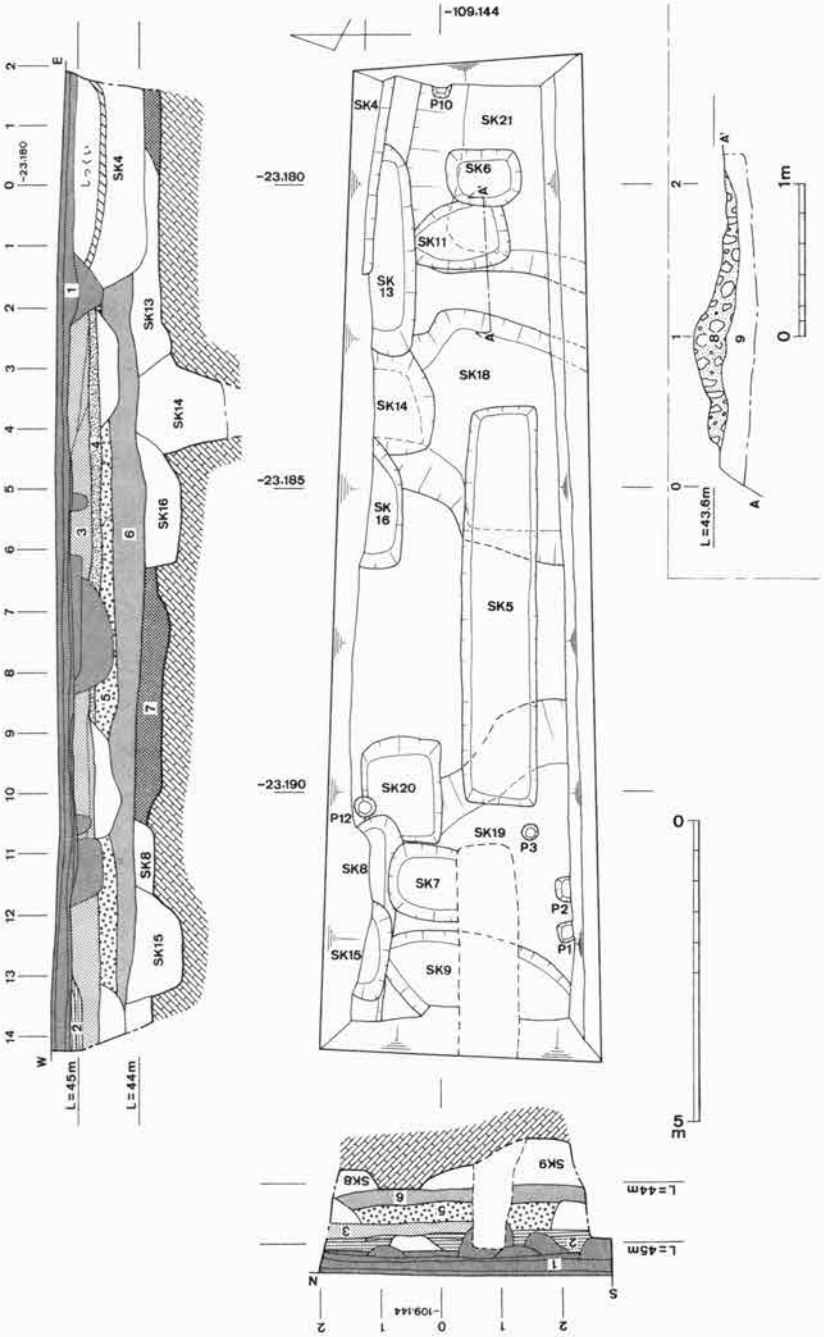
土坑ＳＫ９　調査地西端で検出した。楕円形状の土坑である。土坑内から、緑釉瓦などの瓦片が多数出土した。17世紀初頭前後の肥前陶器片なども出土している。

土坑ＳＫ13　調査地北東側で検出した。17世紀後期頃の陶磁器がまとまって出土した。一種のゴミ穴ともみられる。

土坑ＳＫ14　土坑ＳＫ13に先行する遺構である。ほぼ方形の平面形を示す。この遺構はかなり深く、井戸状の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ19　調査地南西側で検出した。東西方向に長径をもつ楕円形状土坑とみられる。この土坑からは、多量の瓦片が出土した。また、近世陶磁器片も出土している。

土坑ＳＫ20　調査地北西側で検出した。1.8m×1.5mの方形土坑である。近世陶磁器片や輸入白磁片などが出土した。形状から、地下式貯蔵穴と考えられる。



第22図　調査地実測図

なお、調査地東側に、地山の黄色シルト(9)が南北方向に小高く残る部分があり、その上に固く締まった細かい礫(8)が堆積していた。基壇盛土の可能性があるため、部分的に断ち割りを行ったが、礫中から遺物等は出土しなかった。したがって、この礫が盛土であるのか地山に含まれるものであるのかについては、不明である。

4．出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、平安時代と近世のものが大多数を占める。平安時代の遺物は、江戸時代の遺構埋土や盛土から出土したものがほとんどである。中世の遺物は、輸入青磁片などがわずかに出土した程度で、ほとんどないに等しい。平安時代の遺物では、土器類はわずかであり、瓦がその多くを占める。近世の遺物では、17世紀以降の陶磁器が多い。ここでは、主に平安時代の瓦と近世陶磁器の一部について略述する。

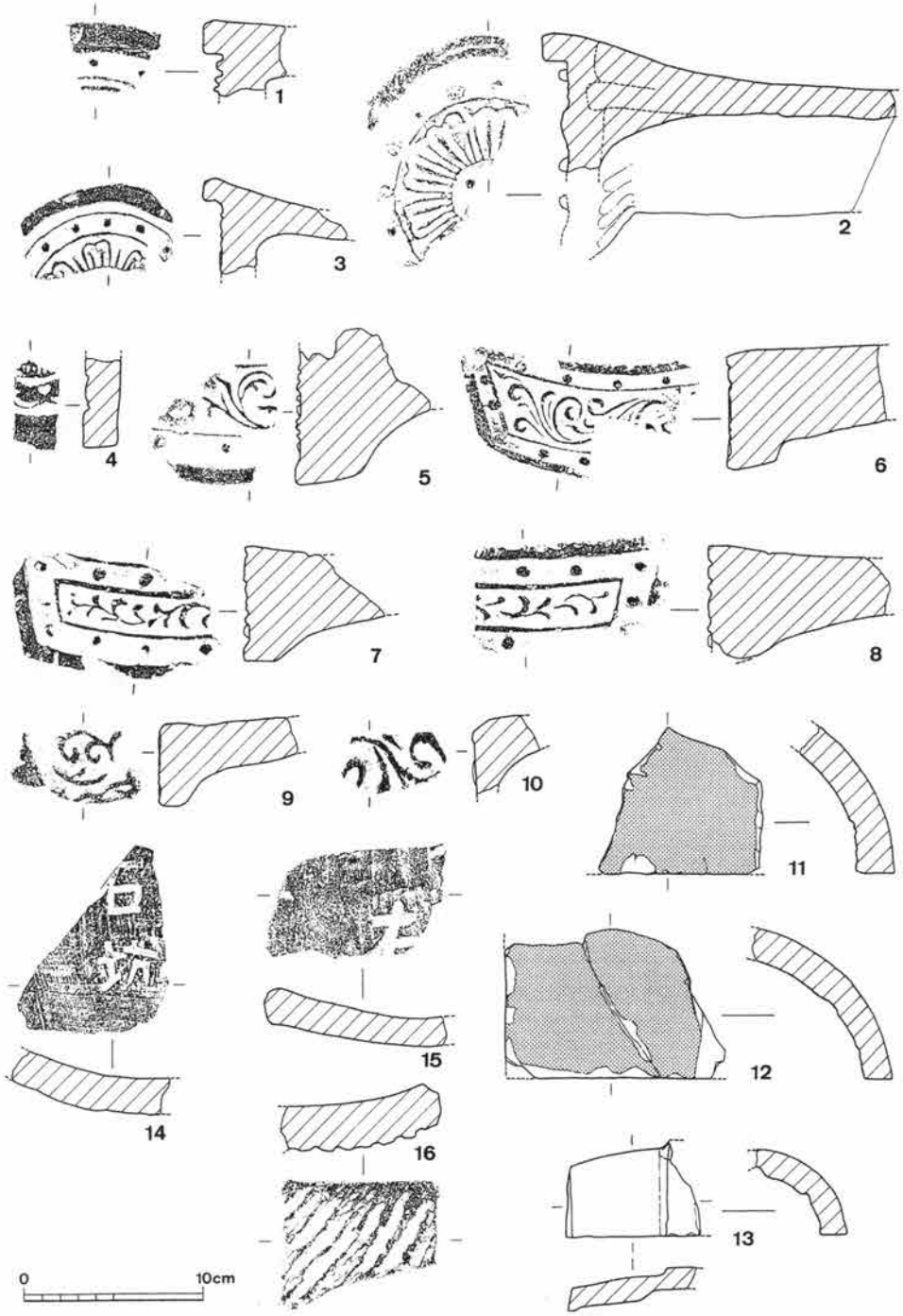
(1)平安時代の瓦(第23図)

軒丸瓦１は、緑釉瓦である。平安宮創建当初のものであり、京都西賀茂瓦窯産と考えられる。土坑ＳＫ19から出土した。複弁蓮華文軒丸瓦２は、間弁のないもので、土坑ＳＫ16から出土した。中期のものか。複弁蓮華文軒丸瓦３は、土坑ＳＫ19から出土したもので、後期のものとみられる。内裏蘭林坊跡などから同類とみられるものが出土している。蓮華文軒丸瓦４は、華弁の内側に蕊を表現している。後期の播磨系のものと考えられる。(注3) 土坑ＳＫ20から出土した。

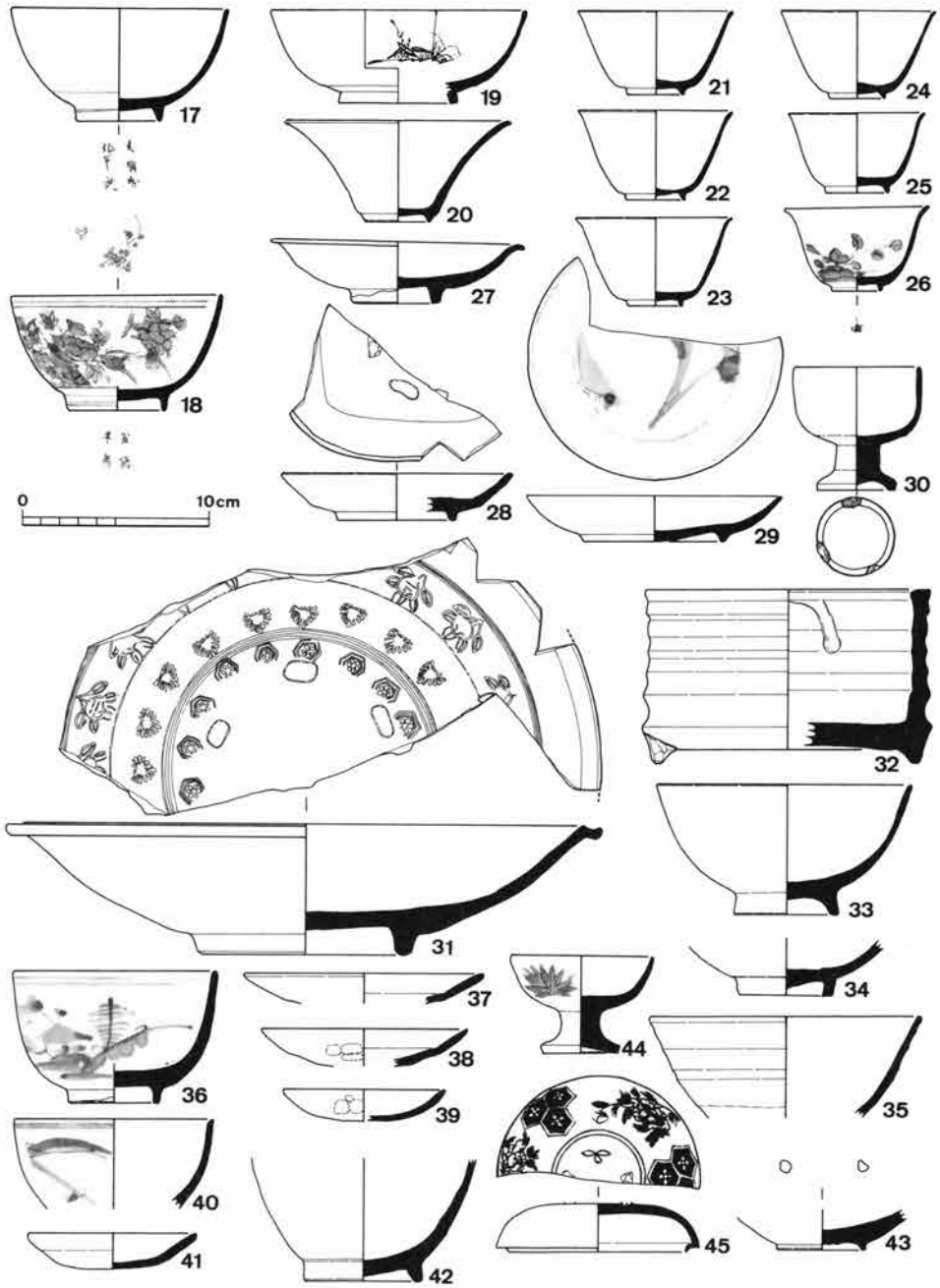
唐草文軒平瓦５は、緑釉瓦である。創建当初のもので、京都西賀茂瓦窯産とみられる。土坑ＳＫ11から出土した。軒丸瓦１とセットになるものか。均整唐草文軒平瓦６も前期のもので、土坑ＳＫ14から出土した。胎土は礫混じりであり、京都西賀茂瓦窯産と考えられる。均整唐草文軒平瓦７・８は、ともに土坑ＳＫ18から出土した。中期のものである。大極殿跡などから同類のものが出土している。唐草文軒平瓦９は、後期のもので、土坑ＳＫ15から出土した。京都系のものか。唐草文軒平瓦10は、上部外縁が斜めに削られている。後期のものか。土坑ＳＫ19から出土した。

丸瓦11・12は、緑釉瓦である。前期のもので、京都西賀茂瓦窯産とみられる。11は土坑ＳＫ９から、12はＳＫ19から出土した。丸瓦13は、小振りのもので、後期の播磨系のものとみられる。土坑ＳＫ19から出土した。

平瓦14は、上面に「右坊」の押印がある。平瓦15も同様とみられる。「右坊」の押印のある瓦は、京都池田瓦屋跡推定地から出土しており、字体も同様のものがある。(注4) したがって、これらは池田瓦屋で生産された中期瓦とみられる。14は土坑ＳＫ18から、15は土坑ＳＫ14から出土した。平瓦16は、下面に粗い縄叩き目が残る。後期の讃岐系のものか。



第23図　出土遺物実測図(瓦)



第24図　出土遺物実測図(陶磁器・土器)

17～31.土坑ＳＫ13　32～35.土坑ＳＫ20　36～39.土坑ＳＫ16
40～42.土坑ＳＫ６　43.土坑ＳＫ９　44・45.盛土

(2)陶磁器(第24図)

土坑ＳＫ13出土陶磁器　染付碗17は、肥前磁器で、高台内に「大明成化年製」銘をもつ。半磁胎である。染付碗18は、肥前磁器で、高台内に「宣徳年製」銘をもつ。鉄絵碗19は、京焼風陶器か。白磁小碗20は、肥前磁器とみられ、口縁部が外反する。半磁胎である。白磁小碗21～25は、ほぼ同形・同大である。肥前磁器か。染付小碗26は、肥前磁器である。青磁皿27は、肥前磁器で、高台は露胎である。皿28は、角形で、見込みに目跡がある。瀬戸美濃系陶器か。染付皿29は、肥前磁器で、見込みに荒磯文を描く。白磁仏飯器30は、半磁胎で、全面施釉され、高台に３個の砂目の目跡がある。褐釉皿31は、肥前陶器で、亀甲文・花文などを印刻する。見込みに砂目の目跡がある。土坑ＳＫ13出土の肥前磁器は、長吉谷窯(注5)もしくはそれに並行する時期の製品とみられ、17世紀後期頃に比定される。

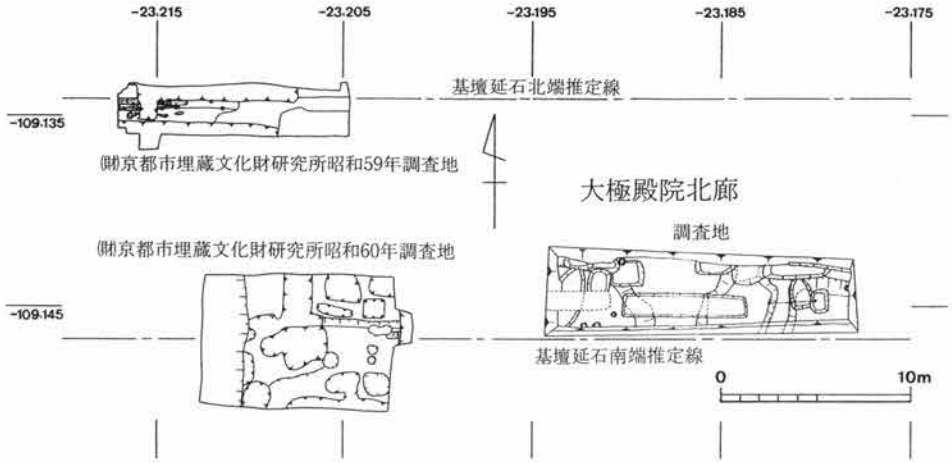
その他の陶磁器　32～35は、土坑ＳＫ20出土である。香炉32・碗33・碗34は、瀬戸美濃系陶器とみられる。白磁碗35は、中国製の輸入陶磁器である。36～39は、土坑ＳＫ16出土である。染付碗36は、肥前磁器である。厚手で焼成はややあまい。17世紀後半頃のものか。土師器皿37～39は、内面ナデ・外面ユビオサエである。40～42は、土坑ＳＫ６出土である。染付碗40は、肥前磁器で、雨竜文(？)を描く。17世紀後半頃のものか。土師器皿41は、内面ナデ・外面ユビオサエである。白磁壺42は、肥前磁器とみられる。皿43は、土坑ＳＫ９出土で、肥前陶器である。見込みに胎土目の目跡がある。染付仏飯器44と赤絵蓋45は、盛土出土で、肥前磁器とみられる。仏飯器の施文はコンニャク印判である。18世紀の製品か。

５．小　結

今回の調査地は、過去の調査成果を参照すると、大極殿院北回廊基壇内の南寄りに位置する。基壇南側延石推定線から若干北側になる。今回の調査では、明確な基壇の痕跡は検出できなかった。(財)京都市埋蔵文化財研究所の調査では、浅い位置から、地山を削り出した基壇の基底部と凝灰岩の化粧石が検出されているが、今回の調査で部分的にでも地山が検出できたのは、かなり深い位置である。それ以上は江戸時代以降の盛土である。このような状況からみて、今回の調査地では、大極殿院北回廊の遺構は削平されて残存していないものと考えられる。

今回の調査地は、江戸時代には、京都所司代の大名の下屋敷及びその直近の地となっている(注6)。今回確認した数層の盛土は、所司代下屋敷に伴う整地層の可能性も考えられる。また、今回確認した遺構のなかにも、それに伴うものが含まれている可能性はある。位置的には主要な建物があった場所ではなかろう。

中世頃のこの地の状況については、土取りなどの削平のため遺構からは推定できない。



第25図　調査地関係図

遺物からみれば、削平されているとはいえ、中世に属するものがあまりにも少ない。平安時代の瓦片が多量に残存しているのと対照的である。このような状況から、中世にはこの地付近が日常的な生活の場であったとは考えにくく、むしろ原野のような状態であったとも考えられる。

（引原茂治）

注１　木下保明「大極殿院」(『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所）1985

辻　純一「平安宮大極殿院(1)」(『平安京跡発掘調査概報』　京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所）1986

辻　純一「平安宮大極殿院１」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所）1988

注２　塚本映子・天岡昌代・丹新千晶・疋田季美枝

注３　寺島孝一ほか「平安京左京七条三坊五町」(『平安京跡研究調査報告』第15輯　財團法人　古代學協會）1985

注４『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』　大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会　1984

注５　大橋康二『肥前陶磁』　ニュー・サイエンス社　1989

注６『京都の歴史』　添付地図参照

参考文献：平安博物館編『平安京古瓦図録』　1977

4．第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要

1．はじめに

内里八丁遺跡の発掘調査は、第二京阪道路建設に先立ち、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。

第二京阪道路関連遺跡の調査は、昭和63年に新田遺跡・内里八丁遺跡の試掘調査から開始した。その結果、内里八丁遺跡では、第二京阪道路建設ルートの東隣りを北流する防賀川が、その流れを西北に転じる付近で遺構の検出をみたため、面的な本調査に切り替えることとなった。この本調査対象地は、農道と防賀川によって３つの地区に分けられることから、南よりＡ・Ｂ・Ｃ地区と名付け、平成元年度から南部のＡ地区で本調査を開始した。平成２年度は４月17日から飛鳥～奈良時代の遺構面(第１遺構面)の調査を再開し、掘立柱建物跡１棟・総柱建物跡４棟・井戸跡１基・溝跡多数を検出した。その後、調査は下層の古墳時代遺構面(第２遺構面)に移り、古墳時代初頭の方形周溝墓、古墳時代前期の溝跡等を検出するとともに、さらに下層に弥生時代の水田跡(２時期)の存在を確認した。

今回の報告は、平成２年度後半～３年度前半にＡ地区で実施した、第２遺構面(古墳時代)と第３遺構面(弥生時代後期末水田跡)の調査を中心に行う。調査面積は第２遺構面・第３遺構面とも各々約1,800㎡である。下層の水田跡(第４遺構面)に関しては、継続調査中であることから今後の報告で行う予定である。

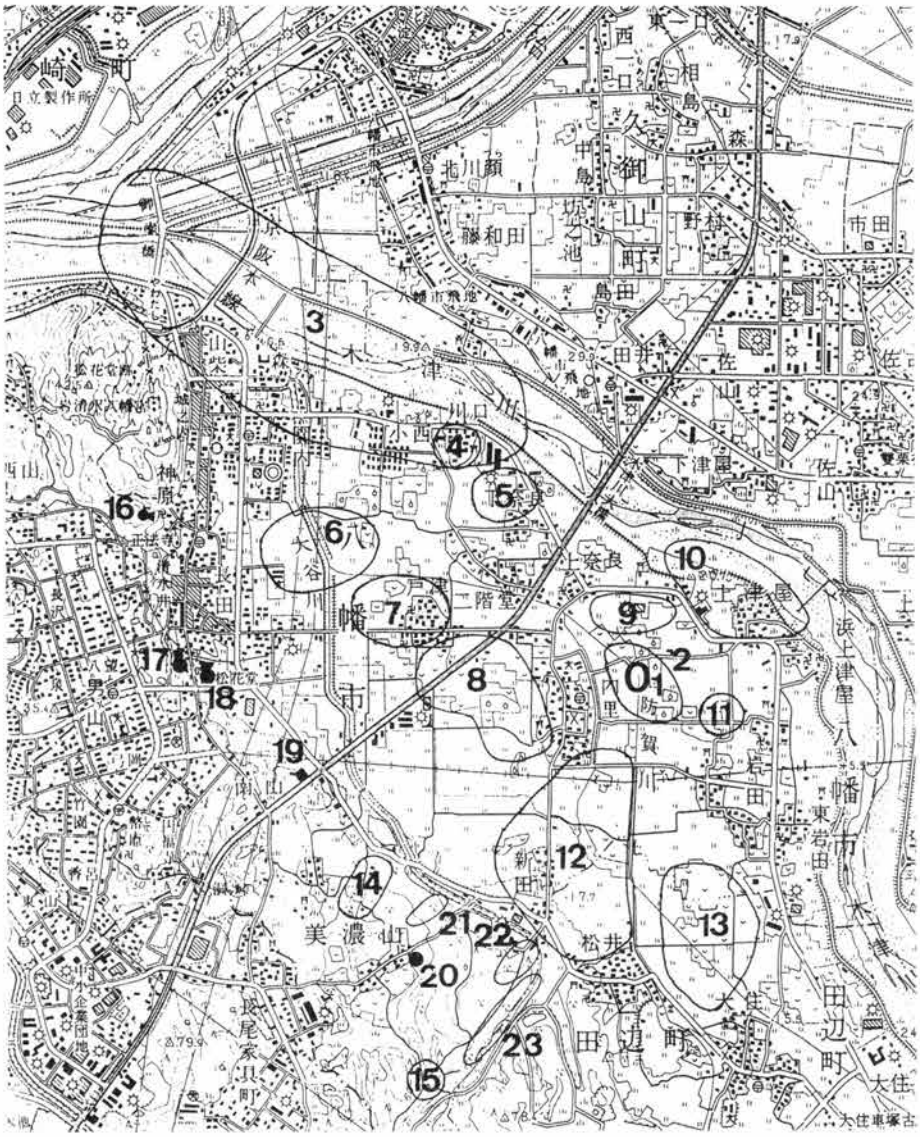
発掘調査は、調査第２課調査第３係長小山雅人・同調査員竹原一彦が担当し、本概要の執筆は竹原が担当した。調査を行うに当たり、八幡市教育委員会をはじめ数多くの諸機関から協力を得た。また、現地調査には、多くの方々の参加と御助言を賜った(注1)。記して感謝の意に替えます。なお、調査にかかる費用はすべて建設省近畿地方建設局が負担した。

2．位置と環境

内里八丁遺跡のある八幡市は、山城盆地の南部にあり、西に京都府と大阪府の境でもある男山丘陵を配し、北と東には三重県布引山地に源を発する木津川が流れる。このため、八幡市は大きく二つの地域に分かれる。西の男山丘陵とそれに続く河岸段丘、東の沖積平野に分かれ、内里八丁遺跡は木津川が形成した沖積平野部に位置する。

八幡市域では、丘陵部と沖積平野のいずれにも、多数の遺跡が分布していることが知られている。以下、時代を追ってこれらの遺跡を概観していく。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は少なく、わずかに男山丘陵の金右衛門垣内遺跡が知られ



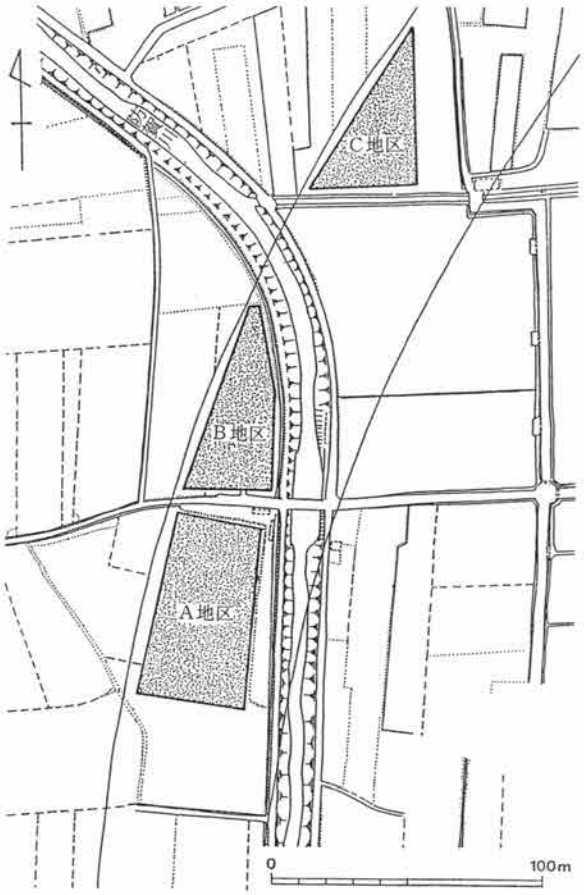
第26図　調査地周辺遺跡分布図

1.調査地　2.内里八丁遺跡　3.木津川河床遺跡　4.川口環濠集落　5.下奈良遺跡　6.島遺跡　7.戸津遺跡　8.内里五丁遺跡　9.上奈良遺跡　10.上津屋遺跡　11.西岩田遺跡　12.新田遺跡　13.魚田遺跡　14.金右衛門垣内遺跡　15.荒坂遺跡　16.石不動古墳　17.西車塚古墳　18.東車塚古墳　19.ヒル塚古墳　20.王塚古墳　21.狐谷遺跡(横穴)　22.女谷横穴群　23.荒坂横穴群

るのみである。この遺跡からは、ナイフ形石器や切目石錘が出土している。

弥生時代に入ると遺跡数も増加し、男山丘陵部では弥生時代中期の金右衛門垣内遺跡・幣原遺跡、銅鐸が出土した式部谷遺跡、弥生時代後期の美濃山廃寺下層遺跡等がある。沖積平野部では、弥生時代後期後半の木津川河床遺跡がある。

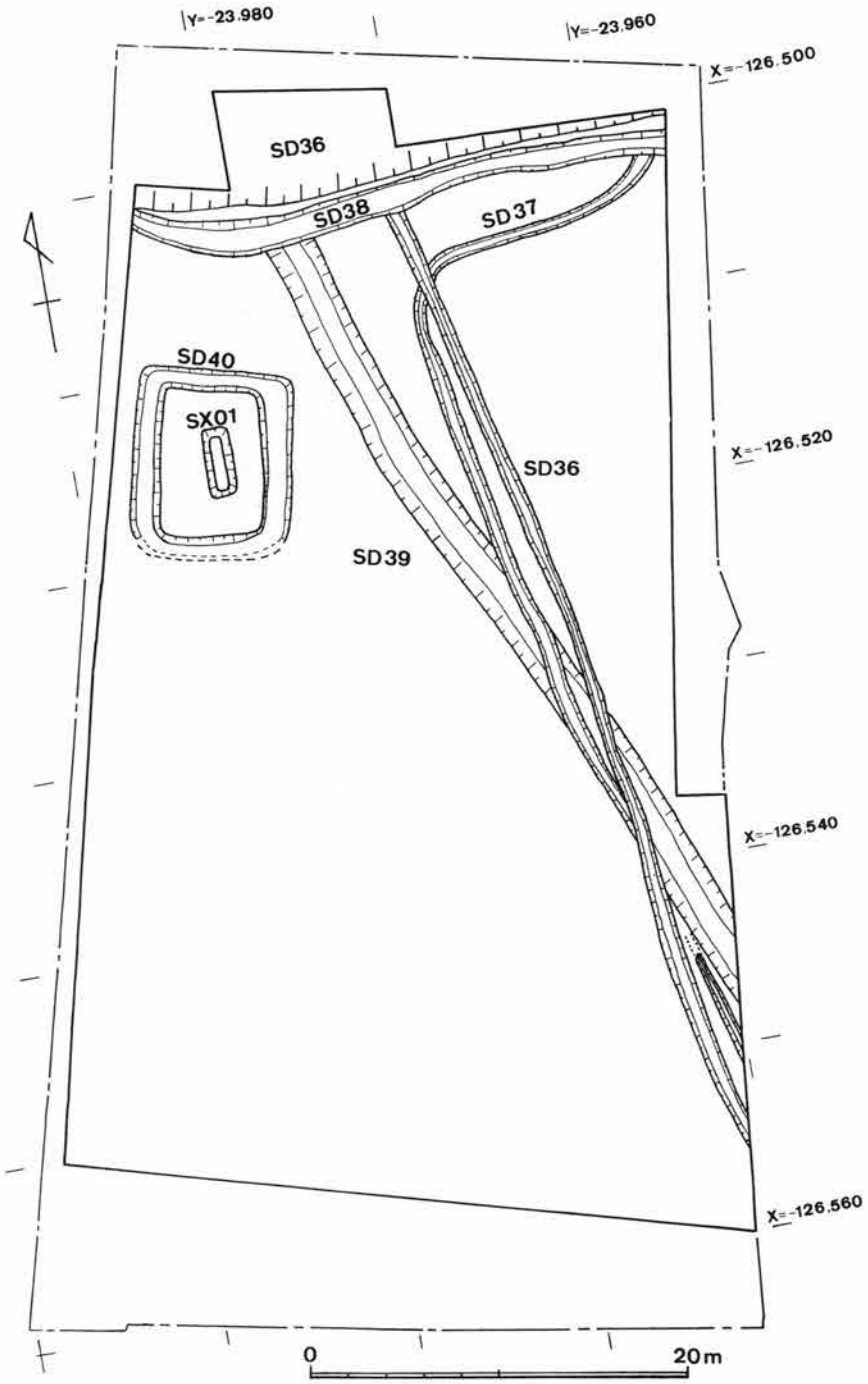
古墳時代では男山丘陵上や段丘縁辺部に古墳が築造される。前期の古墳としては、茶臼山古墳・石不動古墳・西車塚古墳・ヒル塚古墳といった50～100m前後の規模の前方後方墳・前方後円墳・方墳がある。中期古墳では、東車塚古墳・美濃山王塚古墳等の前方後円墳がある。前方後円墳でみれば、前・中期を通して市域北部の旧八幡地域に集中する傾向にある。古墳時代後期では、美濃山地区から田辺町大住地区にかけて狐谷横穴群・女谷横穴群・荒坂横穴群などの横穴墓が数多く造られる。このことは、美濃山地域周辺に移住させられたとされる、隼人との関連が考えられている。古墳時代の集落の調査例は少なく、木津川河床遺跡で庄内式併行期の住居跡が検出されているのと、新田遺跡で5世紀代のカマドを持った竪穴式住居跡が検出されているだけである。



第27図　調査区配置図

奈良時代の遺跡の中で著名なものとしては、西山廃寺・志水廃寺・美濃山廃寺の3寺院跡と、四天王寺の創建瓦を焼いた平野山瓦窯が男山丘陵周辺部にある。

以上のように、八幡市域における調査の多くは男山丘陵周辺であり、平野部での調査はわずかに木津川河床遺跡と新田遺跡のみである。丘陵部にみられる大型古墳を築いた生産基盤を考える上で、今回の内里八丁遺跡の調査成果に期待が寄せられるところである。



第28図　第２遺構面平面図

3. 調 査 の 概 要

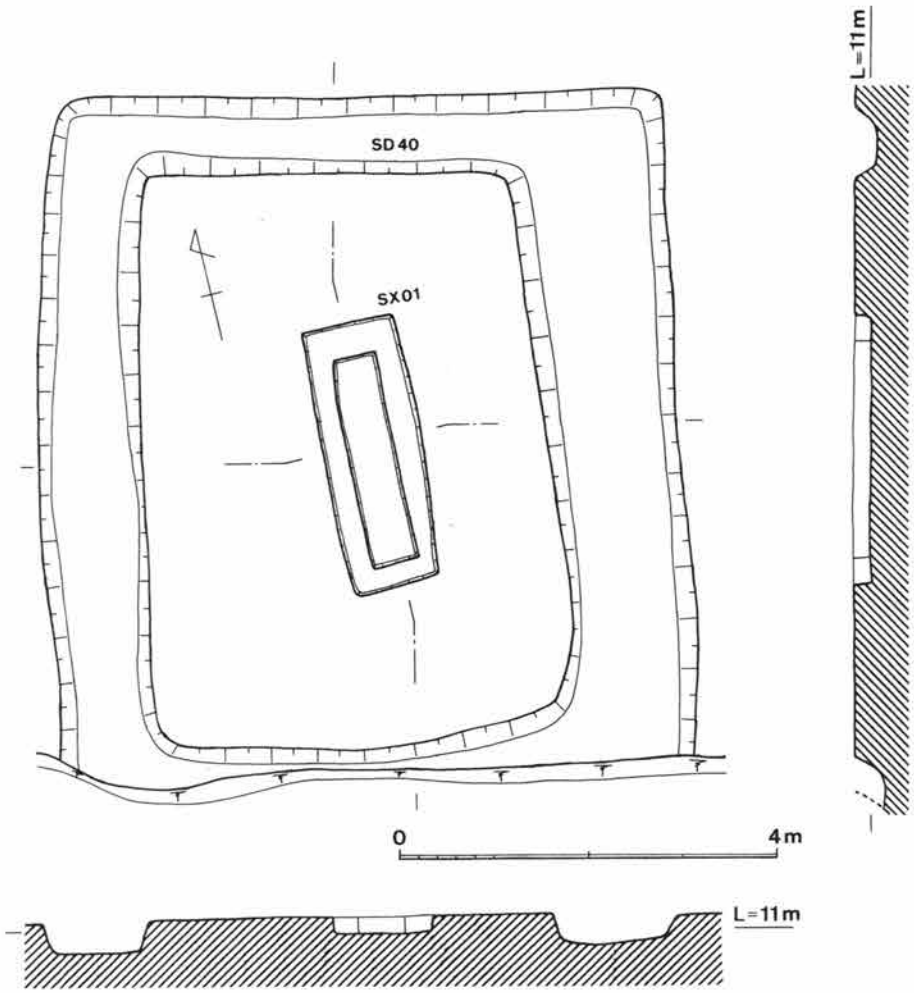
A地区の第2遺構面は、奈良時代の集落跡を検出した第1遺構面下約20～30cm(海抜約11.3m)に存在する。この遺構面では方形周溝墓1基・溝を検出した。

第3遺構面は、第2遺構面下約20～30cm(海抜約11m付近)にあり、多数の水田畦畔を検出した。以下、第2・第3遺構面の主な検出遺構・遺物に関して述べる。

(1)第2遺構面

①検出遺構

埋葬主体部SX01 調査地西北部で検出した方形周溝墓の埋葬主体部である。方形にめぐる溝(SD40)に区画された墓域は、東西約7.8m×南北約5.5mの規模を測り、墓域の中央やや東に埋葬主体部1基が存在した。埋葬主体部は木棺直葬である。長方形を呈する掘



第29図 方形周溝墓実測図

形は全長約3.7m×幅約1.4m×深さ約0.2mを測る。墓壙底はほぼ水平であり、掘形内の木棺痕跡から全長約3.0m×幅約0.6mの木棺が使用されたとみられる。周溝により区画された墓域の主軸は北から東に約10°振るが、埋葬主体部の主軸は真北とほぼ同一である。埋葬主体部内に副葬品はみられないが、掘形内から少量の土器片(甕体部)が出土した。

溝ＳＤ40　埋葬主体部(ＳＸ01)に伴う周溝である。溝は四周をめぐるが、周溝の南岸は攪乱を受けているため、全様は不明である。溝幅は、北側で0.8m、東側では1.2mの規模を測る。溝の深さは30cm前後を測る。溝内から鉢(第30図１・２)・高杯・甕が出土している。溝は第３遺構面を覆う砂質土層(洪水砂)を掘り込み、溝底は第３遺構面に達している。

溝ＳＤ36　調査地東部を南北に走る素掘り溝である。溝幅約60cm・深さは30cm前後を測る。水は南から北に緩やかに流れる。出土遺物には須恵器の甕・杯身等がある。

溝ＳＤ37　ＳＤ36に先行する素掘り溝である。ＳＤ36とほぼ同一場所に存在するが、調査地内北部で大きく東に蛇行する。溝幅約60cm、深さは30cm前後を測る。弥生後期の土器片が出土しているが、この溝の時期を確定するものではない。

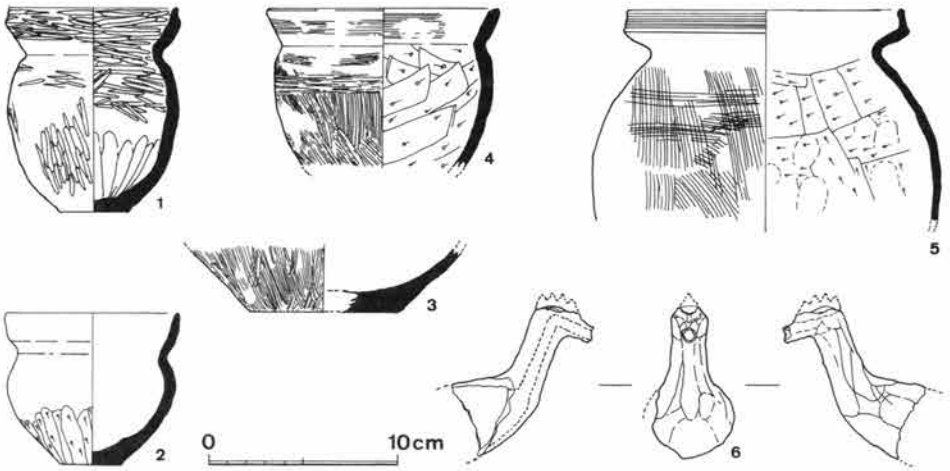
溝ＳＤ38　調査地北端で検出した素掘りの東西溝である。ＳＤ16(古墳～奈良時代)の南側に近接して並走状態にあり、溝底はやや蛇行しながら東から西に緩やかに下がる。溝幅は約1.2～1.6m・深さ約30cmを測る。出土遺物には土師器甕(第30図４)があるが、この溝の時期を確定するものではなく、混入遺物と考えられる。

溝ＳＤ39　調査地中央付近を北流する素掘りの南北溝であり、方形周溝墓の東に位置する。溝幅約2.6m・深さ約90cmを測る。溝底は下端付近で二段に下がり、当初は幅の狭い流れであったとみられる。溝底は、ほぼ11m前後の長さで屈折しながら、南から北に緩やかに下がる。この11m前後の直線単位は溝掘削段階の作業単位とみられる。溝底には白灰色系の砂が堆積し、砂層中から古式土師器甕(第31図３)・管玉が出土している。溝の中層と上層には暗褐色系の粘質砂が堆積し、土師器の壺・甕・高杯等(第31図)が出土した。

②出土遺物(第30・31図)

内里八丁遺跡のＡ地区第２遺構面の調査では、弥生時代末頃～古墳時代の遺物が出土している。出土遺物の大部分は遺構に伴うものであり、中でも溝(ＳＤ39)から古墳時代前期の土器(第31図)がまとまって出土している。

鉢(第30図１・２・４)　丸みをもった体部から短く外反する口縁が付く。口縁は内湾ぎみにつまみ上げられる(１・２)と、丸く終わる(３)がある。底部は平底である。１の外面と内面上半はヘラ磨き。内面下半はナデ調整。口径9.1cm・器高10.7cm。２の外面下半はヘラ削り調整。口径9.2cm・器高7.9cmを測る。１・２は周溝ＳＤ40から出土した。４の体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り調整。口径は12.2cm。溝ＳＤ38出土。



第30図　出土遺物実測図
1・2・4.鉢　3・5.甕　6.鶏形土製品

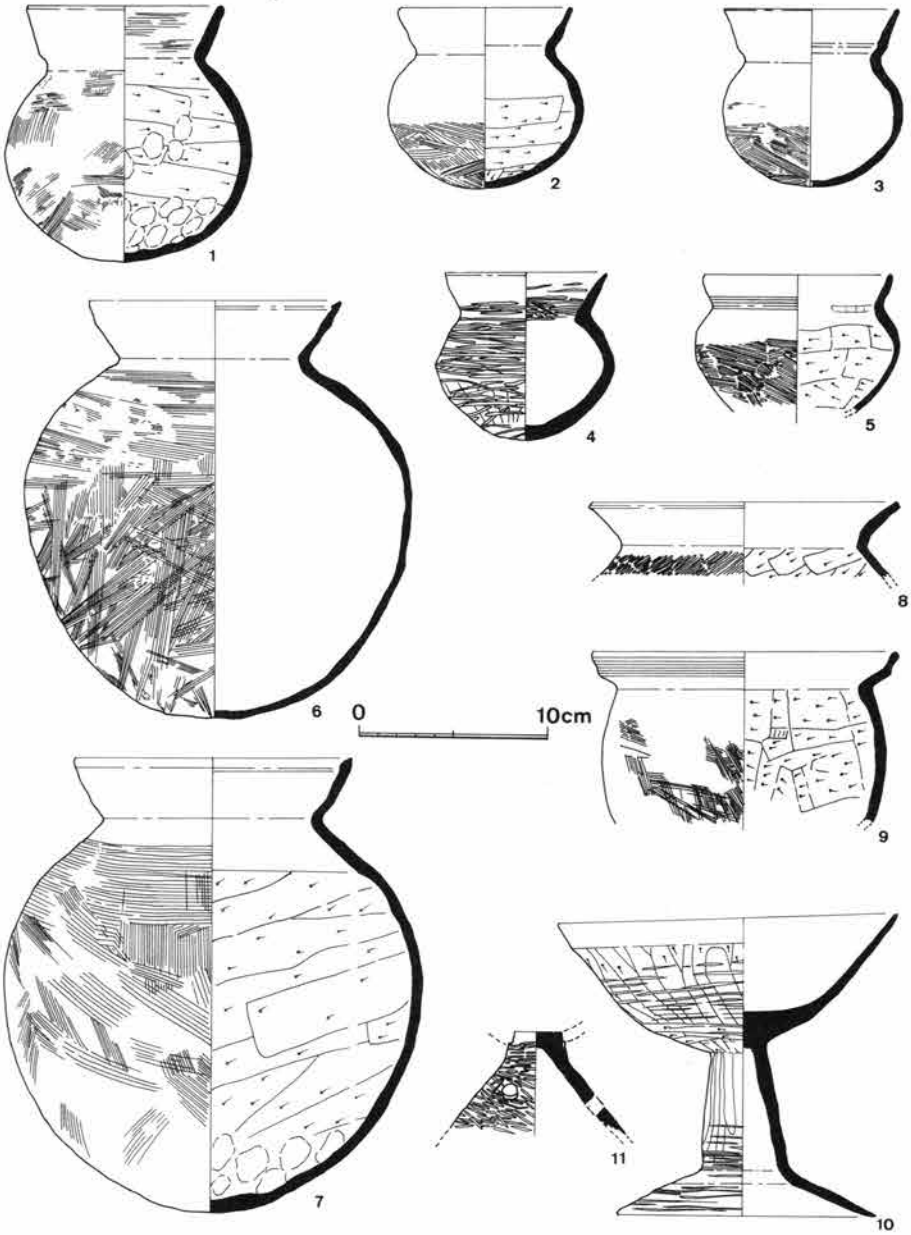
甕(第30図３・５)　５は、口縁部の立ち上がりが内傾し、端部はやや肥厚して丸く終わる。口径は14.5cm、体部は最大径が上部にある。口縁部外面には擬凹線文をめぐらす。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り。色調は淡褐色である。吉備地方からの搬入品と考えられる。包含層出土。３は、周溝(ＳＤ40)出土の弥生時代中期の甕底部である。

鶏形土製品(第30図６)　この土製品は下半を欠失しており、全体の形を知ることは困難である。残存部でみると全体に空洞をなしており、嘴部は注口となる。頭頂部にはトサカが張り付けられていたとみられるが、接合部を残し欠失している。外面はヘラ削りを行い、軽くナデている。頸部内面には絞り痕が認められる。頭部に「目」の意匠は認められない。色調は淡黄褐色であるが、トサカと体部上半は褐色分が強い。嘴径0.8cm(内径0.5cm)・体部幅５cm(推定)・残存高7.9cmを測る。調査地南部の包含層から出土した。

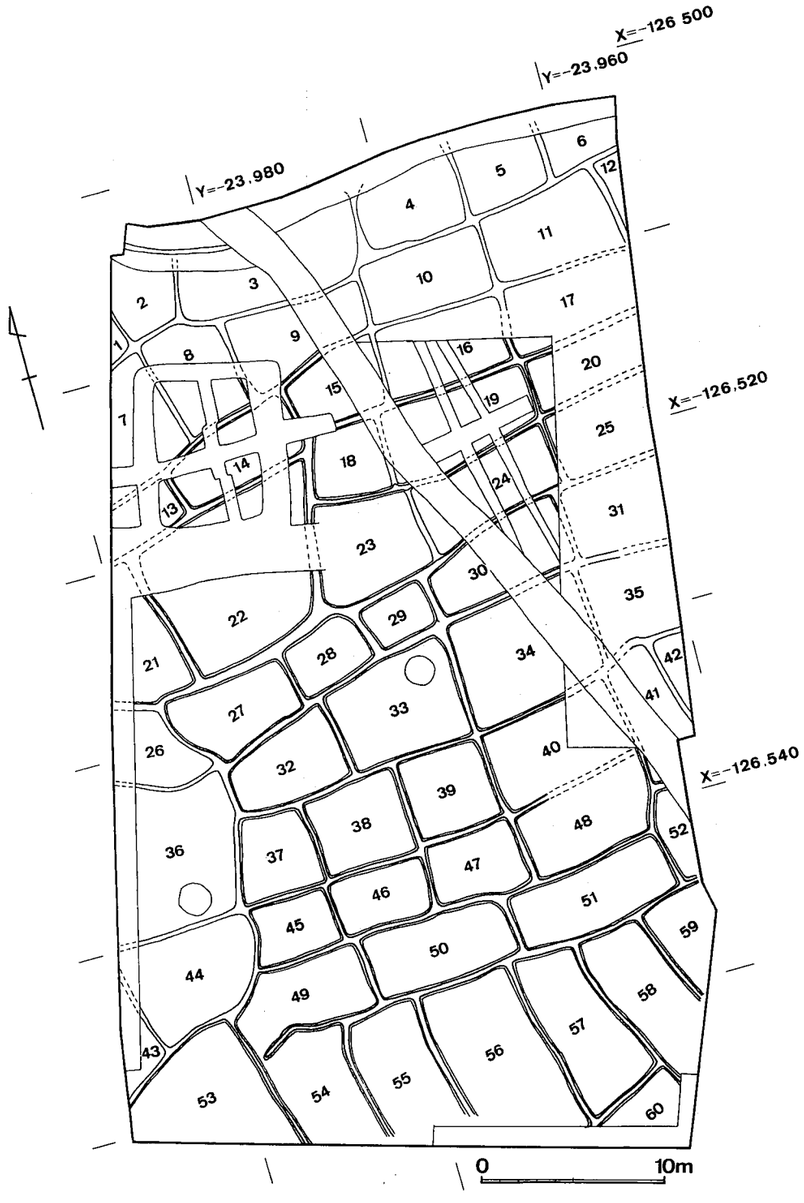
小型丸底壺(第31図１～５)　いずれも溝(ＳＤ39)から出土し、１～３が上層、５は中層、４は下層出土である。１は小型丸底壺の中でも大型品である。口径10.5cm・器高13.5cmを測る。球形の体部に短い口縁をもつ。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り、内底面には指頭圧痕を残す。２・３・５は、扁球形の体部にやや大きな口縁をもつ。頸部にはナデによるアクセントをもつ。体部外面下半はハケメ調整、内面はヘラ削り。口径は9.2～10.1cm、器高は9.3～9.5cmを測る。４は、胴の張った扁球形の体部に、鋭く外反する口縁をもつ。体部外面はヘラ削りの後、粗いヘラ磨き。口縁内面はヘラ磨き。体部内面はナデ。口径8.5cm・器高8.6cmを測る。

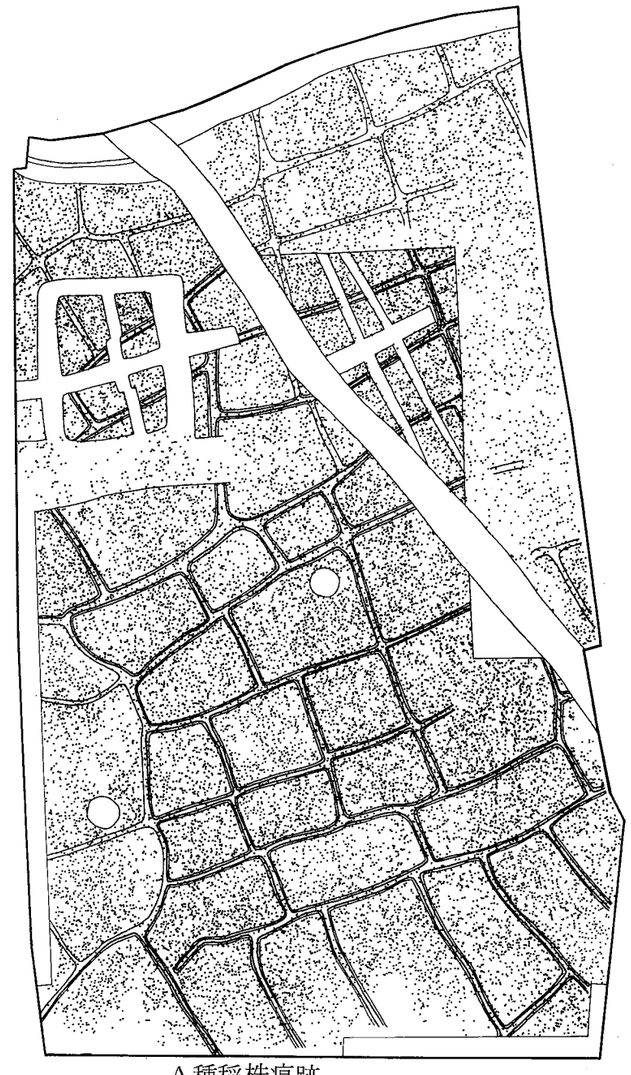
甕(第31図６～９)　６・７は球形の体部をもち口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端

部は内側に肥厚させ、内傾する平坦面をつくる。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削りを行う。6は口径13.4cm・器高21.7cm、7は口径14.7cm・器高24.2cmを測る。ともに溝(SD39)中層出土である。8は、口径16.1cm。体部外面は左下がりのタタキ。体部内面はヘラ削り。溝(SD39)下層出土。9は、二重口縁をもつ甕であり、口縁外面に擬凹線文を施す。

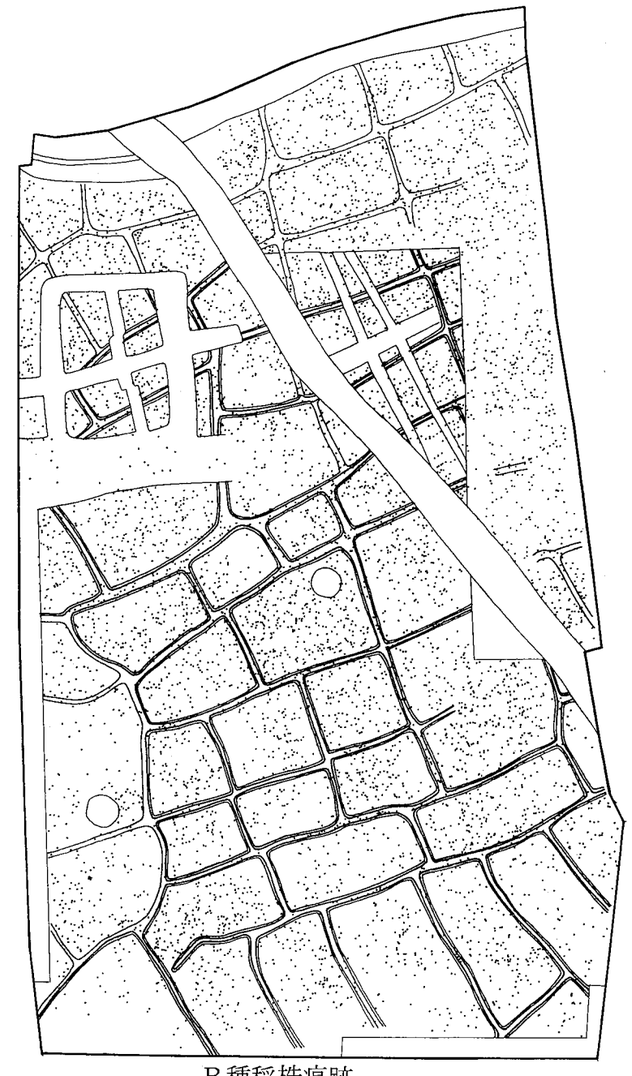


第31図　SD39出土遺物実測図
1～5.小型丸底壺　6～9.甕　10・11.高杯





A種稲株痕跡



B種稲株痕跡

第32図　第３遺構面平面図

体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り。口径16.3cm。溝(ＳＤ39)中層出土であるが、混入品と考えられる。

高杯(第31図10・11)　10の杯部は、ほぼ水平な円盤状の底部から立ち上がり、端部は尖がって終わる。杯部に明瞭な稜線はみられないが、脚部には稜線が明瞭に残る。外面はヘラ削り後に粗いヘラ磨き。溝(ＳＤ39)上層の出土。11は、低脚高杯の脚部である。脚は杯部直下から直線的に開き、上部３か所に小円孔を開ける。外面は細かいヘラ磨きを行う。

(2)第３遺構面

①検出遺構

調査地内全域から検出された水田遺構は多くの畦畔からなり、淡黄灰色を呈する厚さ約20～30cmの洪水砂によって完全に埋没していた。現在のところ、畦畔によって区画された水田跡は、60枚(推定分を含む)を検出している。検出した水田面の海抜高は、東の水田６・12で約11.15m、西の水田36では約11m、南の水田60では約10.9m、最下部となる北の水田３は約10.8mである。各水田面の海抜高の状況から、調査地の東西は微高地となり、中央付近は南から北に緩やかに傾斜する谷状地形であることが判明した。

水田の畦畔は、基本形として断面形が半円形(カマボコ形)を呈し、水田層(茶灰色粘質土層)と同一の土壌によって形成されている。畦畔の規模は、下端幅が30～40cm前後を測るものが大部分を占めるが、中には水田27・28の北側畦畔にみる70cm前後の幅を測るものも存在する。畦畔の頂部と水田面の高低差は７cm前後を測る。谷状地形を横断する東西方向の畦畔は直線的にのび、畦畔自体は比較的幅広な傾向が認められる。対する南北方向の畦畔は各所で寸断状態にあり、畦畔自体も小規模な傾向にある。

畦畔によって区画された水田の基本形は四辺形であるが、畦畔が緩やかな円弧を描くものもあり、水田26・27・44・49などのようにかなり不整な四辺形を呈するものも認められる。水田26・36・44の東側畦畔は東に大きく張り出す円弧を描き、この畦畔を共有する水田に不整なものが多い。この畦畔は谷の西縁ラインであり、また谷状地形の狭窄部分となることから、当初より地形の制約を受けた不整な水田が集中したものであろう。水田には、水田37・38・45・46や、水田38・39・44・47にみられる基本的な組み合わせが「田」形を呈するものも存在する。谷状地形の始まる調査地南部には、整然と並ぶ長方形の水田が存在する。谷状地形の上端部には長軸を東西に取る水田49～51が横１列(東西方向)に並び、これより南では長軸を南北に取る水田53～59が整然と配されていることは、注意すべき事実である。また、谷筋にあたる調査地中央付近から北にかけての水田は規模・形状とも変化に富み、変則的な配列状況を示す。

個々の水田跡でみると、水田の規模としては小規模である。水田１枚分が検出できた中

では最大の水田33で約33㎡、最小の水田29で約９㎡である。今回検出した水田には２枚分と考えられる水田22(約65㎡)を除き、全様が不明な水田等に水田33の規模を越えるものも存在するが、おおむね50㎡前後の規模に留まるものと推定される。全体的には水田28・37・45・46等にみる13㎡前後の規模を測るものと、水田９・10・23・49・51等にみる26㎡前後の規模に分かれる傾向が読み取れる。

畦畔には一部で凸部が途切れる部分が存在し、これを「水口」と考える。検出した60枚の水田において水口は１か所確認できた。検出した水口は、調査地西南部の水田49と54間に存在し、畦畔の西端部が約40cm程度切れている。

②稲株痕跡

調査区全域の水田面及び畦畔上から、稲株痕跡とみられる無数の小穴を検出した。水田及び畦畔の土壌である茶灰色粘質土層に存在する稲株腐植部分の窪みに、洪水砂である黄灰色砂が落ち込んだ状態で検出された。検出した稲株痕は、その埋土の土質に変化が認められ、それらは概ね洪水砂(Ａ種)と粘質土と洪水砂が混じり合う(Ｂ種)の２種類に大別される。Ａ種とした稲株痕内には洪水砂のほか、３～７㎜大の粘質土(水田土壌)を含む例が多い。Ａ種・Ｂ種の稲株痕は水田面と畦畔上に個々に存在するが、一部の稲株痕に切り合い関係が存在することは注意すべき事実である。この切り合い関係は、ほぼＡ種がＢ種を切るものであった。

稲株痕の大きさは、Ａ種・Ｂ種とも直径約５～７cm大の円形もしくは楕円形を呈し、周縁部は輪花状の小さな凹凸が認められる。稲株痕の深さはＡ種では５cm前後を測るものが大多数を占めるが、一部には12cmに達するものも存在する。Ｂ種稲株痕の深さは３～５cm程度であり、Ａ種より浅い傾向にある。稲株痕には垂直に下がるものと斜孔する２例があり、後者例が多数を占める。稲株痕の底面はやや丸みを帯びて一旦終わるが、小さな穴がさらに下がるものも存在する。

稲株痕は調査地全域に広く分布し、水田面のほか畦畔上にも多数存在する。水田39では１㎡内にＡ種―約30株、Ｂ種―約７株の分布が認められた。稲株痕はＡ種・Ｂ種ともアトランダムな分布を示しているが、Ａ種を観察すると、ほぼ等間隔に並ぶ稲株痕の存在が認められる。緩やかな円弧を描く稲株列は、幅約0.8～１ｍ内に５～６株の小穴からなる単位が存在する。このような単位は水田面に数多く認められるが、畦畔を越えて２枚の水田に渡るものも存在する。

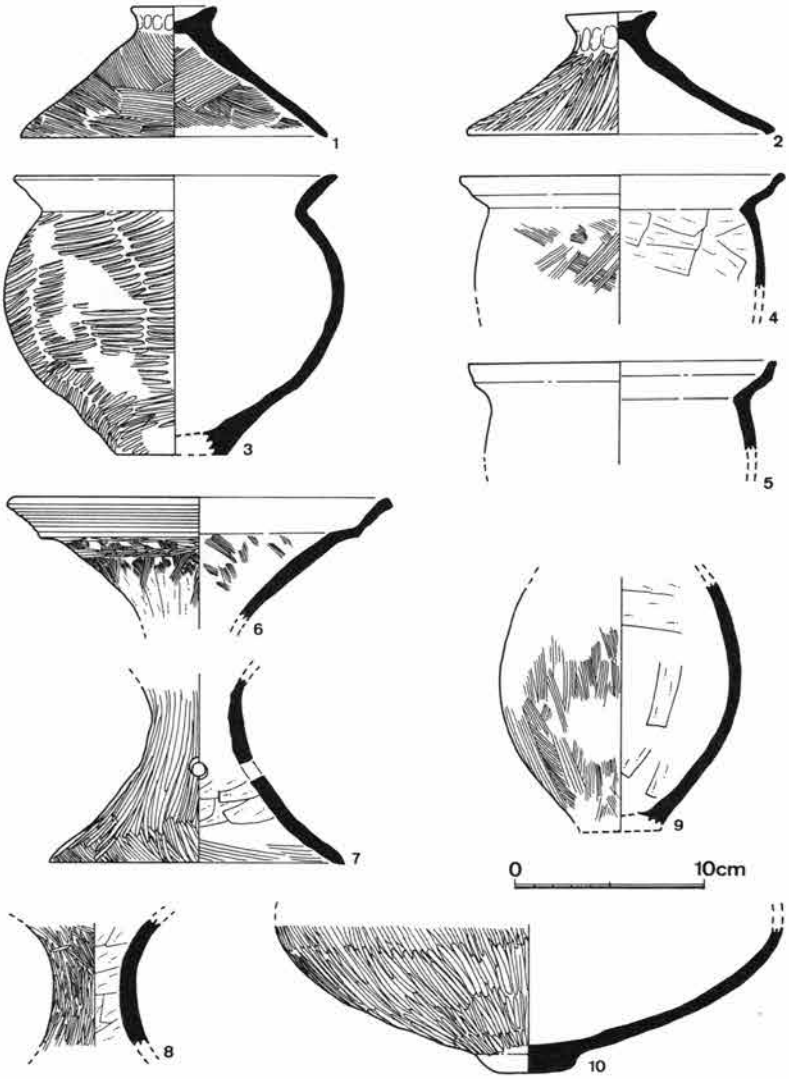
③出土遺物(第34図)

水田土壌と水田を覆った洪水砂中から、弥生時代後期末頃の土器の出土をみた。水田土壌に伴う土器は(８)のみであり、他は水田上に堆積した洪水砂中からの出土である。

第33図　水田跡39稲株痕跡分布状況図

蓋（１・２）　笠形を呈し、天井部には中窪みの把手をもつ。１は、内外面をハケメ調整。下端直径16.3cm・器高6.8cm。水田44出土。２の外面は、ハケメの後ヘラ磨き調整を施す。下端直径16.3cm・器高6.3cm。この蓋は、下層水田に伴う洪水砂中から出土したものである。

甕（３～５・９）　口縁の形態により２種に分かれる。３は、「く」字状に外反する口縁をもち、球形化した体部の外面は左下がりの粗いタタキを施す。口径16.1cm・器高14.2cm。水田45出土。２・３は、ナデ肩の体部から、大きく外反する二重口縁をもつ甕である。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り調整を施す。口径は、２が17.3cm、３が16.2cmを測



第34図　水田跡出土遺物実測図
1・2.蓋　3～5・9.甕　6～8.器台　10.細頸壺

る。9は、体部最大径が中位にある。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り調整を行う。中期の土器とみられ、水田37の出土である。

器台(6～8)　6は、斜め上方に立ち上がる受け部から、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部外面には擬凹線文を施す。受け部外面はヘラ削りの後、軽くハケメ調整し、粗いヘラ磨きを行う。口径は19.8cm。水田6出土。7は、脚部である。外面は粗いハケメ調整、内面はヘラ削りとハケメ調整。小円孔4か所。脚端径15.7cm。水田8出土。8は、水田58の水田土壌中から出土した器台筒部である。外面はていねいなヘラ磨き調整、内面はヘラ削り。

壺(10)　細頸壺の底部である。体部はタマネギ状に大きく張りだす。平底は小さく不安定となる。外面はていねいなヘラ磨きを行う。

4．まとめ

前回報告したA地区の第1遺構面では、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡5棟(うち倉庫跡4棟)・竪穴式住居跡1基・井戸跡等多数の遺構を検出したほか、少量ではあるが墨書土器・石帯・布目瓦等、一般集落ではあまり見られない遺物が出土している。(注2) 当該地付近には平城京から山陰地方に向かう古代山陰道が通り、(注3) 第1遺構面検出の遺構は山陰道に関連した集落の一部とみられているところである。

今回の報告は、第1遺構面下に存在した第2・第3遺構面の調査で判明した事実をもとに、現在の知見を述べてまとめとしたい。

第2遺構面では方形周溝墓1基と溝を検出している。

方形周溝墓の埋葬施設は木棺直葬である。棺内に副葬品はみられない。墓壙の深さが浅いことから墓域部分に封土が存在し、上部はすでに削平されたとみられるが、断面の観察では封土の存在は確認できなかった。この方形周溝墓の時期は、周溝内の出土土器から弥生時代末～古墳時代初頭頃とみられる。木津川流域では方形周溝墓の調査例が少なく、弥生時代では田辺町飯岡遺跡(後期)(注4)・木津町大畠遺跡(中期)(注5)、古墳時代では城陽市の芝山遺跡(中期)(注6)・芝ケ原遺跡(中期)(注7)に続く5例目となり、八幡市では初めての調査例となった。

出土遺物からみた溝の年代観は、SD39が最も古く庄内～布留式期に属し、SD36ではTK209型式に属する須恵器片が出土している。第1遺構面検出のSD08(集落内区画溝)と、第2遺構面検出のSD36・37・39はほぼ同一場所を流れている。溝より東側は微高地(旧自然堤防)となり、各時期を通じて流路が整備されていたものと判断できよう。微高地上には古墳時代の集落が存在する可能性が高く、溝SD39の西側は方形周溝墓の存在から墓域と考えられ、溝SD39は集落と墓域を隔てる溝とみることもできよう。

今回の調査では、墓域とみているＳＤ39以西、方形周溝墓の南約20m付近の遺物包含層中から、鶏とみられる土製品の出土をみている。下半部を欠失しているため不明な点が多いが、頭頂部にトサカが存在した可能性が高く、まず鶏と考えてよいであろう。体部が空洞であり注口の存在等から、欠失している下半部に口縁が存在し、土器の様相をもっていた可能性も残る。包含層からの出土でありこの土製品の時期を決定できないが、供伴した土器(布留式並行期)の胎土・焼成・色調が共通することから、ほぼ同時期とみてよかろう。この鶏形土製品は、その出土地点からみて、葬送儀礼に関連した遺物とみることができよう。現知見での鶏形土製品の出土は西日本に限られ、これまでに７遺跡９例(弥生時代中期～古墳時代前期)が知られている[注8]。京都府内では中久世遺跡で弥生時代中期の鶏形土製品の頭部が出土しており、今回出土の鶏形土製品は２例目となった。

第３遺構面では、弥生時代後期末頃の水田跡と稲株痕跡を多数検出することができた。この水田跡の特徴を挙げると、以下のとおりである。

①水田の立地は木津川等により形成された沖積地にある。検出した水田面の海抜はほぼ11m付近にある。水田の存在する旧地形は、南から北に緩やかに下がる谷状部にあたる。水田土壌は砂混じりの粘質土であることから、灌漑の必要な半乾田とみられる。

②水利は、調査地内に主要な灌漑施設が認められないことから、各水田の水回りはいわゆる「掛け流し灌漑」を行ったとみれよう。

③水田の基本形は四角形であるが、地形の制約を受けたいびつな水田も認められる。谷状地形を横断する東西方向の畦畔は、水利に密接に絡んだ恒常的な畦畔と考えられ、南北方向畦畔は間仕切り的な性格の畦畔と考えられる。

④水田は比較的小規模なものが多い。水田一枚は約13㎡と27㎡前後の規模を測るものが多数を占め、50㎡を越えるものはないとみられる。

⑤検出した水田面と畦畔上には、稲株痕跡とみる小穴が多数存在する。稲株痕跡には切り合うものがあり、新旧関係が存在する。水田39における一坪内の稲株痕跡は、Ａ種(新株)約90点・Ｂ種(古株)約20点を測る。調査地全域では稲株総数が30,000を越える。

⑥稲株痕跡はアトランダムな分布状況を示すが、稲の移植を想起させる稲株列も多数認められる。また、稲株列は畦畔を越えて２枚の水田に渡るものも存在する。

⑦出土した土器は山陰系(丹波・丹後地域)の特色を持つものが多数を占め、畿内・近江系とされるものはわずかである。第34図に見る蓋(１・２)と器台(６・７)は、丹後地域のＶ様式中～新段階に類例が認められる。甕(４・５)は南丹波の亀岡市北金岐遺跡の溝ＳＤ01(Ｖ様式Ⅲ－新段階)に類例が認められる[注19]。

⑧この水田跡の埋没時期は、上層の第２遺構面及び出土土器の年代観から弥生時代後期

末と考えられる。プラント・オパール分析では、約40年間の水田耕作があったと推定される。(注10)

⑨この水田跡の下20～30cmには水田跡がもう1面存在し、これまでに畦畔・稲株痕跡・足跡(洪水砂中)の存在が確認されている。

以上、内里八丁遺跡の水田跡に付いて述べてきた。京都府内の水田遺構の調査例はわずかであり、これまでに向日市森本遺跡(注11)(弥生時代畦畔)・同中福知遺跡(注12)(古墳時代前半)・京都市羽束師遺跡(注13)(古墳時代後期・平安時代)・同長岡京左京六条三坊(注14)(古墳時代前期～後期)、長岡京市棚次遺跡(注15)(平安時代)、相楽郡木津町八ケ坪遺跡(注16)(中世農道)が知られるところである。国内ではこれまでに200か所を越える各時代の水田遺構の調査が実施され、水稲耕作初期の様相も次第に明らかになってきている。これらの水田は洪水・火山噴火等、自然災害に伴って埋没放棄された例が多数を占め、内里八丁遺跡の水田跡も同様な洪水砂の堆積により水田遺構が明確に検出できた。

内里八丁遺跡の水田遺構自体は、これまで調査されてきた弥生時代の水田跡と大きく異なることはない。内里八丁遺跡の水田跡の特色としては、稲株痕跡の検出にある。稲株痕跡の検出例は少なく、わずかに滋賀県服部遺跡(注17)(弥生時代前期)・岡山県百間川原尾島遺跡(注18)(弥生時代後期)・大阪府上田町遺跡(注19)(弥生時代後期)・群馬県中村久保田遺跡(注20)(江戸時代)例のみである。内里八丁遺跡は原尾島遺跡・上田町遺跡とほぼ同一時期であり、当時の農耕技術・社会基盤等を考える上で、今後の比較・検討作業が重要になってこよう。

内里八丁遺跡では、下層の水田跡を調査中であり、今後、継続して北部の調査を実施する予定である。検討課題も数多く、詳細については調査の進捗を待って報告したい。

(竹原一彦)

注1　調査に参加していただいた方々は以下のとおりである。

岡村忠志・奥平廣子・北村　猛・古城悟志・古谷哲也・今　芳也・近藤和枝・後藤尚規・榛村昌樹・遠山光嗣・中尾友子・中岡和男・西村華子・樋野祥子・福田倫子・福田美枝・福田玲子・本田　香・森田千代子・山岡邦章・山内基弘・山中道代・山下敬子・与十田節子・脇田友子

特に佐原　眞氏・工楽善通氏(奈良国立文化財研究所)、高谷好一氏・古川久雄氏・田中耕司氏(京都大学東南アジア研究センター)、服部共生氏(京都府立大学)、高橋　学氏(立命館大学)・藤原宏志氏(宮崎大学)・柳瀬昭彦氏(岡山県古代吉備文化財センター)・小林秀臣氏(京都府農業総合研究所)には、多大な御指導・御助言を得た。

注2　「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991

注３　足利健亮『日本古代地理研究』　大明堂　1985

注４　森　浩一他『同志社田辺校地田辺天神山弥生遺跡』　同志社　1976

注５　近藤義行他「芝山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第７冊　城陽市教育委員会)　1978

注６　「大畠遺跡」(『木津町史』資料編１　木津町)　1984

注７　近藤義行他「芝ケ原遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11冊　城陽市教育委員会)　1982

注８　田名部雄一・森浩一他「―シンポジウム―鶏の考古学」(『古代学研究』第114号　古代学研究会)　1987

注９　石井清司・田代　弘他「北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第５冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985

注10　プラント・オパール分析は宮崎大学の藤原宏志教授にお願いした。

注11　浪貝　毅他『森本遺跡発掘調査概報』　長岡京発掘調査団　1970

注12　秋山浩三「長岡京跡左京第257次(７ＡＮＦＫＥ-3地区)」(『長岡京連絡協議会資料』　(財)向日市埋蔵文化財センター)　1991

注13　長宗繁一他「長岡京左京五条三坊」(『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1983

注14　「長岡京左京六条三坊跡(水垂Ｆ区)現地説明会資料」　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1991

注15　戸原和人他「長岡京跡左京第28次(７ＡＮＭＴＧ-1地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊　長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所)　1985

注16　松井忠春・荒川　史「八ヶ坪遺跡第２次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注17　辻　広志「前期水田址」(『服部遺跡発掘調査概報』　滋賀県教育委員会・守山市教育委員会)　1979

注18　高畑知功他「百間川原尾島遺跡」２(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　岡山県文化財保護協会)　1984

注19　『上田町遺跡発掘調査現地説明会資料』　松原市教育委員会　1991

注20　『中村久保田遺跡現地説明会資料』　渋川市教育委員会　1991

５．木津地区所在遺跡平成２年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、住宅・都市整備公団の依頼を受け、関西文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡の調査である。平成２年度は、木津町大字市坂にある瓦谷古墳・瓦谷遺跡・瀬後谷遺跡の発掘調査を行った。

瓦谷古墳は、丘陵から派生する尾根の末端にある直径30mを測る円墳で、昨年度まで継続して調査を行ってきた上人ケ平古墳群とは直線距離にして、200mを測る。瓦谷古墳の埋葬施設は２基あり、粘土槨で造られた第１主体を埋葬したのち、時をおき木棺直葬墓の第２主体が造られている。第１主体には大きな穴が掘られており、埋葬施設からの遺物の出土量が少なかったが、木製容器に納められたと思われる鉄鏃・鏃形石製品のほか、鉄剣などが南半部(死者の足元)から、北半部(頭位)から方形板革綴短甲などの武具が出土した。

第２主体は、一部を除いて既掘穴がなく、遺物の出土状態は良好であった。この埋葬施設からは、銅鏡のほか、多種の鉄器(鉄鉾・鉄ヤリ・鉄刀・鉄斧)、有機質地漆塗の靫・短甲・草摺などが出土した。古墳の外部施設には形象埴輪を含む埴輪や木製樹物があったものと思われるが、遺存状態はよくなかった。

瓦谷遺跡は、昭和61年度から継続調査しており、本年度は瓦谷古墳の南約100mにある谷地形の面的調査を実施した。この谷地形は、昭和61年度に試掘調査(39bt・48btトレンチ)を行い、木製品(木棺小口板・未製農耕具など)のほか、多量の土器(布留式)・布目瓦などが出土していた地点である。今回の調査では、河道状遺構を確認するとともに、奈良時代の掘立柱建物跡も新たに検出した。

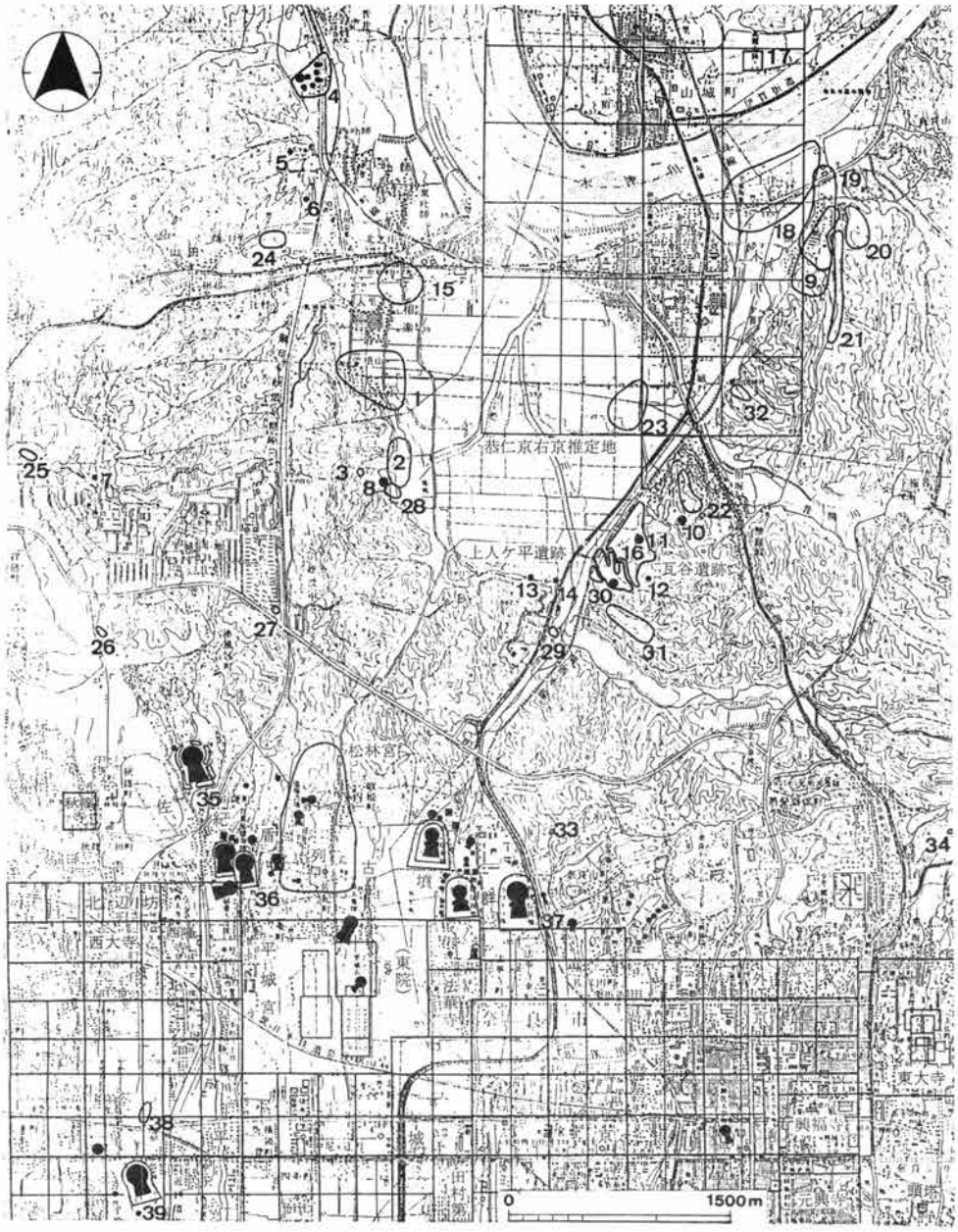
瀬後谷遺跡は、昨年度に引き続いて行った調査で、今回で４年目を迎えた。今回の調査は、昨年度検出したＡ－１トレンチの東側、1,000㎡を対象に実施した。今回の調査では、窯体構造のよくわかる瓦窯２基を検出し、瀬後谷遺跡の様相が明らかとなった。

ここでは、以上の３遺跡の概要説明を行うが、瀬後谷遺跡は、次年度以降、さらに窯体構造、灰原の有無等詳細な調査を予定しているため、簡単に概要のみの説明にとどめる。

調査は、当調査研究センター調査第２課調査第３係長小山雅人・同主任調査員石井清司、同調査員伊賀高弘が担当し、多くの補助員・整理員の協力を得た。(注1)

なお、調査に係る経費は、住宅・都市整備公団関西文化学術研究都市整備局が負担した。

(石井清司)



第35図　調査地位置図

11.瓦谷古墳　16.瓦谷遺跡　31.瀬後谷遺跡　1.曽根山遺跡　2.大畠遺跡
3.相楽山銅鐸出土地　4.吐師七ツ塚古墳群　5.坊谷古墳　6.白山古墳　7.カザハヒ古墳
8.音乗谷古墳　9.内田山古墳群　10.西山塚古墳　12.幣羅坂古墳　13.奈良山13号地点古墳
14.奈良山15号地点古墳　15.相楽遺跡　17.高麗寺跡　18.上津遺跡　19.燈籠寺遺跡
20.赤ケ平遺跡　21.釜ケ谷遺跡　22.西山遺跡　23.八後遺跡　24.樋ノ口遺跡
25.押熊瓦窯跡群　26.奈良山51・52号窯　27.奈良山53号窯　28.音如ケ谷窯跡群（歌姫西窯跡群）　29.歌姫窯跡群
30.市坂瓦窯跡　32.大谷窯跡　33.奈良山28号窯跡　34.瓦窯跡　35.五社神古墳
36.佐紀陵山古墳　37.ウワナベ古墳　38.菅原東遺跡　39.宝来山古墳

（１）瓦谷古墳

１．はじめに

瓦谷古墳は、京都府の南端の相楽郡木津町市坂字瓦谷にあって、木津川の沖積低地を「U」字形に取り囲む奈良市北方丘陵（平城山丘陵）の北側でも、最奥部の丘陵裾に形成された小規模な丘陵尾根の先端に位置する。そして、古墳の西側を丘陵裾に沿って古代の幹道である「コナベ越」（古北陸道）が走り、古墳はこうした幹道を意識して立地していることがわかる。当調査研究センターでは、昭和61年度から瓦谷遺跡の発掘調査としてこの古墳の調査を継続して実施した（第36図参照）。

初年度は、古墳の立地する丘陵の背後（南側）で、古墳に隣接する小規模な方墳２基と埴輪棺４基を検出した。中でも埴輪棺群は、瓦谷古墳をめぐるように分布することから、瓦谷古墳との関連性が指摘され、転用埴輪の年代観からこの古墳が古墳時代前期までさかのぼる可能性のあることが判明した。その後、周辺丘陵裾の水田部の調査を行い、埴輪片が広範囲に散乱するものの、古墳の施設が周囲の水田域まで拡大しないことを確認した。

こうした成果を経て、平成２年度は、墳頂部を含めた丘陵部の北側（古墳の北半部）の発掘調査を実施し、古墳の規模や内部施設の構造などが明らかになるとともに、多数の副葬品が出土するなど多大な成果を得た。

２．遺構の概要

①墳丘と外部施設

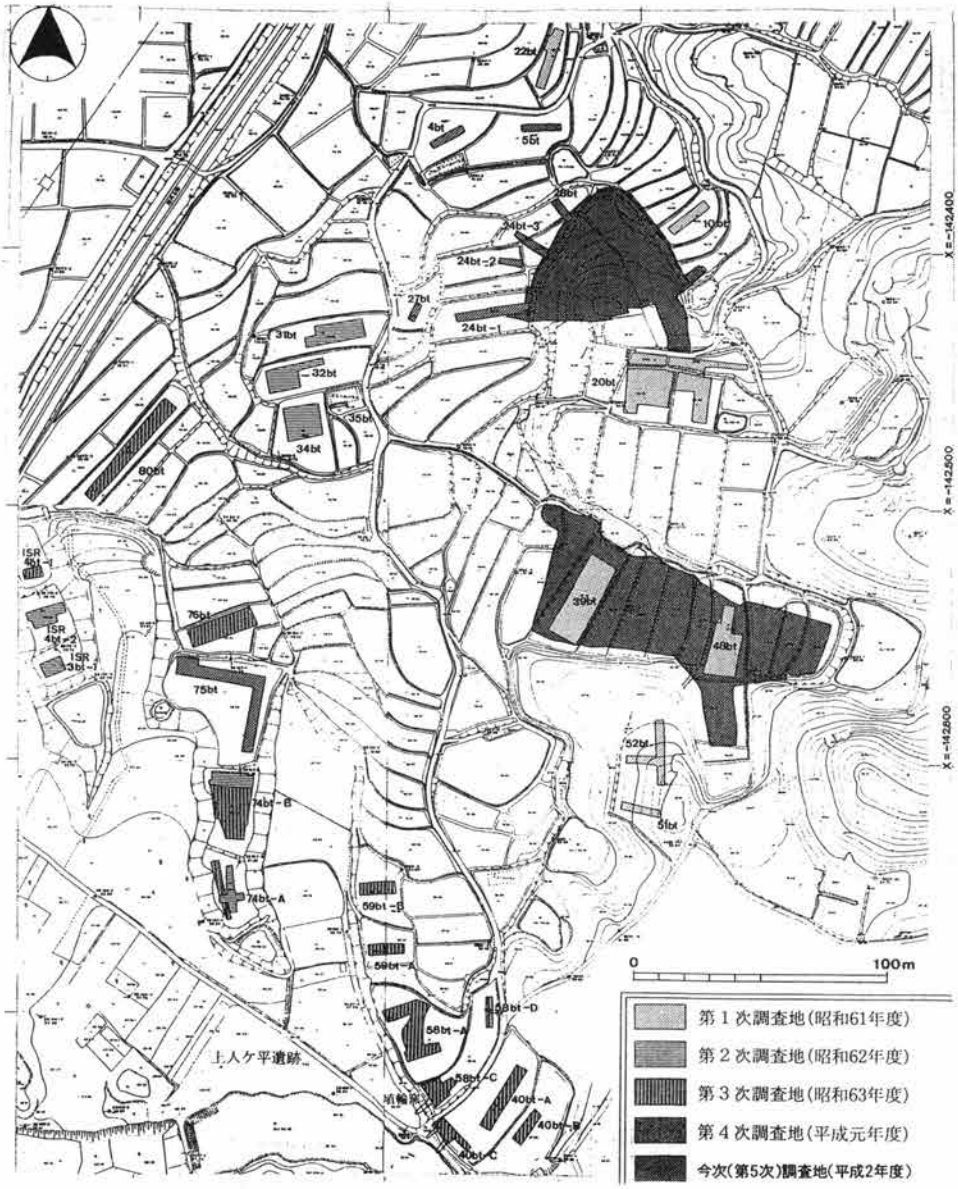
古墳は、主軸を北西～南東にとる尾根の先端に連続する比較的平坦な段丘の突端部に立地する。この部分は、地形が段丘崖に向かって急激に傾斜しており、この自然地形をたくみに利用して古墳を築いている。このため、墳丘の大半は基盤層の整形によって築造されており、上位のマウンドの盛土の厚さは現状で約１ｍを測るにすぎない。また、後述する内部施設の遺存深度や埴輪類の散乱状態を考慮すれば、墳丘部は、後世に相当量の土砂が流失している可能性が高い。実際、近年は松林→芋畑→竹藪として土地利用されている。このため、築造時の形状をどの程度残しているか疑問が残るが、現地形を詳細に観察すると、斜面の勾配の傾斜変換点が場所によって、標高にかなり差が認められる（東側が西側より2.6m高い）。ただ、北縁から西縁にかけては墳丘最高所から下5.5m（標高約50.0m）に変換点が存在する。この周囲は、わずかな平坦面を経て幅の広い不整プランの緩傾斜面となり、やがて比高差２～５ｍの崖地形となって沖積地に続くことから、古墳（墳丘）の基底を

この北西側の傾斜変換点に求めると、直径25～30m程度の中規模な円墳となる。

墳丘の外部施設に関しては、現状では段築は確認できず、葺石は転落石すら存在しない。

埴輪は、原位置を保つ個体がないものの、墳丘の周囲や墳頂部盗掘坑から相当量が出土しており、その分布の偏りから墳頂平坦部と墳丘裾の外周に埴輪がめぐっていたことが想定できる。

古墳と外域を画す外部施設としては、先の傾斜変換点とそれに続くわずかなテラス状地

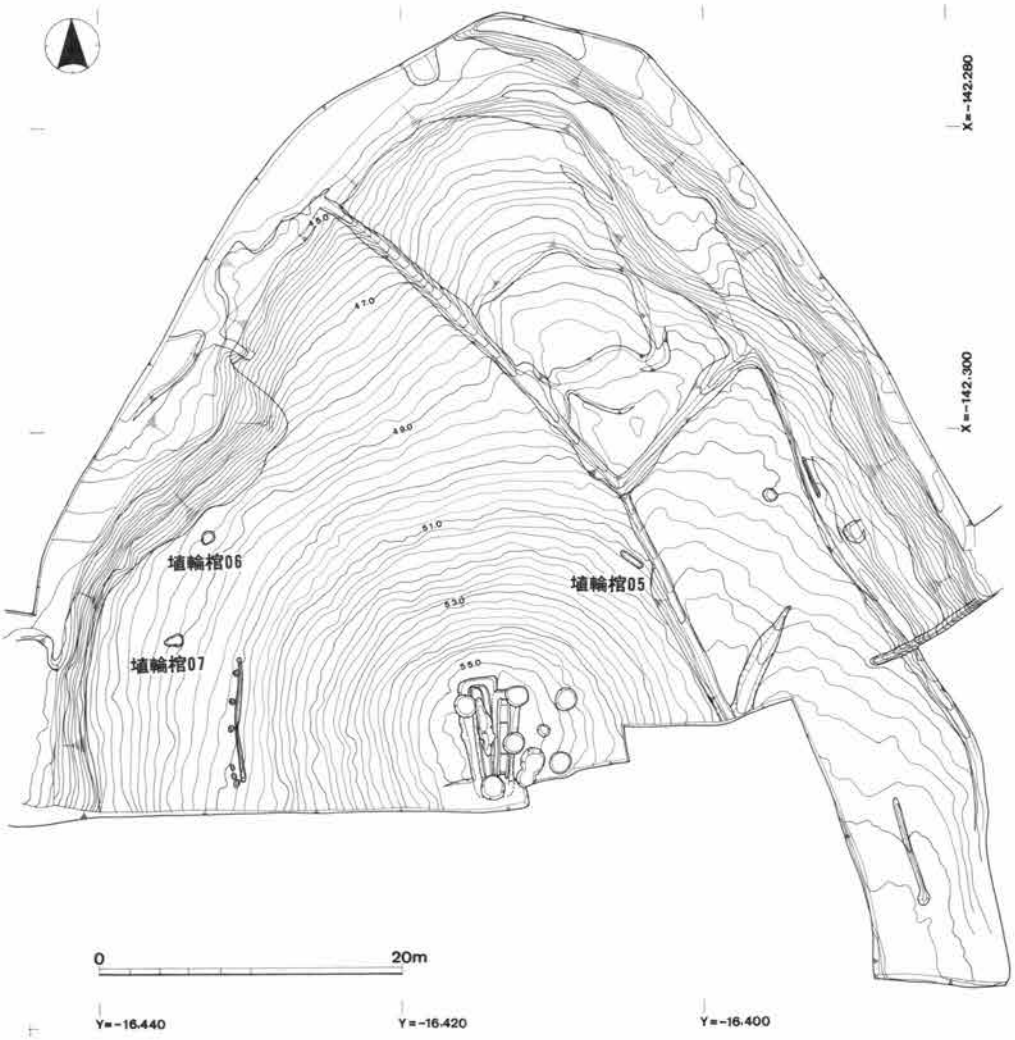


第36図　瓦谷遺跡・瓦谷古墳調査区配置図

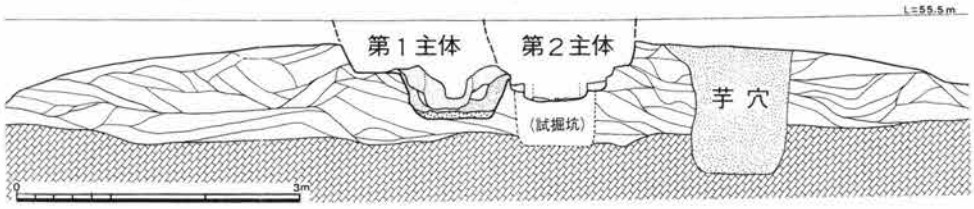
形が認められるにすぎず、少なくとも平野側に面する古墳の北半部に周溝(周濠)は存在しない。ただ、比較的残りのよい北西部では、傾斜変換点に沿う幅20cmの小規模な断面「U」字形を呈する溝が円弧長約８ｍにわたって遺存し、その外周に接するように小ピット３基が同一円周上を1.8m間隔で並んでいた。小ピットは比較的深い柱痕跡を残しており、木製樹物(木製の埴輪)の掘形の可能性もある。

②墳頂部の埋葬施設

墳頂平坦部(現状での直径10.0m)のほぼ中央で、東西に隣接する南北方向の埋葬施設２基を検出した。両者は、墓壙の隣接する側が重複しており、その切り合い関係より、西側が古く(第１主体)、やや遅れてそれに並行するように東側の施設(第２主体)が構築される



第37図　瓦谷古墳墳丘地形図



第38図　墳頂部断面図(内部主体横断面図)

という先後関係が認められる。ただ、両主体の中間に墳頂中心が位置することから、当初から２棺並葬を予定していたことが窺える。

ａ．第１主体(粘土槨)

現状では、粘土槨のほぼ中央に棺の主軸方向にのびる長円形プランの盗掘坑が、また北西と南端に近年の芋穴が存在し、遺構の一部が破壊されている(第39図参照)。

墓壙は２段に掘り込まれ、上段墓壙は、南北に長い長方形プランを呈し(検出面での長辺約7.8m・短辺約2.5m・検出面からの深さ約0.3m・主軸方位N９°W)、四壁の立ち上がりの勾配は一律約63°を測る。下段墓壙は、平坦な上段墓壙底の中央に主軸を揃え横断面逆台形状に掘り込まれ(上縁長約6.8m・同北幅1.2m・同南幅0.9m・上段墓壙底からの深さ約0.5m)、長側壁と底部が直線状を呈する。

槨の構築は、下段墓壙底に小礫混じりの粗砂を敷き(厚さ約10cm)、この上に灰白色の精良粘土を設置して棺床とする。この棺床粘土は、一部上段墓壙底にかかり、その上面は中心軸に向かって極端に内傾した後、幅約10cmの平坦面を設け、その内方をさらに10cmほど窪ませる。このため棺床粘土は、棺底部分で非常に薄くなる。

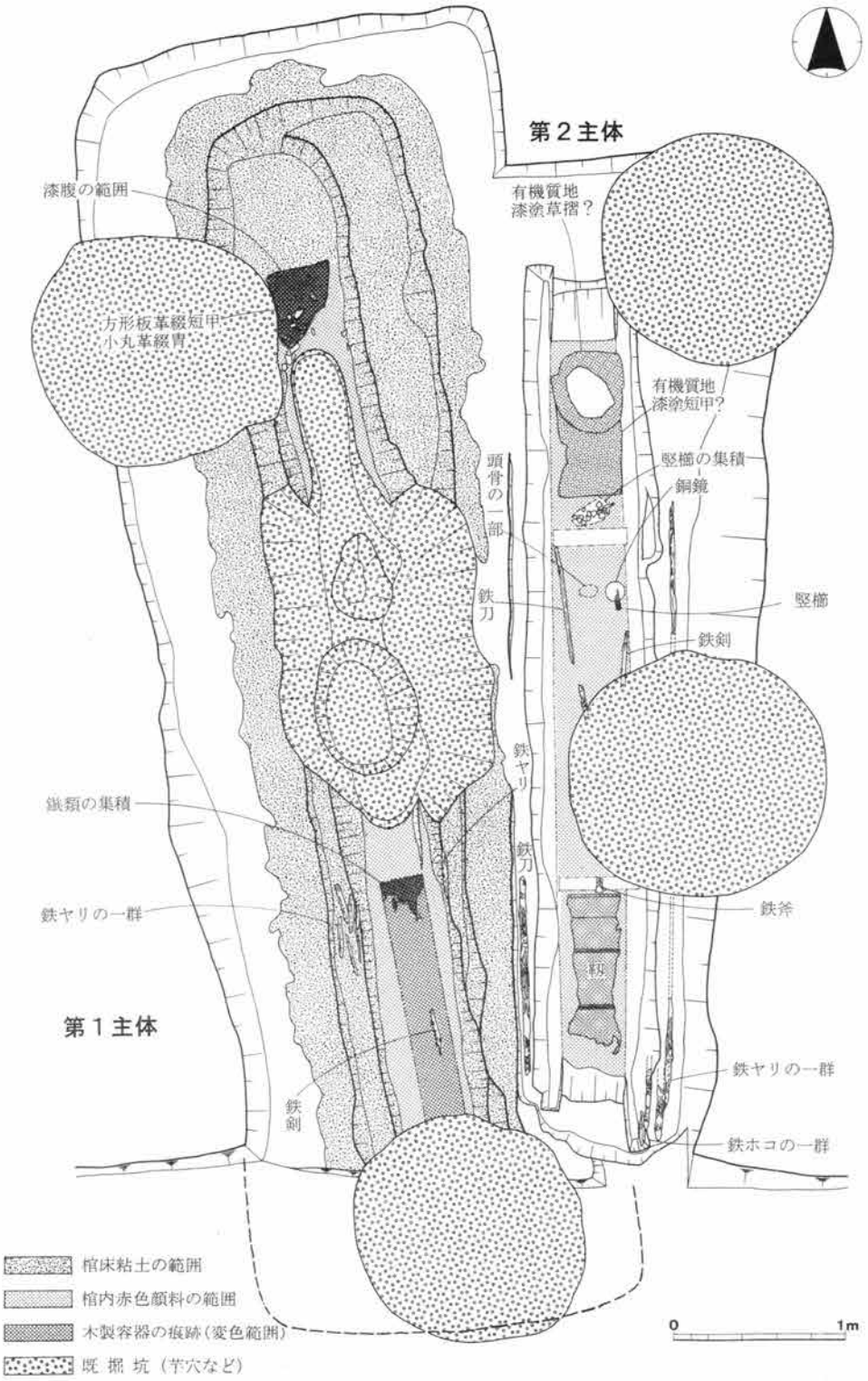
棺材は残っていなかったが、棺床粘土に残された痕跡から典型的な割竹形木棺ではなく、底部が平坦に近い偏平な断面形を示す木棺を用いていたと考えられる。

棺底には赤色顔料が薄く塗られており、上外方に立ち上がる側壁部にも認められた。

棺が設置された後、その長側部分の窪んだ空間に粘土を裏込めして棺材を安定させるが、この裏込め粘土の上面は棺床面より約15～20cmと薄く、棺の身の上端に達していなかったものと思われる。そして、やや内傾するこの裏込め粘土の上面を棺長側の遺物床とする(実際、ここには鉄ヤリが副葬されていた)。

被覆粘土は、棺床粘土よりやや粗悪な粘土を使用し、上段墓壙底にのびる棺床粘土を覆うことなく、内方から棺を覆うが、現状ではその中央部が棺の腐朽に伴って大きく陥没している。

棺の北小口は、顔料及び有機質(漆膜？)が直裁状に終わってから北側の棺床の立ち上が



第39図　内部主体平面図(副葬品配置図)

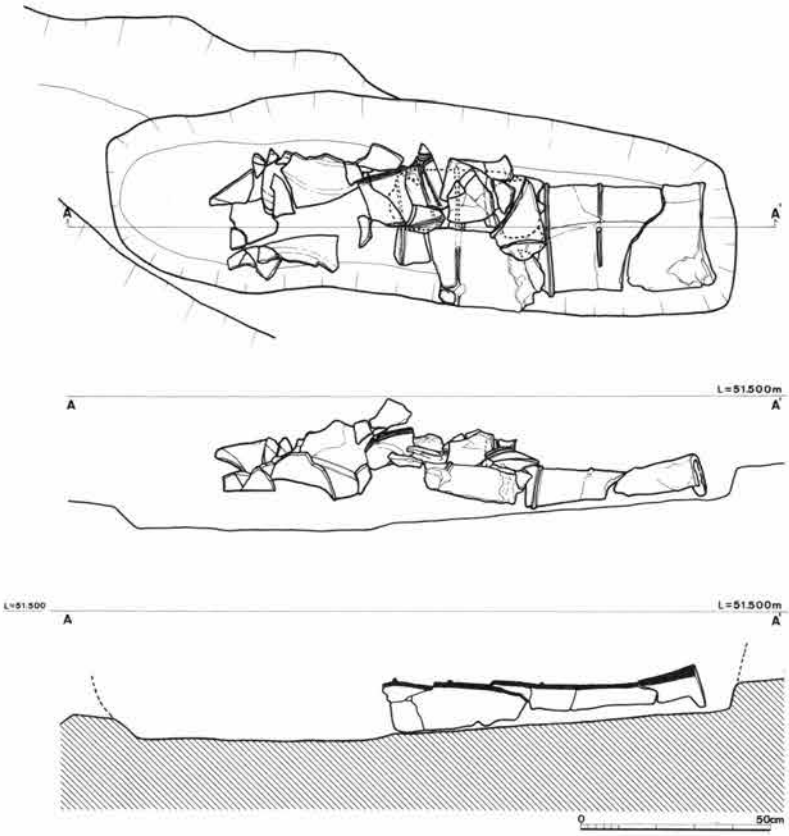
りまでの0.7mの間に、別の粘土が充塡された状況を確認しており、粘土による小口(・板)の閉塞(・支持)を想定できる。ただ、南小口・棺内仕切り板の状況は攪乱等で確認できなかった。

なお、盗掘坑以南の棺底に幅25cm・長さ145cm以上の長方形の変色域があり、その形状などから赤色顔料と副葬品(鏃類＝弓矢中心)を納入した木製容器の痕跡と推定できる。

b．第２主体(木棺直葬墓)

第１主体の東側で主軸をやや東に振って(ほぼ真北方向)設定された埋葬施設で、北東隅と中央東寄りが芋穴で攪乱されているが、盗掘は受けていない(第39図参照)。

墓壙は２段に掘り込まれ、上段部分は前者に比べやや小規模で、若干北に開く矩形ぎみの長方形プランを呈する(検出面での主軸長6.1m・北側幅約1.8m・南側幅約1.8m・検出面からの深さ約0.4m)。下段墓壙は、上段墓壙底の中央部をさらに２段に掘り窪め、上段部分は棺設置後、裏込めされて棺材を安定させ、棺長側の遺物床を形成している。下段墓壙の下半部分の平面形は、棺の規模に一致し(最大長5.2m・幅約0.7m)、両小口側は長側板の形態に合わせて突出している。



第40図　埴輪棺05実測図

棺は、下段墓壙の下半部の形状から、組合式箱形木棺(内法長4.3m・同幅約0.4m)で、両小口は、長側端の内方に小口板をはめこむ形式であることがわかる。平坦な下段墓壙底(＝棺底)には側板部分(厚さ８cm)を除いて前面に赤色顔料が残るが、棺内長軸線上をほぼ２か所に仕切板(板厚は北仕切板10cm・南仕切板８

cm)が存在したことが顔料の空間部分からわかる。

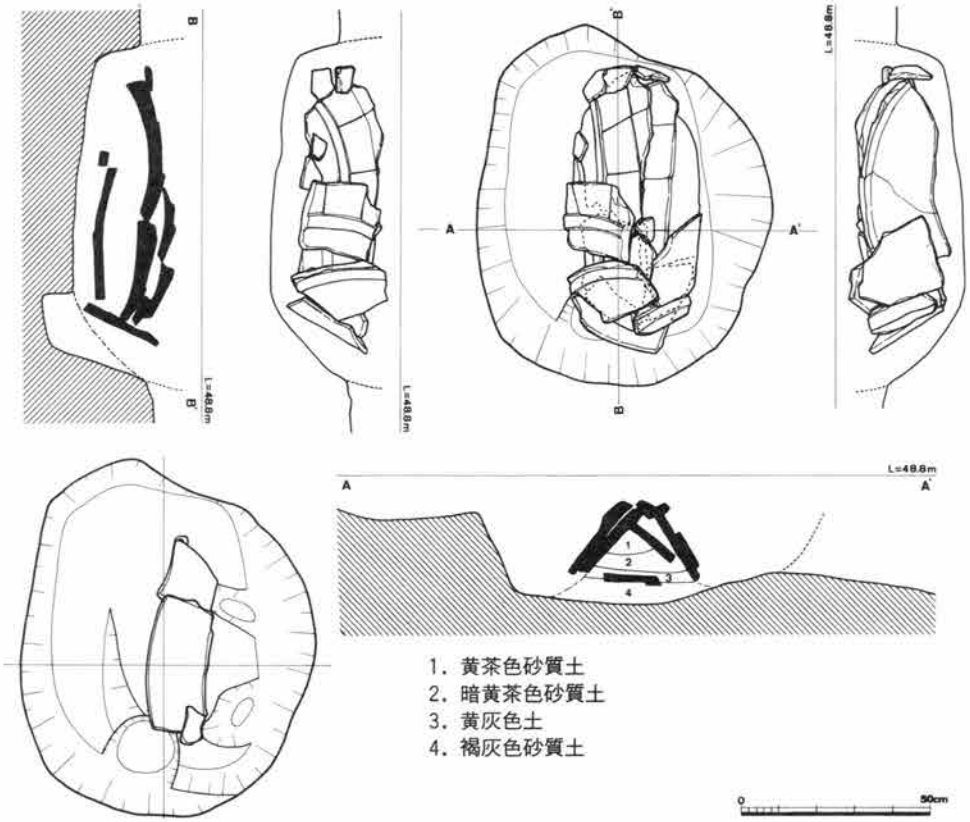
棺内は、この仕切板で３つの空間に区分され(内方長は北から1.1・1.95・1.1m)、中央の空間には赤色顔料が厚く塗られ、ここに遺骸が北頭位で埋葬されていた(頭骨の遺存による)。南北両端の空間には遺骸埋葬はなく、副葬品埋納専用の副室的な様相を呈していた。

棺長側縁の平坦面は、遺物床として利用されるが、西側のそれは、先行する第１主体の墓壙の存在に規制され、東側と非対称な幅狭に造られている。

③その他の埋葬施設

この他、墳丘裾の周囲で埴輪を転用した埋葬施設(埴輪棺)を３基検出した。過去の調査でもこの古墳に関連する埴輪棺を４基検出しており(古墳の南外周調査区)、今回の例を含め、７基の埴輪棺が古墳の周囲にあることがわかった。

埴輪棺05(第40図参照)は、遺骸を覆う棺蓋に相当する部分のみ埴輪を用い、棺身に埴輪を使っていない。鰭付円筒埴輪１個体を半截したものを連繋させ、さらにもう１個体の普通円筒埴輪を破砕したものですきまを閉塞している(棺残存長1.3m・同最大幅35cm)。小口の閉塞に用いられた埴輪片の中には、直弧文(忍ケ岡系対称文)を線刻した盾形埴輪(佐紀陵



第41図　埴輪棺06実測図

山古墳タイプ)が含まれている。

埴輪棺06(第41図参照)は、蓋形埴輪の円筒基台から笠部にかけての破片を用い、巧みに打ち割って棺底及び蓋(被覆施設)としたもので、他に例をみない(棺最大長76cm・同幅37cm)。転用された蓋形埴輪は佐紀陵山古墳タイプで、同型の破片(立飾部も含む)が墳頂の盗掘坑からも出土しており、本来の墳頂部に樹立されていたものをさらに転用したことが窺える。

埴輪棺07は、特殊な壺形埴輪(特殊な線刻を有する土師器二重口縁壺)を用いたもので、舟底形掘形を伴い口縁部が横たわっていたことから、一種の埋葬施設(埴輪棺)とみなした。現状では、体部の大半を失っており、口縁の閉塞方法も不明だが、1個体をもって棺本体としていた可能性が高い。

小口の閉塞に関しては、口縁付近の土が炭化していたことなどから、有機材(木製板など)による閉塞が推測される。

3．出土遺物

出土遺物としては、内部主体に関わる副葬品及び墳丘各所から出土した埴輪類がある。

副葬品については、現在整理中でありその詳細については正報告に譲ることとし、とりあえず、その種類と数量を一覧表に示し、これに若干の補足を加えるにとどめる。

①第1主体出土の副葬品

小札革綴冑(第42図—17・18)　鉢部を構成する小札と腰巻板を確認した。小札は、上部が円弧を呈し、下部が直截に終わる(頭下直截形)鰭状を呈する板状部材で、縦横の方向に緩く内湾している。高さ3.5～4.5cm・幅2.7～3.8cmを測り、個体間の規模に若干の相違がみられる。革綴の孔(縅孔)は錆化のため詳細は不明だが、大型のものは上下左右の四隅に縦方向に2孔ずつ(下部中央に1孔のみの個体もある)、小型のものは左右が1孔のみ穿孔し、多くが革紐の痕跡を残していた。

腰巻板は帯状の鉄板を湾曲させ上下に2段に重ね革紐で縫合する。

方形板革綴短甲(第42図—25～27)　地板の各部・押付板・引合板が確認できるが、部材として完存する個体は少ない。また、出土量が少なく全体形を復原することは困難である。胴部を構成する方形板は、縦長を基本とし(完存する裾板で縦11.5cm・上辺長約7cmを測る)、その部位によって上下・左右に緩く湾曲する。特に、第42図—26の裾板は、脇部に近い部材と考えられ、上下(外反)・左右(内湾)の湾曲が大きい。後胴の押付板(第42図－25)は、小片ながら内反りしており、円弧を呈する上縁には覆輪を装着するための円孔が連続して穿たれている。裾板下縁に残る覆輪は、革組覆輪である。

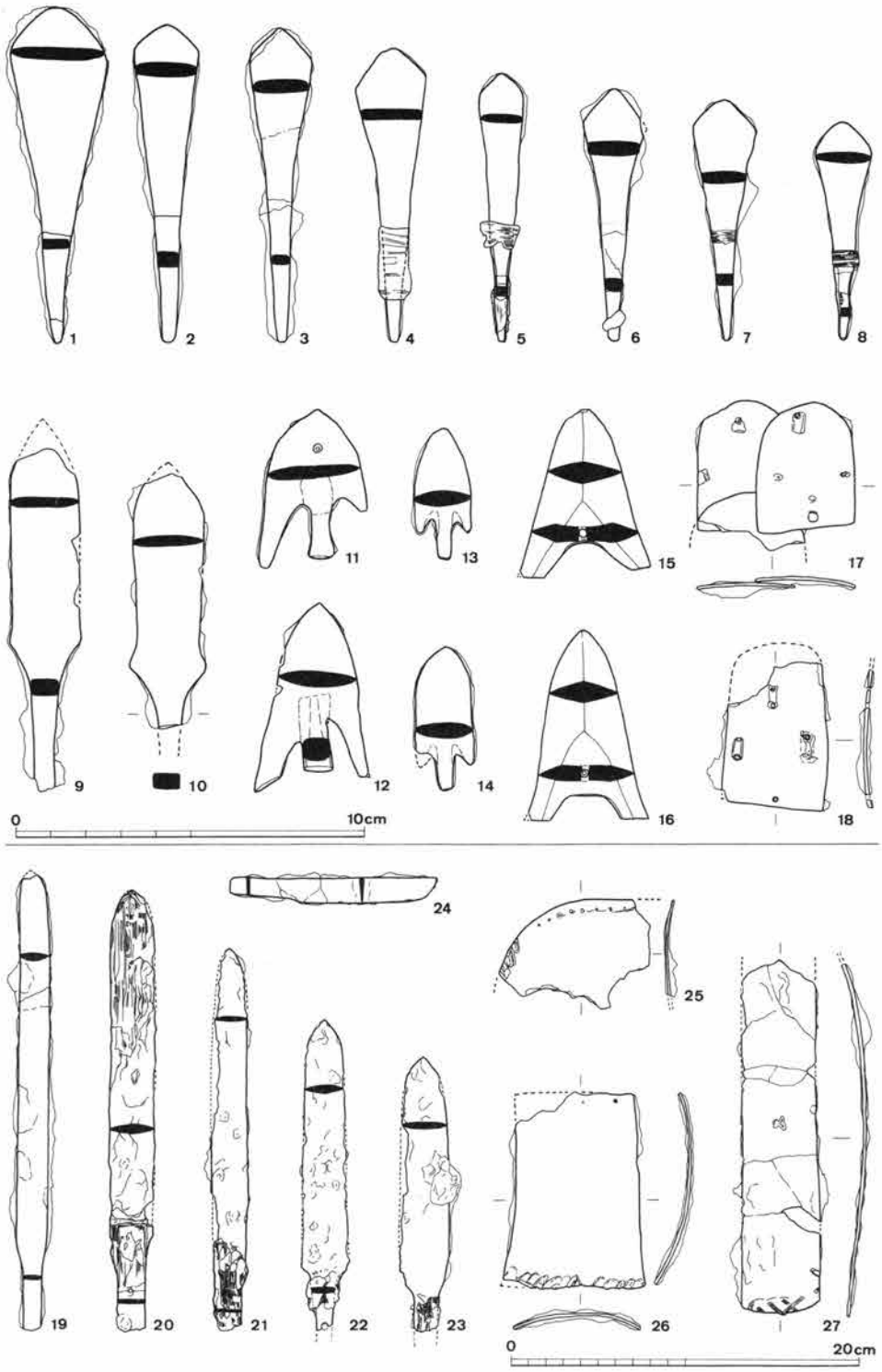
鉄鏃(第42図—1～14)　棺内南寄りに設置された木製容器(想定)内に鋒を北に向けて埋

- 第1主体粘土槨
  - 棺内
    - 盗掘坑以北
      - 小札革綴冑　（残欠）……1鉢相当
      - 方形板革綴短甲（残欠）……1領相当
      - 鉄刀子……1　点
    - 盗掘坑以南（木製容器？内）
      - 鏃形石製品……3　点
      - 鉄鏃……46　点
      - 魚叉（残欠）……7　片
      - 鉄剣……1　口
    - 盗掘坑内（埋土中）
      - 上記甲冑類の残欠
      - 鉄刀子（残欠）……3　片
      - 鉄鉋（残欠）……12　片
      - 鉄鑿（残欠）……2　片
      - 鉄剣（残欠）……数　片
  - 棺外（槨内）
    - 西側遺物床（棺南半部）
      - 鉄ヤリ（ヤリ先のみ）……1　口
    - 東側遺物床
      - 鉄ヤリ（ヤリ先のみ）……7　口
- 第2主体木棺直葬墓
  - 棺内
    - 主室的空間（遺骸の埋葬された空間）
      - 銅鏡（獣首形鏡）……1　面
      - 鉄刀……1　口
      - 鉄剣……1　口
      - 鉄刀剣茎部……1　片
      - 竪櫛……1点以上
    - 北側副室的空間
      - 有機質地漆塗草摺？（漆皮膜）1　領
      - 有機質地漆塗短甲？（漆皮膜）1　領
      - 竪櫛……10数点
      - ガラス小玉……5点以上
      - 刀子状鉄器……1　点
      - 針状鉄器……1　点
    - 南側副室的空間
      - 有機質地漆塗靫（漆皮膜のみ）1　点
      - 鉄鏃（靫内に収納）……41　点
      - 銅鏃（靫内に収納）……1　点
  - 棺外
    - 西側遺物床
      - 鉄刀（大刀）……1　口
    - 東側遺物床
      - 鉄ヤリ（木柄・装着痕残存）…4　口
      - 鉄ホコ（装着痕残存）……2　口
    - 南仕切板部分（棺蓋上？）
      - 鉄斧……1　点

内部主体副葬遺物出土一覧

納されていたもので、総数46点を確認した。その内訳は、圭頭斧箭式（圭頭鏃群Ｂ形式）鉄鏃が24点で全体の７割を占め、他に腸抉柳葉式鉄鏃４点・広根短頸腸抉長三角形鉄鏃３点・柳葉式鉄鏃１点・形式不明２点がある。(注2)

頸頭斧箭式鉄鏃（第42図１～８）は、その規模から全長10cm・鏃身幅３cm前後と、全長７cm・鏃身1.5cm前後の２群に分類できる。いずれも篦被部分に段を有さない無関式に属する。



第42図　第１主体出土遺物実測図

腸抉柳葉式鉄鏃(第42図13・14)は、全長約２㎝・鏃身幅約1.5㎝の小形鏃で身幅が厚く、逆刺・茎部とも未発達で、鏃身の断面は鎬が痕跡的に残る両丸造りである。

広根短頸腸抉長三角形鏃(第42図11・12)は、鏃身が長三角形状を呈し、腸抉と逆刺の長さがほぼ一致するもの(11)と、茎がやや長めで逆刺端部より長いもの(12)がある。茎は鏃身を挟むように造られており、その断面は円形に近い。

柳葉式鉄鏃(第42図―９・10)は、鋒先端を欠損するが長身化した鏃身を有し、鋒からふくらを有した後、内湾して山形の鏃身関に至る平面形をもつ。茎は断面長方形を呈する。

鏃形石製品(第42図―15・16)　いわゆる、平根腸抉長三角形鉄鏃(例えば第42図―12など)を模倣原体とした軟質で淡緑色を呈する碧玉製模造品で、同形態のものが３点ある。

この形態は無頸の長三角形を呈する鏃身の下辺に浅い腸抉を穿ち、削り出された逆刺の下端は水平に近い面をなす。鏃身の矢柄を受ける湾曲する山形の抉りを入れ、中央に目釘穴を穿孔する。鏃身部の断面は偏平な菱形で鎬を鋭く表わす。

鉄ヤリ(第42図―20～23)　茎部を折損する個体が多いが、全体に小形品が多く、全長26㎝前後(４点)と、20㎝前後(２点)のものがある。身幅はいずれも2.3～3.0㎝を測り、その断面は偏平な両丸造りである。関部は斜角関で、木柄との接合は不明瞭ながら直截式拵のものが確認できる。

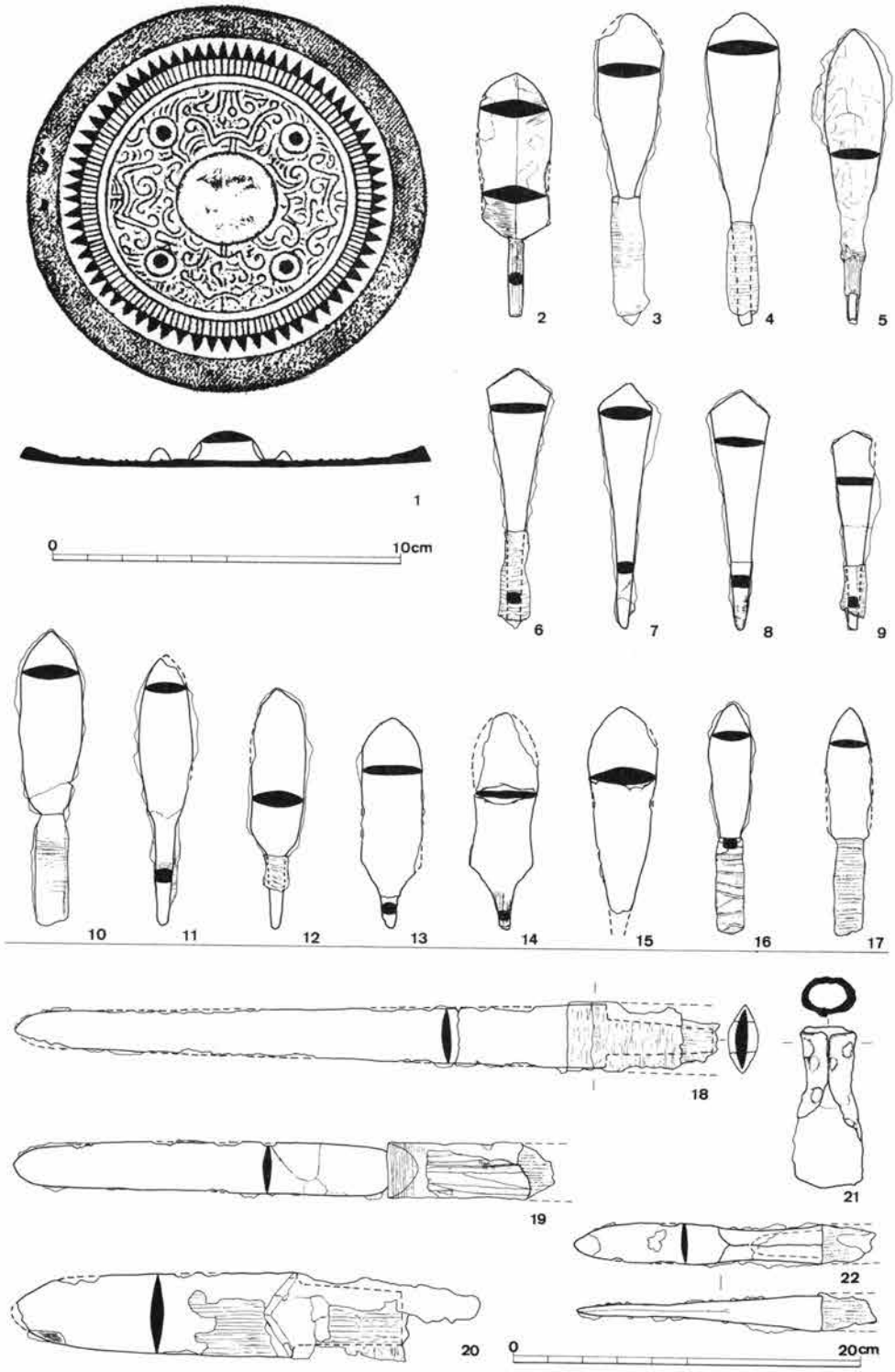
鉄剣(第42図―19)　棺内木製容器内に収納されていたもので、長柄の装着が不可能なので剣と考えた。全長26.3㎝・身幅2.6㎝を測り、先のヤリと比べるとやや細身である。関部は、両斜角関で茎部に緩やかに移行する。

②第２主体の副葬品

仿製変形四首鏡(獣首形鏡)(第43図―１)　全面が緑青錆で覆われているが、鋳上がりはよく、文様も比較的鮮明である。面形11.8㎝・縁厚3.9㎜・面の反り２㎜を測る。偏平な円座をもつ直径2.2㎝・高さ0.8㎝の鈕を中心に、周囲に円座をもつ断面角丸三角錐形の乳を４個配し、その間に太い突線描きの渦文風の文様を表わし、内区の主文様としている。外区は、外縁が平縁で、外側よりわずかに内湾する面をもつ素文帯・外向鋸歯文・櫛歯文の順に配し、外区と内区の境には二重の圏線をめぐらせて界している。内区の主文様は獣首鏡の図文が簡便化した印象が強いが、典型例にみられる四葉座はない。この鏡の様式は、全体に仿製鏡的であるが、中国に同趣の簡易鳥獣文鏡が出土している。

銅鏃(第43図―２)　靫内から１点出土した。有茎の柳葉式であり、篦代(茎)に篦被をもたないタイプである。鏃身や篦被部分に研磨痕が残る。

鉄鏃(第43図―３～17)　すべて棺内南副室内に納置された靫内から出土した。総数41点あり、その内訳は、圭頭斧箭式鉄鏃18点で全体の４割強を占め、残りはすべて柳葉系鉄鏃



第43図　第２主体出土遺物実測図

である。

圭頭斧箭式鉄鏃は、第１主体出土のものほど規模に顕著な差はなく、全長5.7～9.0cm・鏃身幅1.2～2.1cmの範囲内に納まる。篦被部分にねたまきを残す個体が多いが、すべて無関式で方形断面を呈する。

柳葉系鉄鏃は、鏃身部の長さ約7.0cm・幅約1.7cmを測るもの(第43図―10～14)と、長さ約5.0cm・幅約1.2cmの小形品(第43図―16・17)に分別できる。前者は、さらに鏃身関の有無により２分できる。すなわち、鋒からふくらをもった後、緩くカーブを描きながら茎に至るもの(10～12.全６点)と、ふくらから緩く内湾した後、低い山形の鏃身関を設け屈曲して茎部に至るもの(13・14.全８点)である。特に、鏃身関を有する個体の中には茎部が円形断面を呈するものがあり、柳葉系銅鏃との共通点が見い出せる。ただ、鏃身部の断面はすべて偏平な両丸造りで、鎬を残す個体はない。

鉄ヤリ(第43図―18～20)　全長・身幅の相違より３種に分類できる。１つは全長30cm前後・刃幅3.0cm前後を測るもの(第43図―19)で２口存在する。木柄との装着は、直截式の拵をとり、19では木柄が良好に遺存しており、その装着方法がわかる。つまり、19の場合円形断面の木柄の先端を表裏両側から中軸に向かって斜めにカットし、ヤリ身の茎を木柄に挿入した後、木柄の上に細い糸を柄の方向と直角にていねいに巻いて、上から黒色の漆を塗付して両者を接合している。第２は、全長41cm・身幅3.6cmを測るもの(第43図―18)で、直截式拵で木柄に装着される。第３は、全長26.9cm・身幅4.9cmの幅の広いヤリ身を有し、木柄との接合は、呑口式拵によるものである(第43図―20)。いずれも１m以上の長柄を漆の皮膜痕跡として残している。

鉄ホコ　ほぼ同形態の個体が２口出土した(第43図―22)。いわゆる短身広鋒鎬造式に属し、初現期の鉄ホコの形態を備えている。すなわち、身は平造りに近い鎬造りで身の幅が相対的に広い。袋部との境に斜関を有し、袋部に対して身がやや長い。袋部は円形断面を呈し、その下端は直截に終わっている。

鉄刀　棺外及び棺内から各１口出土した。いずれも錆化が激しく詳細は不明である。棺外の鉄刀は、全長119.2cmあり、平造りの大刀である。刀身には鞘の木質が顕著に残る。棺内の鉄刀は、全長78.5cmを測る平造りの大刀だが、鞘の木質は全くみられない。茎は斜角片関一文字尻茎の形態を呈する。

鉄斧　第43図―21は、鍛造の有袋式鉄斧である。長さ9.3cm・刃幅4.0cmを測り、実用品としては小形に属する。袋部から刃部にかけて、袋口から徐々に幅を狭め袋部の中ほどでくびれて刃先にかけて広がる形態を示し、広義の有肩式に含まれる。

靫　現在処理中で詳細は別に譲ることとする。身の全長約85cm・幅は底部から口部まで

ほぼ一定で19cmを測り、ほぼ縦長の長方形を呈する。

身部は、素材の違いから胴部と底部(長さ12cm)に区別できる。胴部は動物(鹿か？)の皮革を素地にして、その表面に綾織物を貼り付け、漆で塗りかためている。綾は経糸と緯糸を交差させて斜め方向に菱形の綾目の畝を走らせることによって文様を表わしており、糸の単位はおよそ７本／cmの密度で織り込まれる。また、綾の菱形文様単位を強調するべく、幅５mm程度の繊維膜(竹の樹皮か？)を輪郭に沿って配している。その織物の上面に幅４cm前後の横帯を30cm間隔に配し織物に緊縛する。この帯状部は、幅のある植物繊維を４本並行にならべて漆でかためた状態を観察できる。底部には、織物はなく、複雑な繊維の単位が断片的に残るが詳細は不明である。また、底部下端には横方向の「はしご」状の組織があり下部と界している。

この他、棺内北小口部分で漆の皮膜の広がり２か所・竪櫛17点・ガラス小玉(青色)５点、主室部分から竪櫛数点・鉄器片数点が出土している。このうち、漆の皮膜は、処理中だが、形状や細部の繊維の組織のあり方、第１主体の副葬品の配列位置(北に武具、南に矢)との関係から、有機材を素地とした漆塗の草摺及び短甲の可能性を考えている。

③埴輪類

鰭付普通円筒埴輪(第44図―２)は、タガを３条めぐらせた鰭付円筒埴輪である。

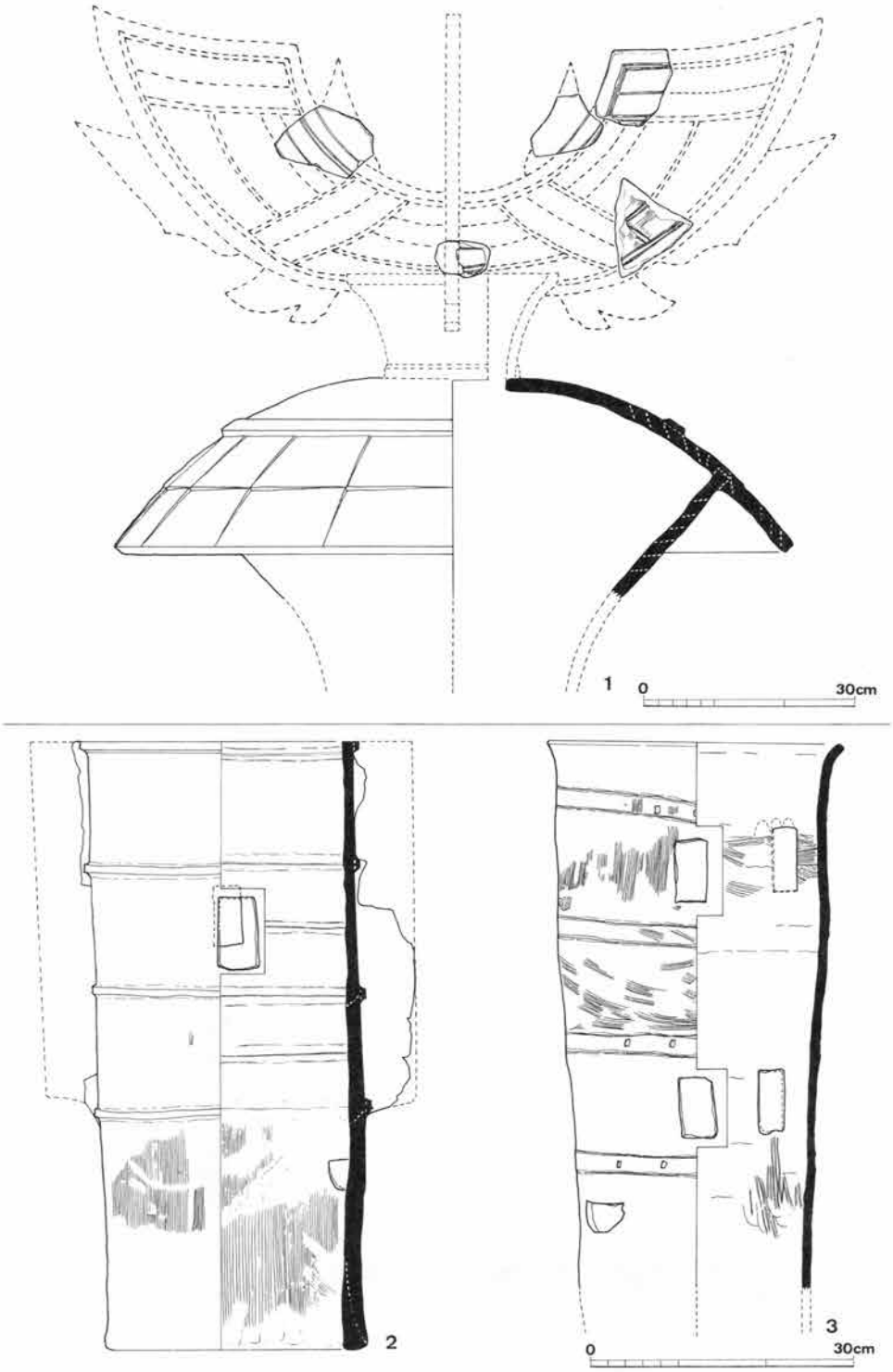
全体形状は、底径と口径がほとんど変わらない(約30cm)正円筒形を呈し、器高(69.5cm)を５等分する。下位から２～４番目の各分割線上にタガを配し、全体を４区分している。このため基底段が等間隔に割り付けられた一般段(段幅12.0cm)の約２倍程度(27.0cm)の幅に造形される。底部輪台は幅10cm前後で、薄い粘土板を貼り合わせたものを使用し、一帯造りで接合している(一般積み上げ粘土の幅は不明)。器体の成形は、右傾するタテナデを用い(内面のみ観察できる)、底端部のナデ開始部を強く押圧することで肥厚部分をならす(内面のみ)。器面調整は、器表の遺存状態がやや悪く、その詳細を知り得ないが、外面にはタテハケ(１次)→ヨコナデ(２次)調整が、内面にはタテハケ(基底段のみ)→タテナデ(いずれも１次調整)が認められる。

口唇部は、端部を外側方に屈曲させ、これに粘土紐を付加してタガ状に仕上げる。

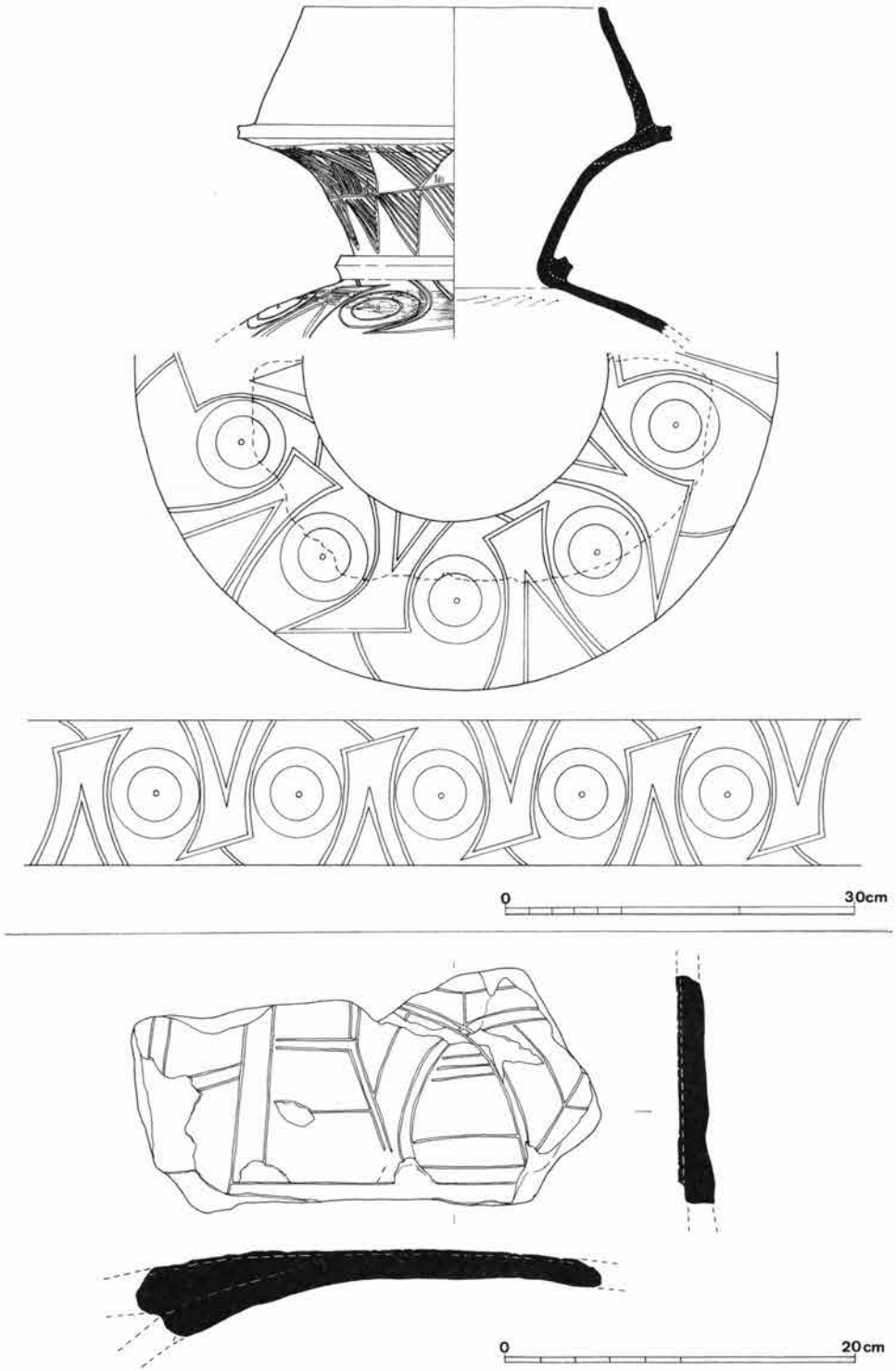
タガは、側面が指頭圧で内方にくぼむ台形断面を呈し、器面には接合位置の明示を目的とする方形刺突が認められる。

鰭は、最下段タガを下縁として口縁端に至る範囲に、タガ製作後粘土板を貼り付けて製作される。

透孔は、基底段と３段目にそれぞれ２孔穿孔される。このうち３段目は段間中央に縦長方形の透孔を対向するように配するが、基底段では段の上方に偏った位置に半円形の透孔



第44図　埴輪類実測図(1)



第45図　埴輪類実測図(2)

を一方の鰭側にのみ７cm間隔で横に並べている。

焼成は、土師質で、黒斑が片面にのみ広くみられる。器表外面には、全面に赤色顔料が塗布された痕跡がある。

普通円筒埴輪(第44図―３)は、鰭をもたない普通円筒埴輪である。底部(底端部は欠損)から徐々に口径を広げ、口縁段で大きく外反する側面形を呈する。

タガはすべて剥離して残らないが、タガを４条均等に(約11.0cm)配して全体を５段に造形している。このうち、基底段は、一般段より幅広く(13.2cm以上)、口縁段は逆に狭い(約6.0cm)。

器体の製作は、調整技法の差などから、途中２回の乾燥工程を設けて分割的に行ったことが判明した。すなわち、２段目タガ位まで粘土紐を積み上げて内外面を右傾するタテナデで成形した後、内外面ともに布を介在させた左傾タテナデ(１次調整)を施し、タガ製作後２段目外面のみ横基調の断続的なナデ(布介在)を加える(２次調整)(第１次製作工程)。その後第１次乾燥工程を経て、４段目中位まで粘土紐を積み上げ、タテナデで成形した後、外面に上位ほど傾度を強める左上りヨコハケ(１次)を施し、３段目タガを製作する。この工程内では内面調整及び外面２次調整は省略される(第２次製作工程)。さらに、第２次乾燥工程後口縁端部まで粘土紐を積み上げ、タテナデ成形後、外面にタテハケ、内面にはヨコハケを施し(１次調整)、４段目タガ製作後、口縁段内外にヨコナデを加え(２次調整)、口縁部を外反させる(第３次製作工程)。このように、この埴輪の場合、各製作工程間で調整技法が異なる。

透孔は、１・２・４段に存在する。この内、２・４段には縦長方形の透孔が段間３孔均等間隔で段を違えて同一位置に配される。また、１段目には段の上位に偏在する位置に半円形透孔が２孔対向する位置に穿たれ、２・４段とは円周上で1/6ずれた位置にくる(１孔は一致する)。

焼成は土師質で、黒斑が基底部付近の一側面に広くみられる。また、赤色顔料が外面上半部に塗られる(タガ剥離面にも認められる)。

普通円筒埴輪(第44図－１)は、埴輪棺06に転用されていた笠部と墳丘流土中、あるいは主体部盗掘坑から出土した立ち飾り・肋木(枠骨)片を参考に合成復原したものである。

笠部は、復原口径95cm、軸受接合部までの笠部高さ25cmを測り、菅笠状を呈した非常に大型のものである。笠部外面は、中ほどに幅の広い突帯を１条横位にめぐらせ上下に二分する。突帯より上は、器表のため線刻等は認められなかったが、突帯以下笠部下半には笠縁との間に横位の界線を入れた放射状表現が認められる。これは、段差による方形板を上下同じ位置で二段に重ねたような板葺き状に表現されており、１つの方形板(方形単位)を

みると、右下を基点として左上に向かって徐々に器壁を減ずるように削り取る加工を施している。円筒形台部も含めた笠部の成形は、いわゆる笠部一括成形によって製作される。すなわち、粘土紐積み上げによって製作し、十分に乾燥させて硬化した円筒形台部に、やはり粘土紐積み上げによって逆椀状に造形した笠部(一定の乾燥工程を経ているものと考えられる)を載せるように接合し、接合部を笠部内壁からの軽い粘土の押し出しによって補強している(内外とも補充粘土は用いない)。器面の調整は、図示した個体では、円筒形台部内外及び笠部内面は、ナデ技法を多用するが、ハケメを最終調整に用いる個体もある。

4．小　　結

今回の瓦谷古墳の調査成果を簡単にまとめると以下の諸点に要約できる。

(1)古墳は、段丘性の尾根状台地の突端に立地する。このため墳丘の大部分は、段丘崖につづく斜面を効果的に利用して、基盤地形を簡単に整形し築造する。また、人工的な盛土は墳頂部付近に限り施される。古墳の規模は現状では不明確である。ただ、標高に若干の高度差がある傾斜変換点を平均して算出すると、直径約30mの墳丘をもつ円墳に復原できる。外部施設としては、段築は、現地形からは確認できない。埴輪は、出土地点の偏りから墳頂部及び墳丘裾に樹立が想定できるが、出土量から古墳全体にめぐらせるほど多量に用いられたとは考えがたい。葺石は、転落石すら確認されなかったため、当初から存在しなかったものと思われる。

(2)内部施設に関しては、墳頂部で主軸を南北に揃えて東西に並列する埋葬施設(内部主体)を2基確認した。両者は、墓壙が重複しており、西側の第1主体(粘土槨)が構築された後、その東に接して第2主体(木棺直葬)が追加されるという先後関係が認められる。ただ、その配置関係からすると、古墳の築造当初から2棺並葬が企画されていた可能性が高い。粘土槨は、墓壙を二段に掘り込み、その下段部分に粘土を設置して棺床とするタイプで、都出比呂志氏分類のいわゆるＮＣ型式に該当する。ただ、棺床粘土の下位(下段墓壙底)に全面にわたって薄く砂利を充塡する方法は、同氏の典型例にはなく、ＮＣ型式に先行して出現し、やがてＣ型式と併存するＮＢ型式(墓壙底に厚く礫を敷き、この上に粘土棺床を設置するタイプ)の要素を形式的に採用したものととらえられる。

(3)過去の調査成果も含め、墳丘の周囲(墳丘基底ラインより外側)に埴輪棺が多数存在することが判明した。今回の調査までに古墳周囲全体の1/2強を調査した結果、7基の埴輪棺を検出したことになる。その多くは円筒埴輪を転用して棺本体とするが、墳丘の北西側で検出した埴輪棺06は、閉塞のみならず、棺本体にも蓋形埴輪を巧みに打ち割って転用しており、類例を聞かない。いずれも古墳の外周に沿って列状に配置されている。

（4）出土遺物には、古式の鉄製甲冑や靫などの漆塗製品・豊富な鉄製武器類・銅鏃・鏃形石製品・佐紀陵山古墳タイプの各種形象埴輪など、類例が非常に限定され、最古式に属するものが少なくないなど、注意すべき遺物が多数含まれる。

（5）古墳の築造時期に関しては、豊富な副葬品の組成・内容や埴輪類の特徴（川西宏幸氏編年の第Ⅱ期）、そして内部施設の構造などからほぼ４世紀後葉の範囲内に求めることが妥当であろう。

（伊賀高弘）

（2）瓦谷遺跡

１．はじめに

瓦谷遺跡は、平城山丘陵（奈良市北方丘陵）の北西側斜面の裾部に形成された扇状地と、それに連なる小規模な谷地形に位置する。周囲には、瓦生産工房遺跡として著名な上人ケ平遺跡が南方に重複する形で隣接し（重複する地区のうち谷部分が瓦谷遺跡となる）、また、先述した瓦谷古墳は、この遺跡内の東寄りに立地している。

この遺跡の発掘調査は、昭和61年度から継続して実施しており、今年度で５年目を迎える。この間、小規模な調査ながらも、広い面積を占める遺跡内をくまなく調査しており、およそ遺跡の実態が明らかになりつつある。

調査を開始した昭和61年度は、瓦谷古墳の位置する遺跡の東縁部を中心に調査を実施した。その結果、瓦谷古墳の立地する同一丘陵上の調査区（20bt）で４世紀代にさかのぼる小規模な方墳２基と、緩い円弧状に配列する埴輪棺４基を検出した。また、その丘陵の南側を開析するやや規模の大きな谷部の調査区（39・48bt）では、布留式併行期の土器・木器を多量に包含する自然河道を確認した。

翌昭和62年度は、上人ケ平遺跡の所在する台地を開析する小規模な谷部及び遺跡のほぼ中央で、扇状地形が西方の平野部に移行する地区の調査を行った。その結果、前者でも東側の谷部の調査区（74 bt）で、古墳時代前期及び奈良時代の遺物（布留式土器・木製品・瓦など）を多量に包含する自然河道（埋没谷とした方がふさわしい）と、唐櫃を井戸側に転用した奈良時代の井戸を検出した。一方、扇央部地区（31～35bt）では、布留式土器を包含する樹皮状に分・合流する自然河道を確認した。

昭和63年度は、前年度の成果を受け、上人ケ平遺跡の立地する台地の開析谷部（74・76bt）と台地の水田部（40・58・59bt）にトレンチを設定して調査にあたった。その結果、各地区

から古墳～奈良時代の遺物を包含する流路状遺構を追認したほか、台地の東縁部の南寄り(58bt)で、５世紀後半の埴輪窯を３基確認し、この内１基を完掘した。

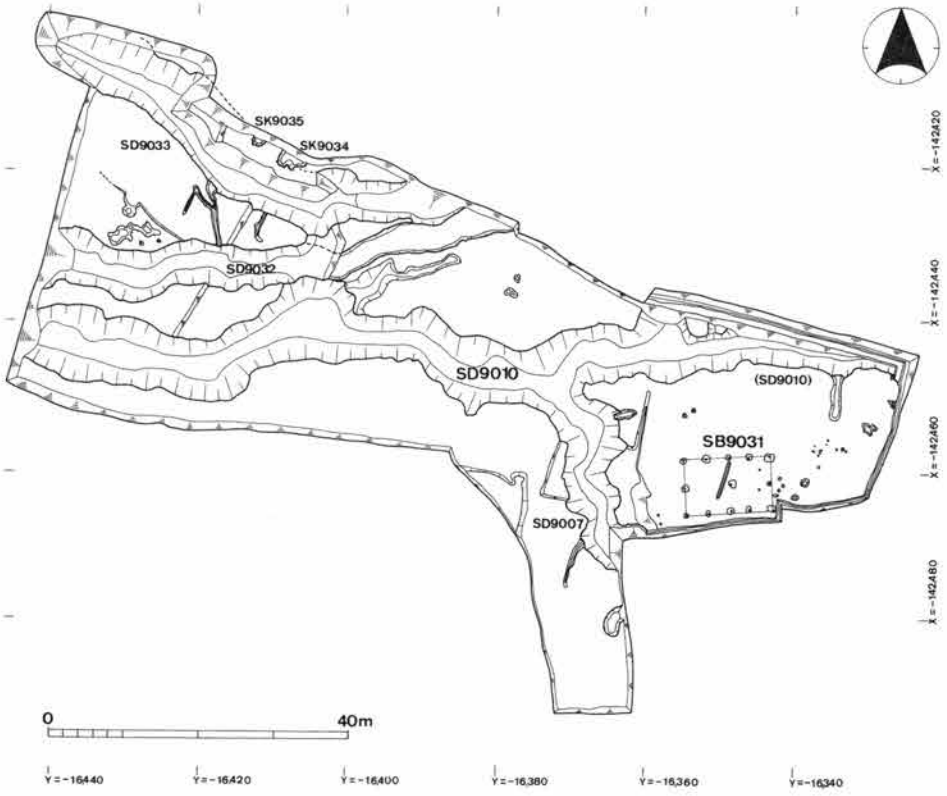
平成元年度は、瓦谷古墳の北西側の水田部に試掘トレンチを設定して、古墳の範囲確認を行った。その結果、同古墳から流れてきた埴輪片を採取するとともに、古墳の境域(墓域)が丘陵(段丘)上で完結することを確認した。

このように過去の試掘調査によって、ほぼ遺跡の実態が明らかになってきた。そこで、平成２年度はこうした成果の中で、特に瓦谷古墳の位置する段丘性丘陵の南で、主軸をほぼ東西にとる幅約50mの谷部に4,500m²にわたる面的なトレンチを設け調査にあたった。

この谷部は、昭和61年度に試掘坑を設定し、古墳時代前期の遺物が多量に出土する自然河道を検出した地区にあたり、今回はこの河道の全体像の追求及びその関連施設の確認を調査の主目的とした。

２．検出遺構

調査の結果、試掘調査で確認した河道の延長部を検出するとともに、５世紀代の埴輪片



第46図　調査区全体図(遺構平面図)

が出土する炭混じりの土坑２基、奈良時代と思われる掘立柱建物跡１棟などを検出した。

調査地の基本層序は、上位からⅠ.耕作土・床土、Ⅱ.造成土、Ⅲ.奈良時代及び中世の遺物包含層(暗褐灰色系粘質土)、Ⅳ.灰色～褐灰色系硬質砂土、Ⅴ.青灰色系無遺物層となる。

各遺構は、ⅣないしⅤ層上面で検出された。このうち自然河道は、試掘調査で確認しており、延長部でその全体像を把握することができた。すなわち、河道は基本的には現状の谷地形に沿って流れ、とりわけ主谷である東西方向の谷部では、時期の違う河道がいくつも複雑に交錯しながら西に流れている状況が判明した。つまり、39bt試掘トレンチで検出した３条の河道は、すべてが同じ時期ではなく、少なくとも北側のＳＤ9033(試掘時のＳＤ3903)・9032(同じくＳＤ3902)は、南端のＳＤ9010(同じくＳＤ3901)より古く、遺物の出土量も極めて少ない。

ＳＤ9010・9007　遺物の出土が顕著なＳＤ9010(試掘時のＳＤ4806とＳＤ3901で、両者は同一流路として連繋する)は、合流であるＳＤ9007(試掘時のＳＤ4805)との合流点より上流側で最も遺物が多く出土し、その保存状態も良好であった。ＳＤ9010・9007の規模は、上縁幅(検出面での幅)が５～10m・深さ1.2～2.5mで、下流(西側)ほど規模が大きくなる。斜面に大小の凹凸を残し、やや内湾する断面形を基本とし、その傾斜角はかなり大きい。底部は、起伏が激しく平坦面をなさない。

埋土の状況は、各所で若干異なるが、基本的には上位から灰色粘土(無遺物)、茶灰色腐植土と灰色粗砂礫の互層(包含層)、褐灰色粗砂礫(無遺物)となる。このうち、包含層はＳＤ9007との合流部付近(48bt試掘トレンチ付近)で最も厚く河道の中央部で約１mを測る。

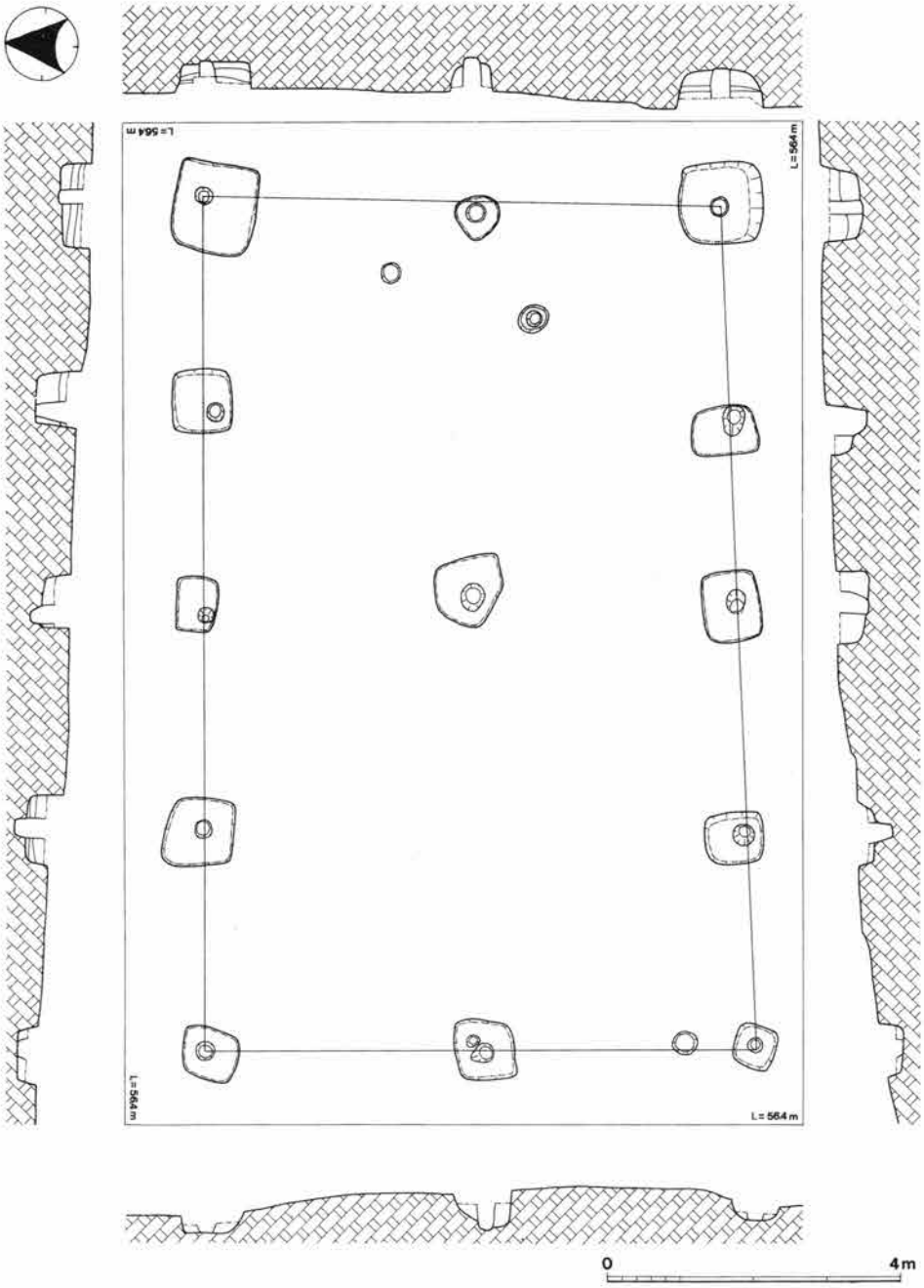
また、これに流れ込む小規模で短い溝状遺構(ＳＤ4807)があり、布留式併行期の土師器が一括投棄された状態で出土している。

ＳＸ9034・9035　調査区の西寄りでトレンチ北壁に接して検出した土坑である。両者は、ともに河道ＳＤ9033が埋没した後、その埋土上面から掘り込まれている。平面形は、北側が調査区外にあるため、全体形は不明だが、調査区内では半円形プラン(ＳＸ9034は外縁が複雑に入りくんで不整形)を呈する。

断面形は、底部に凹凸を残す皿状を呈し(検出面からの最大深さはＳＸ9034で25cm・ＳＸ9035で30cmを測る)、内部には炭混じりのシルト層が堆積する。埋土中から埴輪片(円筒・蓋形埴輪＝川西編年Ⅲ～Ⅳ期)がややまとまって出土した。北側に段丘崖が近接しており、その斜面に構築された埴輪窯の灰原の一部である可能性も考えられる。

ＳＢ9031　調査区の東端で、自然河道ＳＤ9010とＳＤ9007に挟まれた平坦部に位置する東西棟の掘立柱建物跡で、桁行４間(11.4～11.6m)×梁間２間(7.1～7.6m)の規模を有する。柱間寸法は、桁行2.4～3.1m・梁間3.3～3.8mと、若干不揃いで、特に対向する桁柱

筋が一致しない。柱掘形は、60～80cmの隅丸方形プランを呈し、中でも北側両隅柱は一辺105～120cmを測り規模が大きい。柱痕は直径20cm前後で、その痕跡のみが遺存していた。この他、建物跡中央に補助柱があり、南北の桁柱間の梁を中間で支える構造をとる。なお、



第47図　ＳＢ9031実測図

建物が建つ敷地は、南東から北西にかけて緩く傾斜しており(比高差は約１ｍを測る)、それにしたがって、柱当たりの底面も西側ほど深くなっている。おそらく、柱材の長さを調整して一定レベルを保ったものと予想される。複数の掘形内から埴輪の小片(川西編年のⅣ期)が出土したが、これは混入遺物で、伴出する少量の須恵器資料からこの建物は８世紀代と考えられる。

この他、ＳＢ9031の位置する平坦部で、これに先行する布留式併行期の土器を包含する小規模な溝や、小ピットが複数検出された。とりわけ、ＳＢ9031の東に接する部分では、検出面が硬く締まっており、小ピットや土器の集積が認められることから、壁部を削平された布留式段階の竪穴式住居跡の可能性がある。

なお、古墳時代の河道によって刻まれた基盤層(古墳時代以前の河道堆積層)中から、縄文時代晩期の鉢形土器の細片が出土した。

３．出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、縄文土器(晩期)・布留式土器・木製品・須恵器・埴輪である。このうち布留式土器は出土遺物の大半を占め、多くが自然河道ＳＤ9010・9007から出土した。ここでは布留式土器を中心に代表的なもののみ図示し、簡単に説明する。

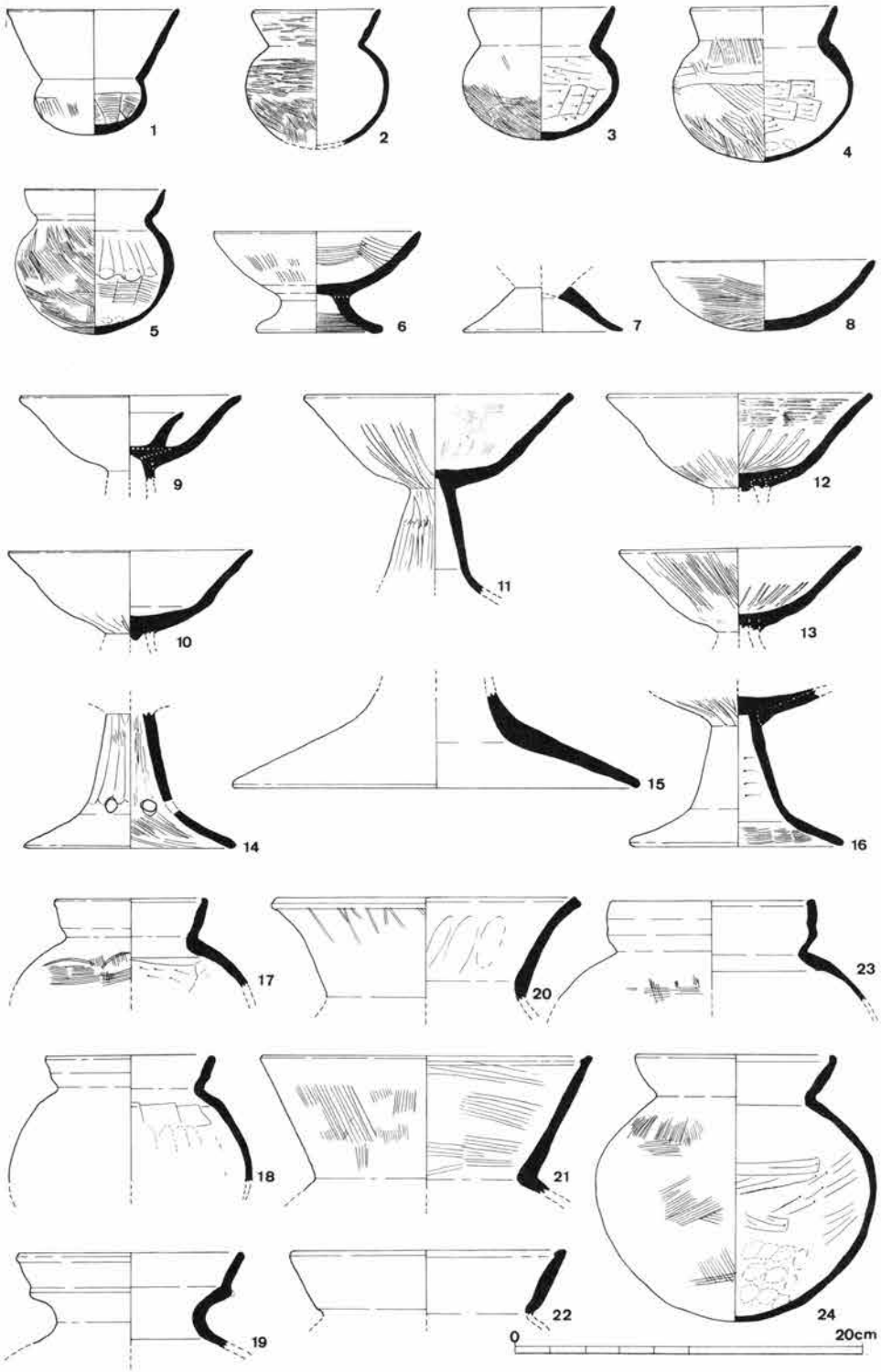
布留式土器(第48図・49図)　小形丸底土器・器台・高杯・甕・壺などがある。

小形丸底土器には、口径が器高を大きく凌ぐ小形丸底鉢(いわゆる坩・１)と、口径が器高に等しいか、それ以下の狭義の小形丸底壺(２～５)がある。後者は、さらに口縁部高が器高の1/4までのもの(２・３)と、器高の1/4以下の低い口縁部を有するもの(４・５)に分類できる。

１は、偏球形の体部に大きく外上方に直線的にのびる口縁部を備えたもので、外面全面をヘラミガキで、ていねいに仕上げ、体部内面にはハケ目が残る。

２は、球形に近い体部に直線的にのびる口縁部をもち、体部から口縁部外面にかけて縦基調(下方からみると放射状)のハケメ調整を施した後、体部最大径以上口縁部外面にかけて、ていねいなヨコ方向のヘラミガキを加える。体部内面は、ヘラケズリの後、口縁部にかけて、ていねいに指頭ヨコナデを加えて平滑に仕上げる。

３・４は、偏球形の体部に、直線的に外上方にのびる口縁部を備える形態を呈する。器面の調整は、外面全体を縦基調のハケメで調整し(４はさらに肩部付近に連続的なヨコハケを加える)、内面はヨコ方向にヘラケズリした後、３は、体部最大径以下に指頭ヨコナデを、４は、体部最大径より上位に板ナデを加える。口縁部調整は、最後に行い、内面の頸部くびれ部から、外面の体部最大径付近まで指頭ヨコナデを用いて仕上げ、重複する部分で先



第48図　出土遺物実測図(1)

行するハケメを消す。

５は、短く内湾する口縁部を具備するもので、体部外面(おそらく口縁部外面も含む)に、ていねいなハケメ(体部最大径を境に上半は施行方向を揃える左傾ハケ、下半は不整方向のハケの後回転指頭ナデ)を施し、内面は、体部最大径を境に下半にはヨコ方向のヘラケズリ、上半には指オサエを施す。口縁部調整(外面のみ布を介在させるヨコ方向の指頭ナデ)は、口縁部の内外に施し、その範囲を越えないため、体部外面の全面にハケメが残る。

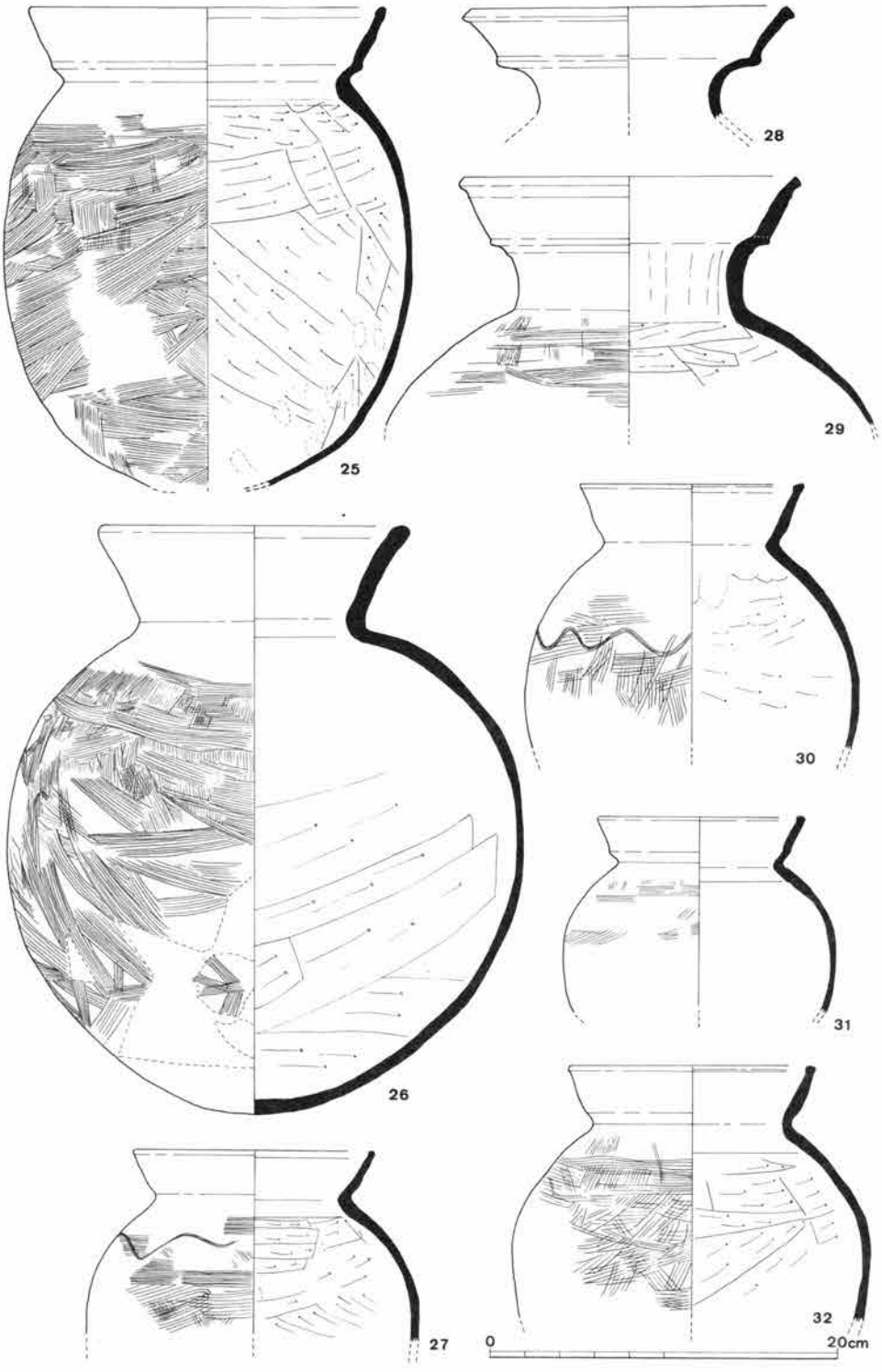
小形器台(７)は、裾が緩く「Ｓ」字状に湾曲する脚台部の小片で、中央部は貫通しない。器面は内外面ともに布を介在させた指頭ヨコナデで仕上げる。

鉢(８)は、丸底で、底部から口縁に至るまで同一の曲率を保つ小形の鉢形土器で、器高は口径1/3以下を測る。器面調整は、摩耗のため不詳だが、外面は全面にわたり、下方からみて一定方向のハケメを施した後、口縁部のみヨコナデを加える。

高杯(９～16)は、杯部と脚部が分離したものが多い。杯部は、いずれも体部から丸く屈曲した口縁部が外上方に緩く外反ぎみに開く形状を呈する。９は、杯部の内側に小さな杯を合体させたような二重構造の装飾高杯である。杯部の調整手法に関しては、外面は図示したすべての個体で共通しており、下方からみて放射状を呈するハケ(多くは上位が左右に傾く)を施した後、口縁部調整としての指頭ヨコナデを加える。

内面調整には、若干の個体差がある。つまり、はじめに口縁部に放射状のタテハケを施す点は共通するが、12では、その後全面に指頭ナデを施して、体部中央から口縁部中位にかけて放射状ヘラミガキを加える。さらに、13では、放射状ヘラミガキの周囲(上位)に断続的なヨコヘラミガキを付加してからていねいに仕上げる。一方、11ではミガキ技法を用いず、放射状ハケの後、これに代わって口縁部に断続的なヨコハケを加える。いずれの個体も最後に、指頭ヨコナデによる口縁部調整を内外に施す。脚部(14～16)は、裾部が屈折して大きく開き、脚柱部が直線的に緩やかに広がるもの(14・16)と、大形で大きく外反する裾部を有するもの(15)がある。調整は、前者の場合、一般に外面全体をナデを用いてていねいに調整し、16では脚柱部に面取り様の縦方向の板ナデを加えている。内面は脚柱部にしぼり目を残すもの(16)と、回転ヘラケズリで平滑にならすもの(14)がある。また、裾部内面(下面)は、ほとんどの個体が、ハケ調整を行っており、例えば12の場合、下方からみて、くもの巣状(断続ヨコハケ)に、16では斜放射状に施す。全体の製作は、すでに、完成している脚部の上端側面を基礎に粘土紐を積み上げて杯部を造形し、杯部内底部に粘土を補充して脚柱部の軸孔を塞いでいる(挿入付加法)。杯部外面の初期調整の放射状ハケが一部脚柱部に及んでいることは、これを傍証している。

台付鉢(６)は、８と同形態の鉢部(体部)に低く外反する脚台を付設したものである。完



第49図　出土遺物実測図(2)

成後の鉢部に脚台を付加するように成形する。調整は、鉢部外面は放射状ハケの後、粗いヨコヘラミガキ、内面は全面をなでて平滑にした後、口縁部に断続的なヨコヘラミガキを施す。脚台部は、内外面とも布を介在した指頭ヨコナデで仕上げる。

甕(17・18・22～27・30～32)は、口縁部が内湾し、口唇部を肥厚する典型的な布留形甕(17・22・24～27・30～32)が多いが、少数ながら口縁が短く外反し、口唇端部が丸くおわるもの(18)や、口縁中位で屈曲して上半が直立し(緩慢な二重口縁)端部を水平に面取りするもの(23)などが含まれる。前者は、口縁の規模から口径９～12cm(17・24・31)の小形品と14～15cmの中形品(27・32・22)に分類できる。ただ、17は、口径が20.8cmあり、突出した規模を示すが、頸部のくびれ部径も相対的に大きく、体部最大径との差が小さくやや特殊な形態を呈する。

器面調整は、個体間でほぼ共通する。すなわち、外面は体部全般にタテ基調のハケメを施し、体部最大径より上に横基調の断続的なハケを加え、最後に肩部にていねいなヨコハケを施すのを一般とする。内面は、底部付近を指頭により押さえた後、器高の約1/4より上にヘラケズリを施す。ケズリの方向は、中形品ではタテ基調に施した後、肩部より上に横方向のケズリを加えるが、小形品の場合、全般に横基調にのみ施す(24)。口縁部は、布を介在させた指頭ヨコナデで最後に調整し、その範囲は体部外面に数cm及ぶ例が多い。また、口縁内面にナデに先行してヨコハケを施すもの(32)もある。

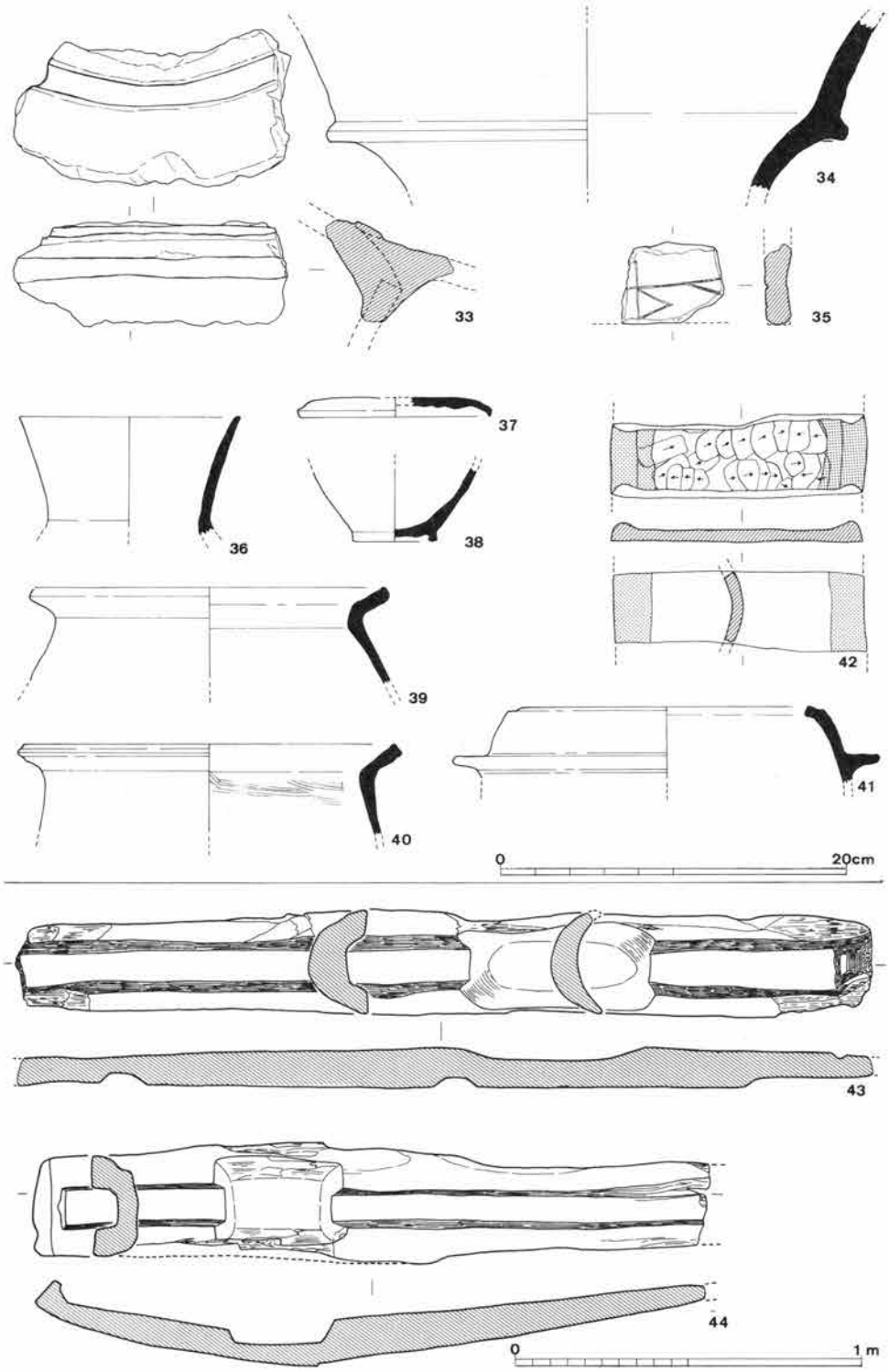
二重口縁壺には、小形品(19・28)と中形品(29)が認められる。いずれも頸部が太めで、１次口縁が大きく外反して、その内端面に外傾する２次口縁がとりつく形態を呈する。口縁部外面中位の稜線は、突出度が低く断面も鈍く丸みを帯びている。調整は、外面では体部から１次口縁にかけて左上がりのタテハケを施した後、体部上半にていねいなヨコハケを加え、内面は、頸部屈曲部以下を横位にヘラケズリし、最後に１次口縁内面上端から体部上端にかけて指頭ヨコナデを施して仕上げる(29)。

直口壺には、口縁部が緩く外反し、外傾する端面を有するもの(20)と、口縁部が直線的に外傾し、口唇部が内傾肥厚するもの(21)がある。このうち21は、口縁の内外にハケを用いた後、布を介在させた指頭ヨコナデを加えて調整する。

埴輪類　普通円筒埴輪以外に若干の形象埴輪が含まれる。いずれも黒斑を有する。

34は、朝顔形埴輪の口縁部断片で、１次口縁の内端に２次口縁を付加する製作技法を採る(分割成形)。

33は、蓋形埴輪の笠部と台部の接合部付近の破片で、台部上端から笠部上半を連続的に製作し、直線的に外下方にのびる笠下半(笠縁)部は後から付加する(笠部分割成形)。また、低平で小規模な笠部中位突帯は、台部接合部より内方(上方)に位置し、笠縁部接合後に粘



第50図　出土遺物実測図(3)

土帯を貼り付けて成形する。

木製品　図示したものは出土層位や共伴資料から布留式併行期に属するものと思われる。42は、短軸方向(図の上下)を欠損するが、木材をていねいに円筒状に加工し、小口両端の内面を断面半円形に肥厚させ、この部分に蔭切状の黒漆を塗布する。外面は、平滑に調整するが、内面には加工痕が顕著に残る。用途不明の精製品である。

43・44は、粗削りの丸太材(クリ)を半裁し、断面の中軸に沿って溝を掘り込んだ導水管状の木製品である。43は、残存長247cm・幅25～30cmを測り、その中軸に上面幅約15cm・深さ約５cmの側壁が外上方に開く溝を内掘りする。また、長径約60cm・短径約25cmの浅い皿状断面を呈し底が溝より深くなるくぼみを設ける。底面にも、本体の長軸に対して直交する方向の溝状の掘り込みをほぼ等間隔で３か所配している。44は、残存長約200cm・幅29～32cmで、中軸溝は側壁の立ち上がりが垂直に近い長方形断面(上面幅12cm・深さ約７cm)を呈し、一端は、小口壁が直線的に立ち上がって終わる。溝の開始部より45cmの部分に長辺７cm・短辺30cm・深さ11cmを測る平面隅丸長方形・断面逆台形の掘り込みを設ける。本体下部には造作を加えない。

４．小　　結

今回の調査成果を以下に列挙する。

(１)昭和61年度の試掘調査(39・48btトレンチ)で検出した河道は、時期のちがう３条の自然河道であり、それらが現在の谷筋に沿って東から西に流下する旧地形が判明した。このうち、ＳＤ9007・9010は布留式併行期に機能し、短期間で埋没した自然河道であることがわかった。

(２)布留式併行期の土器資料に関しては、層位的な抽出が不可能であるが、形式的にみると、個々の器種間に若干の時間幅を見い出せる。これを既存の編年案に対照させると、例えば都出比呂志氏編年の布留式古相～中相、寺沢　薫氏の典型的な布留式(布留０式～２式)におよそ比定し得る。

(３)河道出土の遺物の根拠となる生活関連遺構(住居跡など)は、谷部である調査区内では顕著に認められず(削平された可能性はある)、遺物の分布状況などから北側の段丘上の平坦部にも存在する可能性が高いと思われる。

(４)奈良時代の掘立柱建物跡の発見は、当該期の遺構が西側(上人ヶ平遺跡)のみならず、瓦谷遺跡の東半部にも存在することを明らかにした初見例として重要である。こうした奈良時代の遺構の広がりや性格は、今後の広範囲の調査を待って検討しなければならない。

(伊賀高弘)

(3)瀬後谷遺跡(第4次調査)

1．調査の経過

瀬後谷遺跡は、平城宮北方の奈良山丘陵の一画で、昨年度調査を実施した上人ヶ平遺跡とは、丘陵を挟んだ南側の谷筋にある瓦窯である。

瀬後谷遺跡の調査は、昭和62年度より継続して実施しており、今回で4年目を迎える。

第1次調査(昭和62年度)は、谷水田部に10か所の試掘グリッドを設定し、遺構・遺物を確認するための試掘調査を行った。この試掘調査では、22btグリッドで灰原の流土と奈良時代の須恵器・瓦が多量に出土、22btの西側に設定した21btグリッドでも遺物(須恵器・瓦・中世土師器皿等)が出土し、この周辺に窯の存在を想定していた。

第2次調査(昭和63年度)は、第1次調査の試掘調査の結果を踏まえ、谷の南側斜面(試掘対象面積8,800㎡)の磁気探査を行った。その結果、22btグリッドに近接した6・7区でわずかに反応変化を示し、丘陵部でのある程度の試掘範囲を限定した。

第3次調査は、磁気探査の結果、丘陵部の試掘対象地が限定できたため、調査地を限定し、試掘調査を行った。第3次調査では、A地区・B地区・C地区に各トレンチを設定し、掘削作業を進めた結果、B・C地区では窯に関連した遺構・遺物はみつからなかった。ただ、A地区では、炭層の堆積する溝状遺構を検出し、同炭層から奈良時代の布目瓦・須恵器とともに、窯壁の断片が散乱した状態で出土し、この周辺に本来あった窯が、後世の削平を受けてなくなったと考えた。

第4次調査は、第3次調査のA－1トレンチの東側にトレンチを設定し、掘削作業を進めた結果、後述するように瓦窯2基を確認した。ただ、第4次調査が平成3年1月から調査を着手したため、瓦窯の本体・灰原の範囲等、十分な調査が行われていないため、平成3年4月以降、新たに調査を進めていく予定である。このため、窯の構造・出土遺物等の詳細な報告については、次年度以降の調査結果をまって報告する。

2．第4次調査の概要

第4次調査は、第3次調査で検出した溝状遺構の西側を中心に、丘陵斜面約1,000㎡を対象に発掘調査を実施した。この第4次調査の調査対象地は用地の都合上、磁気探査を行っていない地点であり、窯の有無については不明であった。

調査は、丘陵上部より表土を順次除去していったところ、幅の狭い丘陵鞍部の突端で、

瓦が集中して出土する地点を確認、さらに調査を進めていくと、窯体に関連した焼土及び灰層を確認した(1号窯)。１号窯の周辺精査とともに、１号窯の北側の丘陵の谷水田の境の地点でも、新たに窯体の一部と思われる窯壁・焼土を確認した(２号窯)。

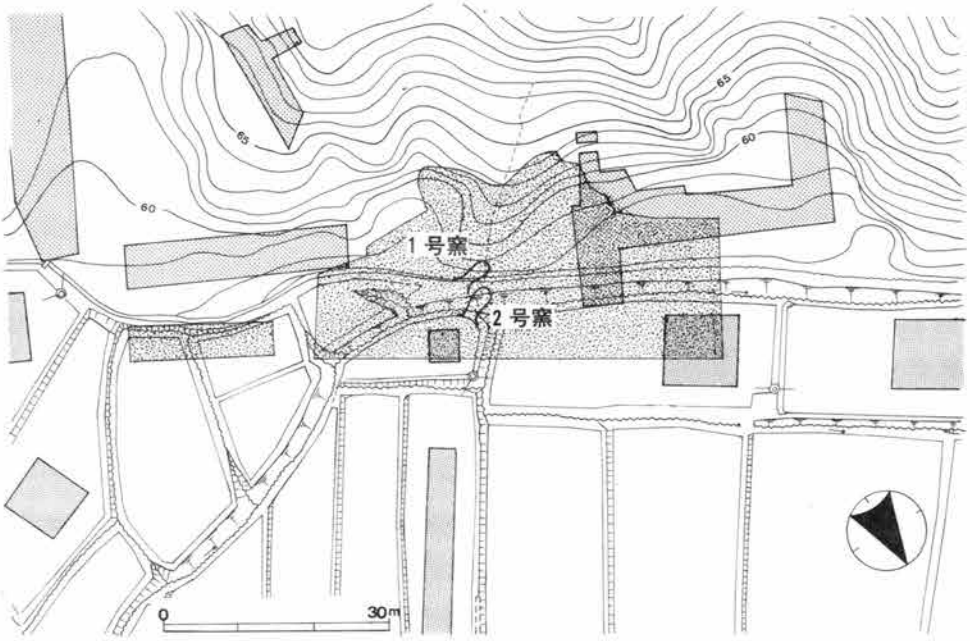
１・２号窯とも、窯体内の精査を行うとともに灰原の範囲を追求するため、調査地を拡大していったが、１号窯では、後述するように前庭部の狭い範囲で灰原を確認したのみであり、また、２号窯は、前庭部から灰原にかけ、旧流路あるいは土取りにより後世に削り取られ、確認することができなかった。

ａ．１号窯

１号窯は、丘陵斜面をトンネル状にくり抜いた地下式有段有階の瓦窯で、残存長約4.5m・最大幅約1.8mを測り、焼成部・燃焼部には補修作業が行われている。

焼成部　築窯当初の焼成部床面は、丸瓦を窯の主軸に対して直交するように据えて段部の角を設け、さらに、粘土を貼り付けて水平面を設けている。焼成面の平面形は、燃焼部と焼成部の段差(階)部分で最大幅のある胴張り形態で、段を設けるための丸瓦も、燃焼部近くでは７個程度の、煙出し部近くでは２個程度の丸瓦を使用している。

補修時の焼成部床面は、築窯当初の丸瓦を設けた段の上に平瓦を２～３枚積み上げ、やや変則的な段を設けている。



第51図　調査区配置図

燃焼部　築窯当初の燃焼部は、粘土によって窯壁を貼らない、地山をそのまま利用した窯壁で、焚口付近からの長さ2.06m(水平距離)・幅1.96mを測る。この燃焼部では、燃焼部の中ほどから前庭部にかけて、長さ2.3m・幅10cm・深さ３cmの浅い溝が掘り込まれており、排水溝と思われる。

補修時の燃焼部は、築窯当初の階部分を焚口方向に45cm前面に造り替えており、階の壁面にあたる部分には、平面の凹面のカーブを利用しているものもある。階を前面にするための裏込めには丸・平瓦を立て並べている。

焚口部　焚口部は、地山をくり抜き、燃焼部より狭くしているが、補修時には両側に平瓦を立て、さらに焚口部を狭くしている。

前庭部　前庭部は、直径2.3mの孤を描いた平坦面があり、前述のように補修時の燃焼部床面に設けられた丸・平瓦を利用した排水溝が燃焼部から前庭部に向かってのびている。

出土遺物

燃焼部及び焼成部からの遺物は少なく、補修時に使用された平瓦(施設としての瓦)が大半で、一部瓦塔の基壇部分と思われる破片も補修に際して使用している。

ｂ．２号窯

２号窯は、１号窯の立地する丘陵の下1.5mにある地下式有階有段の瓦窯で、残存長約5.3m・最大幅1.4mを測る。

焼成部　焼成部は１号窯と同様、丸瓦及び粘土によって７段の段を設けているが、１号窯に比べ段の遺存状態は悪い。焼成部床面からは製品と思われる瓦がわずかに出土しており、そのうち、軒丸瓦(6284Ｅ型式)の破片が２点で出土した。

燃焼部　燃焼部は、長さ1.9m・幅1.5mを測り、燃焼部床面と焼成部床面の段差(階)は、40cmと高い。燃焼部には焼成部に廃棄されたと思われる丸・平瓦が比較的まとまって出土した。

煙り出し部　１号窯では遺存していなかった煙り出し部が２号窯では遺存していた。この煙り出し部には、焼成部との境に、両側壁に接するように、平瓦と粘土塊を窯の主軸に対して直角に順次積み上げた後、焼成部面に向かって粘土を貼った火楯の施設がある。この火楯に利用した平瓦は、東側壁では14枚使用していたが、西側壁では１枚遺存している程度であった。また、14枚の平瓦は側壁に接して積み上げられているが、下から12枚目の平瓦は、瓦の中心部から積み上げられている。この１枚の平瓦が、両側に積み上げた平瓦を渡したもの(ブリッジにする)と思われる。これによると、煙り出し部の長さは60cm、高さは50cm以上となる。

焚口部・前庭部　焚口部及び前庭部は、後世に削り取られ遺存していなかった。灰原に

ついては不明である。

３．まとめ

瀬後谷遺跡の調査も４年目を迎え、その実態が明らかとなった。すなわち、第１次調査の21btでみつかった灰原及び第３次調査でみつかった溝状遺構と、その内に含まれていた遺物(須恵器・瓦)・窯壁が１・２号窯でみつかった瓦窯のものである可能性が高くなった。ただ、１・２号窯から21btでみつかった灰原とは、直接距離にして約40mとやや離れているため、今後の調査では新たに窯がみつかる可能性も高い。

今回みつかった２基の窯は、瓦を生産していた瓦窯で、その築造順位は、今後の整理作業の結果を待たねばならないが、１号窯出土の平瓦が１枚作りで、２号窯燃焼部で出土した瓦が粘土紐桶巻き作りの可能性が高く、瓦の成形技法から２号窯→１号窯への築窯順位が考えられる。そして、２号窯焼成部出土の軒丸瓦(6284Ｅ型式)は、平城宮瓦編年の第Ｉ期(和銅元(708)年～養老前半期(721)まで)に相当し、平城宮の創建時の瓦窯と思われる。

なお、瀬後谷遺跡の調査は、次年度以降も予定しており、次年度以降の調査により、さらにその性格については検討を加えたい。

(石井清司)

注１　調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。
青山ひろみ・有馬三喜子・犬伏正樹・泉　晶子・五百磐顕一・岩本　貴・植田佳代子・遠藤七都子・小野紀男・坂田千晶・正寿　敦・新谷二三代・杉原美智久・高田優子・竹内理恵・武田宏美・辻谷真夕・辻　道子・筒井崇史・中井英策・中西　修・中村久登・服部直美・花井万里子・早川和子・林　恵子・林　益美・古川良子・村田和弘・山田哲也・吉田悦子・吉永清美・若松美智子・渡辺康子・和村裕紀子

注２　鉄鏃の分類名称については、杉山秀宏の分類案による。
(杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集　第八』)

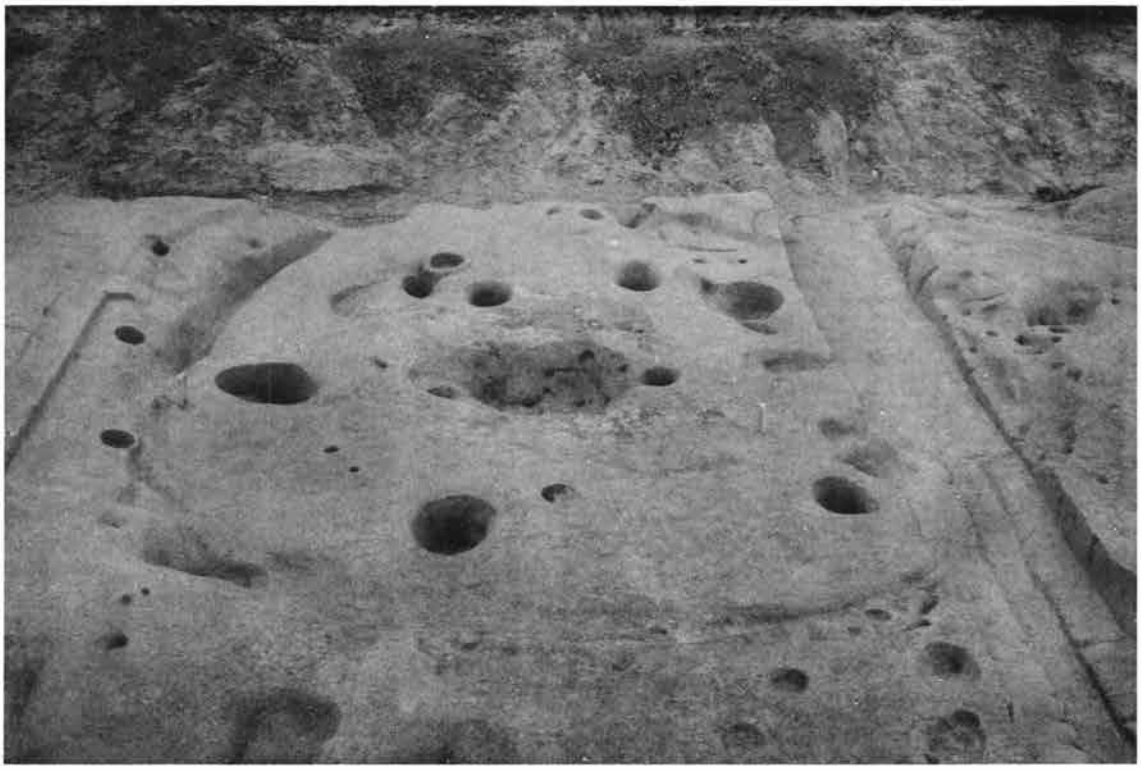
図　　版

図版第１　桑飼上遺跡

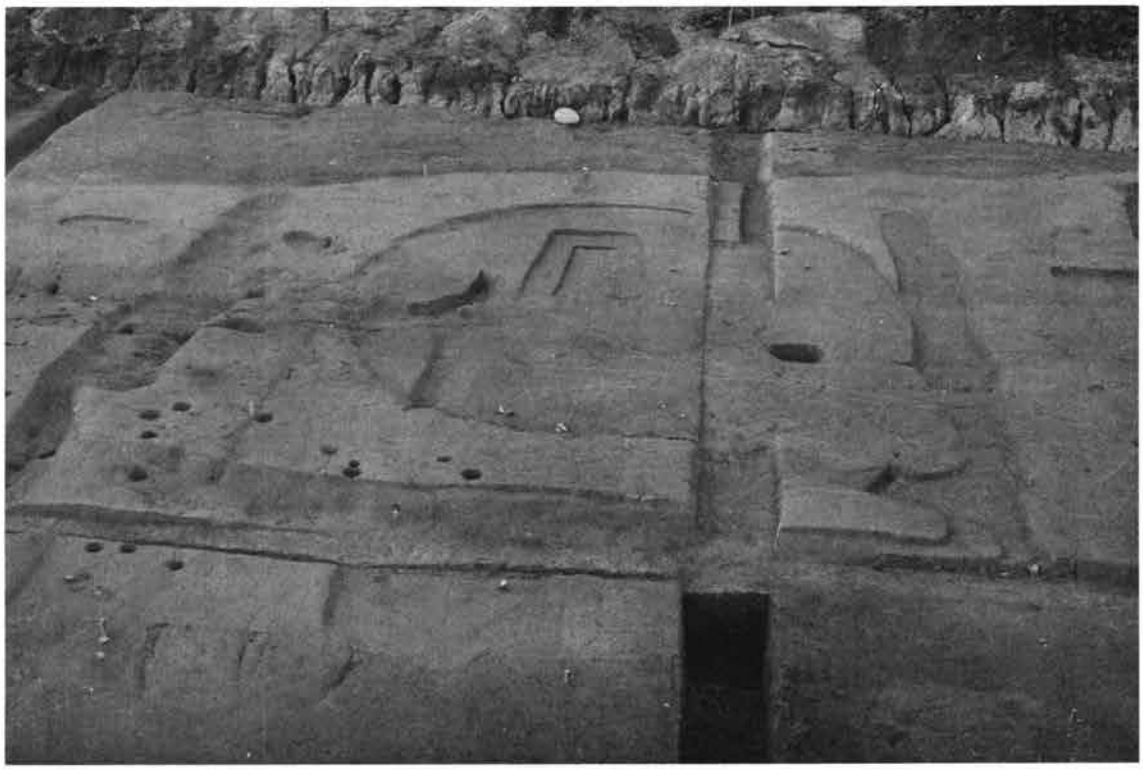
(1)桑飼上遺跡全景（西から）

(2)竪穴式住居跡 30・31（東から）

図版第２　桑飼上遺跡



(1)竪穴式住居跡 26（南から）



(2)方形周溝墓１（南から）

図版第３　桑飼上遺跡

1

2

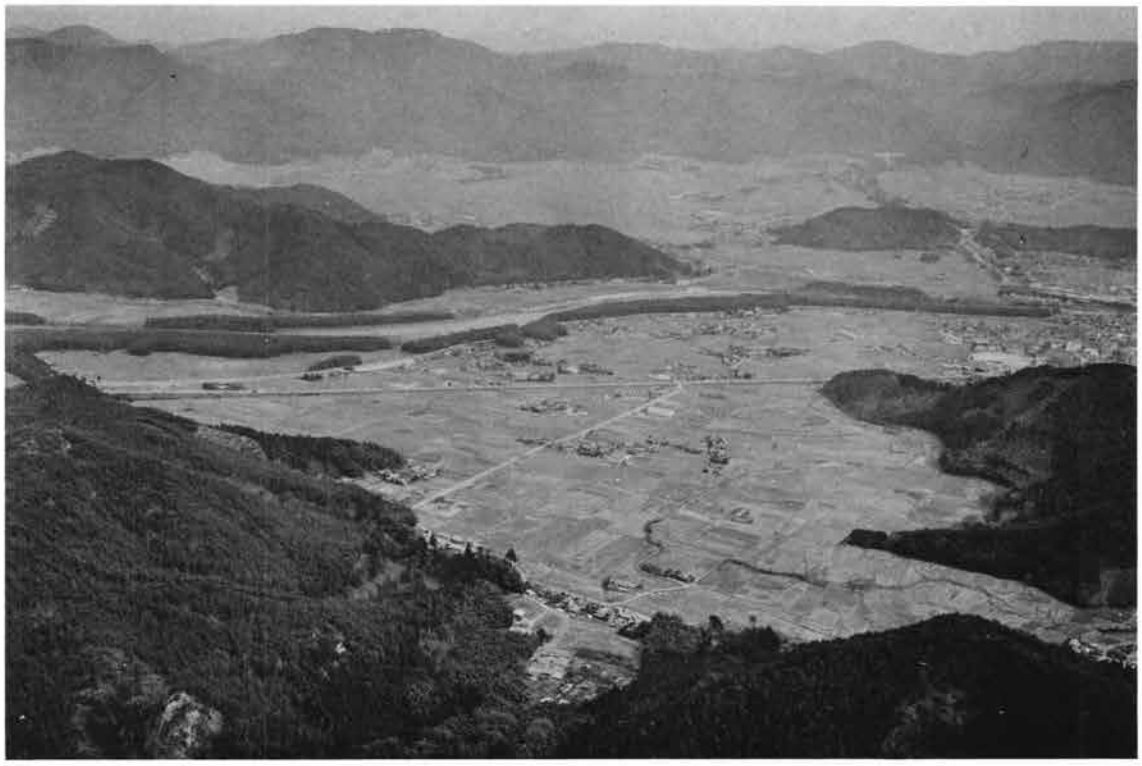
3

4

出土遺物　弥生土器

図版第４　八木嶋遺跡第２次

(1)調査地遠景（上方が北）



(2)調査地遠景（上方が東）

図版第５　八木嶋遺跡第２次

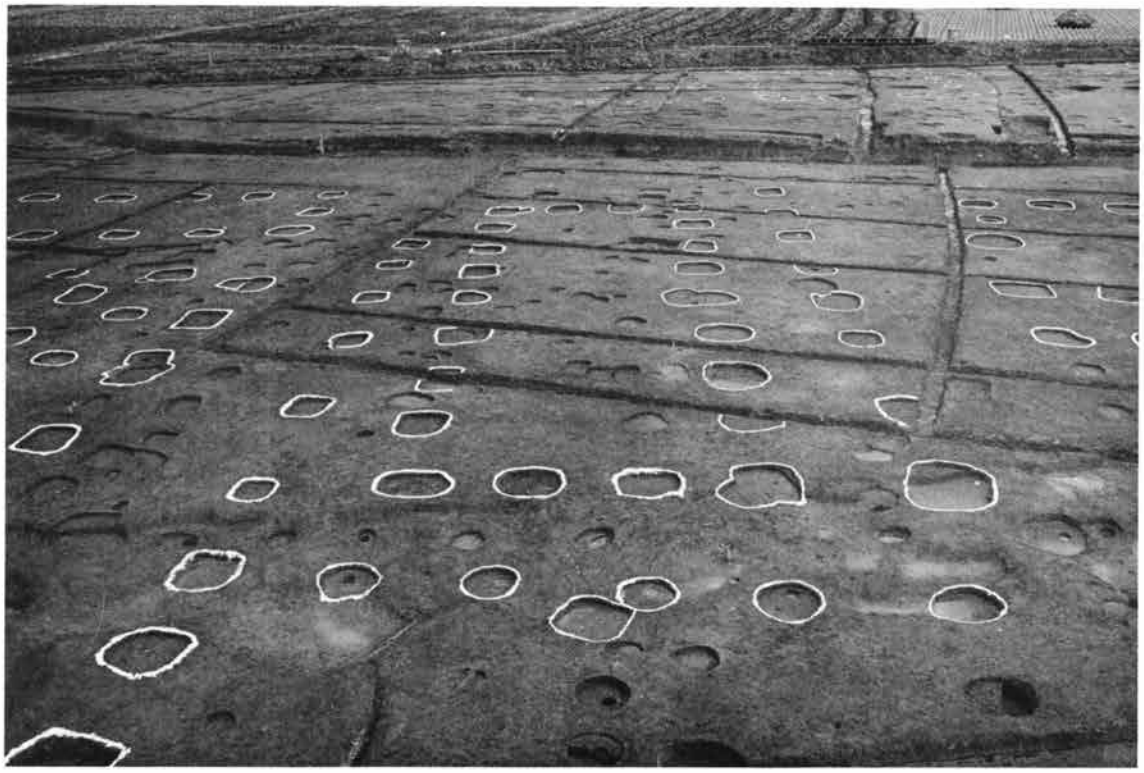
(1)Ａ地区全景（北西から）

(2)Ｂ地区全景（東から）

図版第６　八木嶋遺跡第２次

(1)Ｃ地区　木器出土状況

(2)Ｃ地区　調査風景



(1)Ｅ地区掘立柱建物跡　ＳＢ23検出状況（西から）

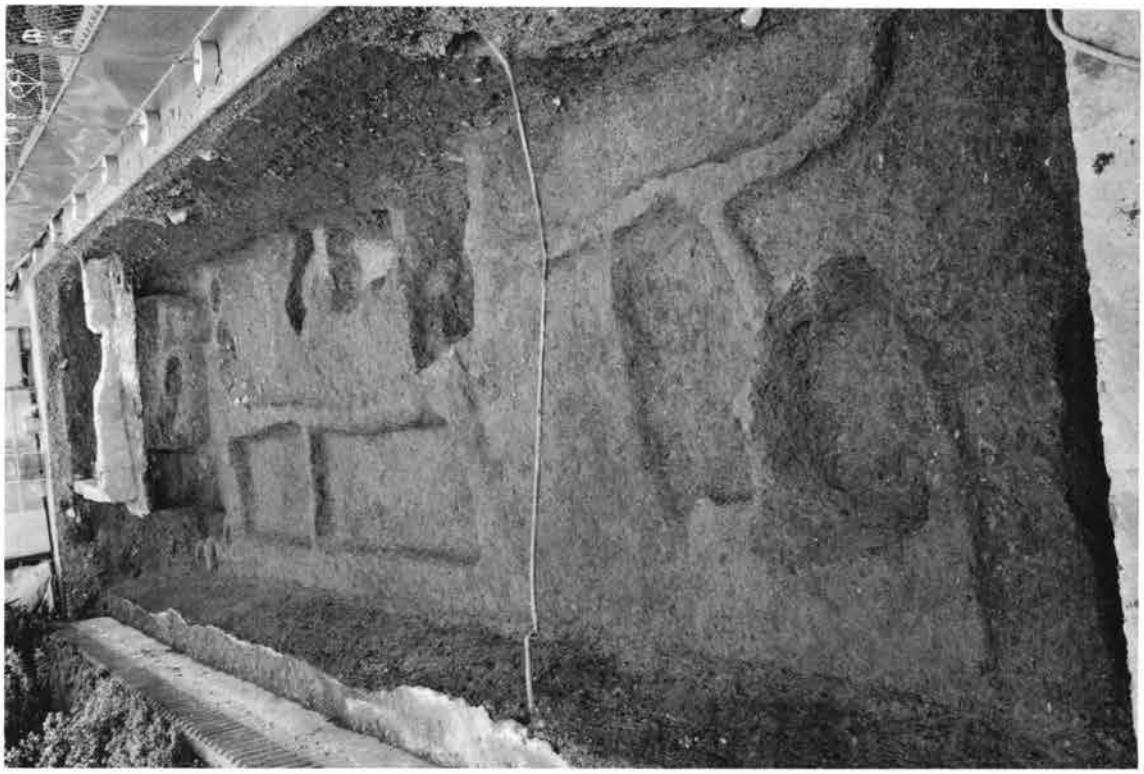
(2)Ｅ地区全景（南から）

図版第８　平安宮大極殿院跡

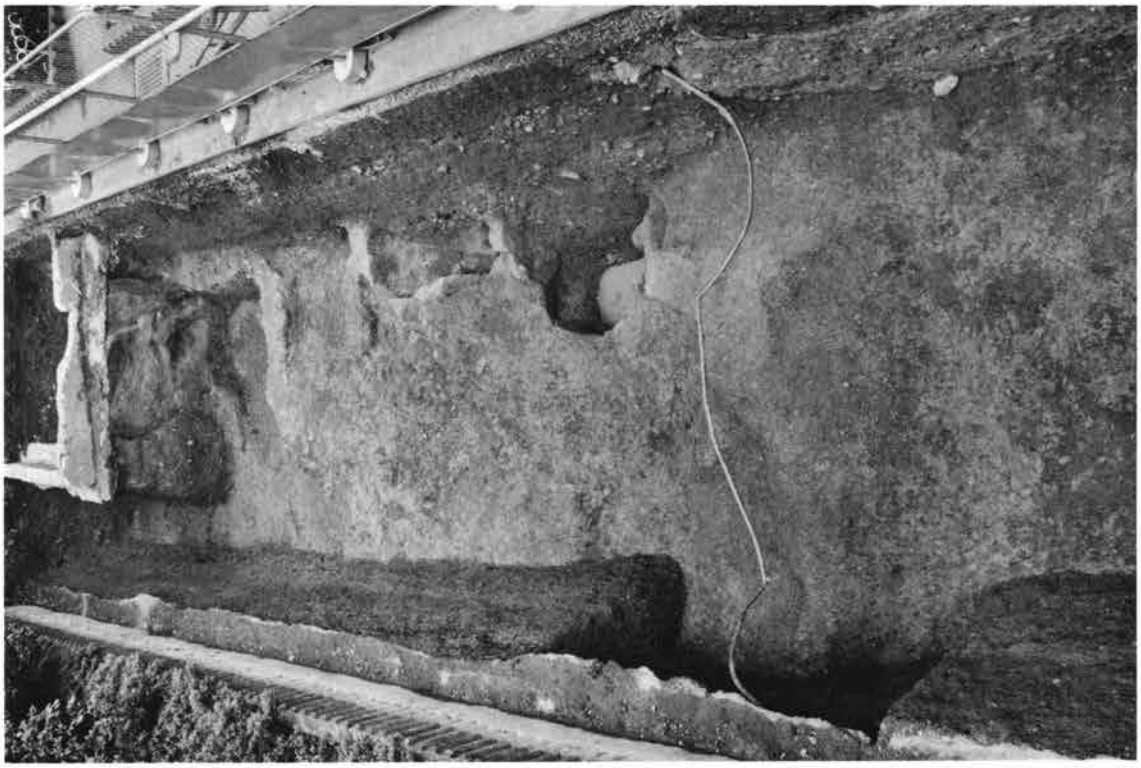
(1)調査前全景（東から）

(2)土坑ＳＫ19瓦出土状況（北から）

図版第９　平安宮大極殿院跡



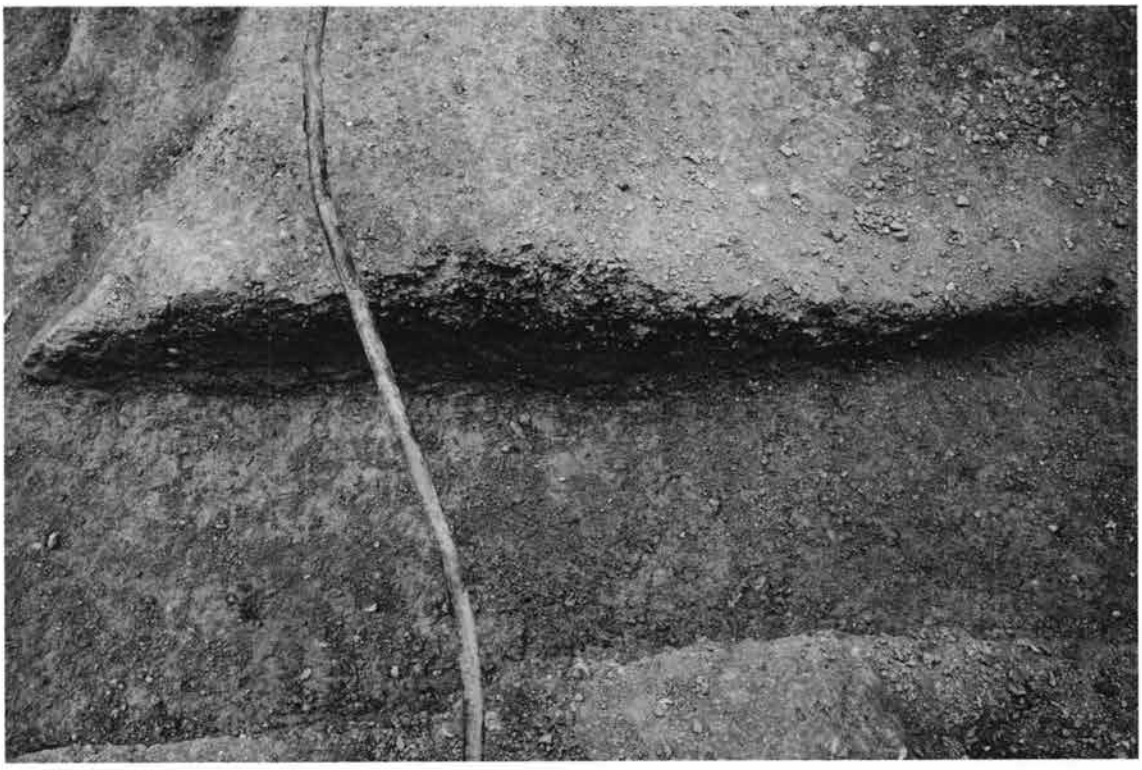
(1)近世遺構検出状況（東から）



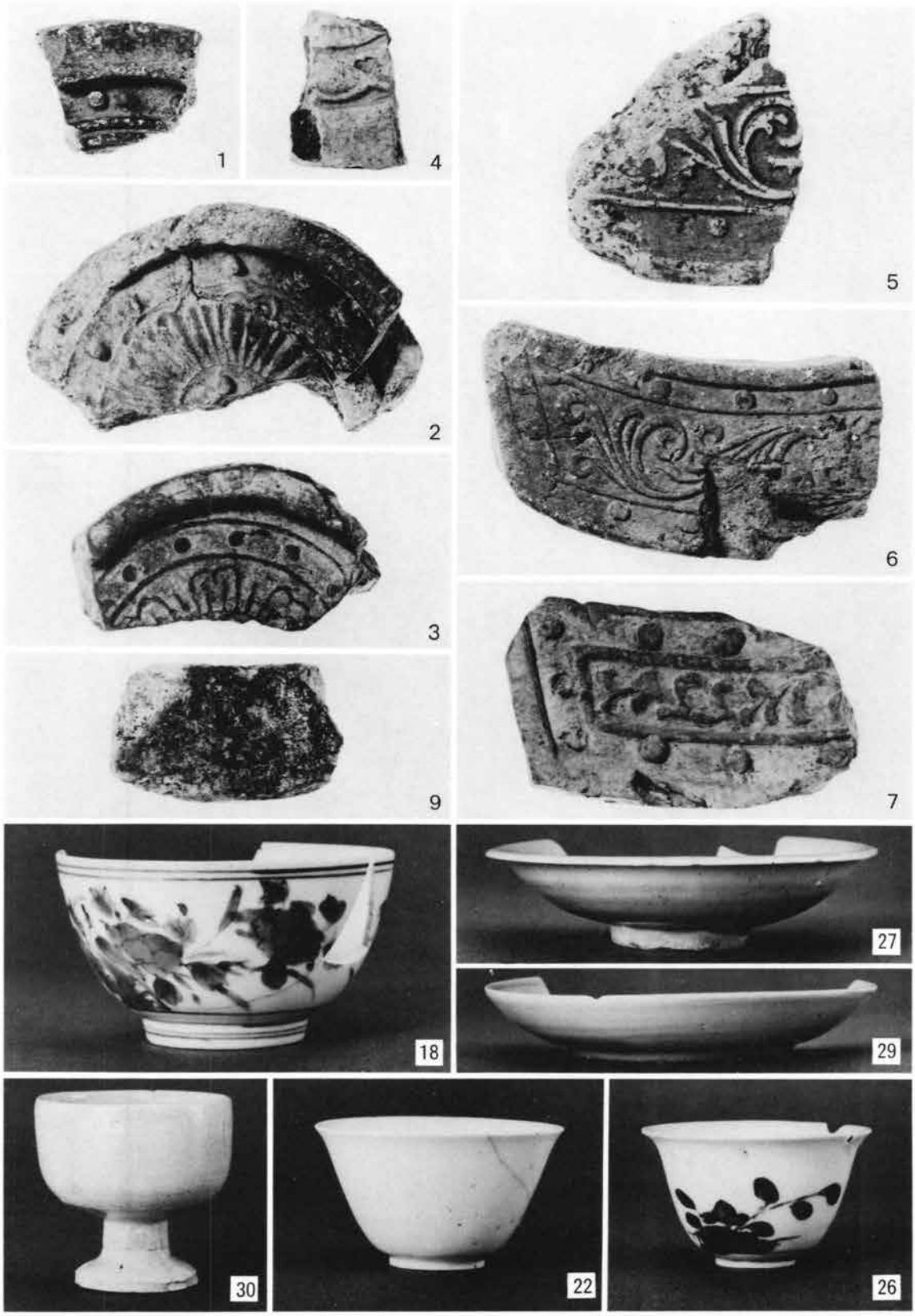
(2)調査地完掘状況（東から）

図版第10　平安宮大極殿院跡

(1)調査地完掘状況（西から）



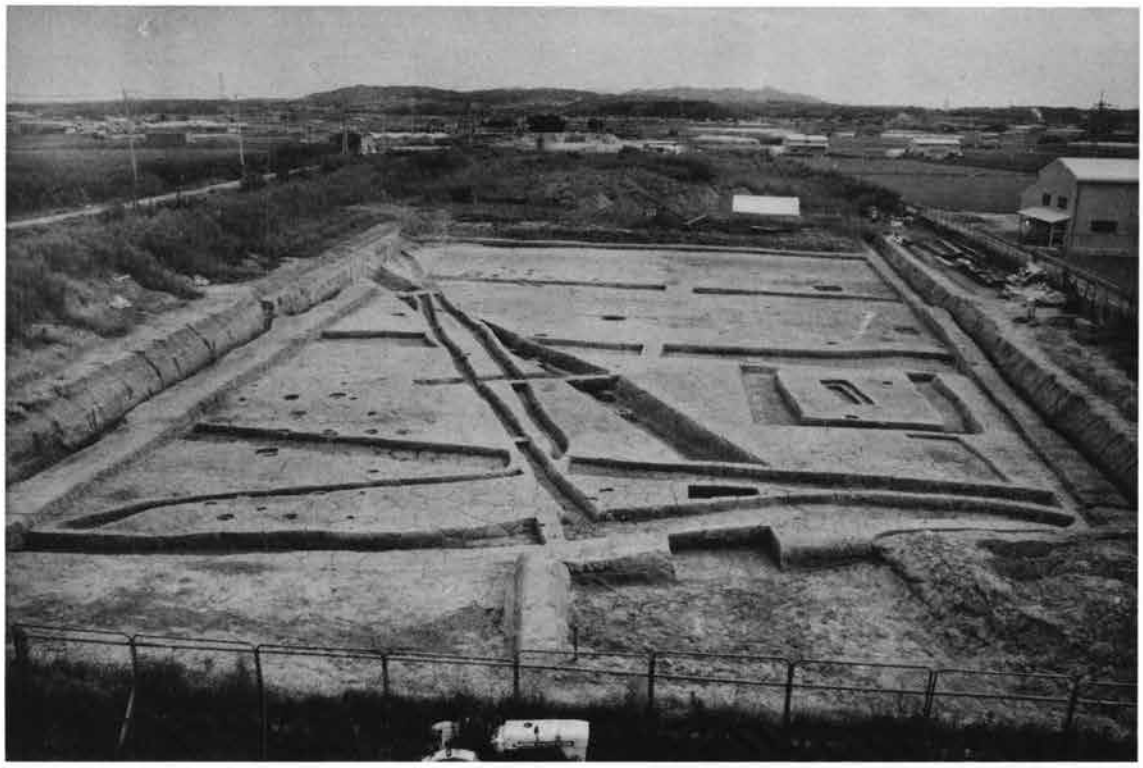
(2)部分断割断面（南から）



出土遺物

図版第12　内里八丁遺跡

(1)A地区第１遺構面（北から）



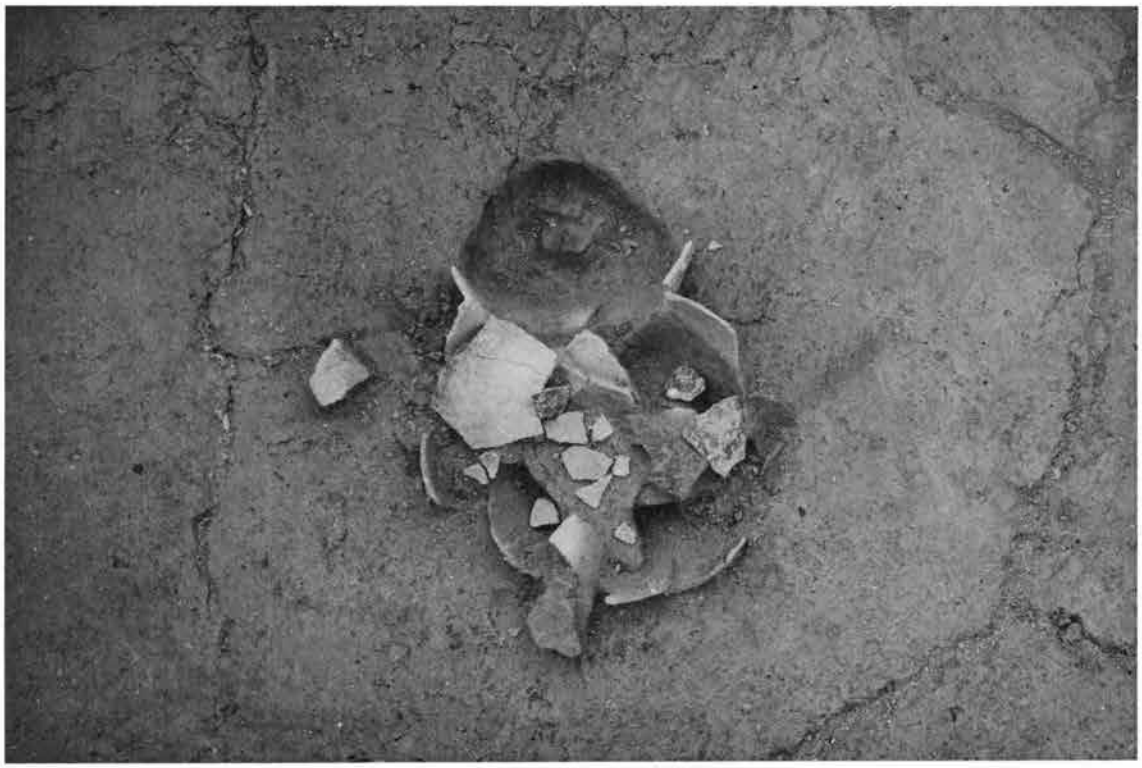
(2)A地区第２遺構面（北から）

図版第13　内里八丁遺跡

(1)方形周溝墓（南から）

(2)埋葬主体部（南から）

(1)溝ＳＤ39 高杯出土状況

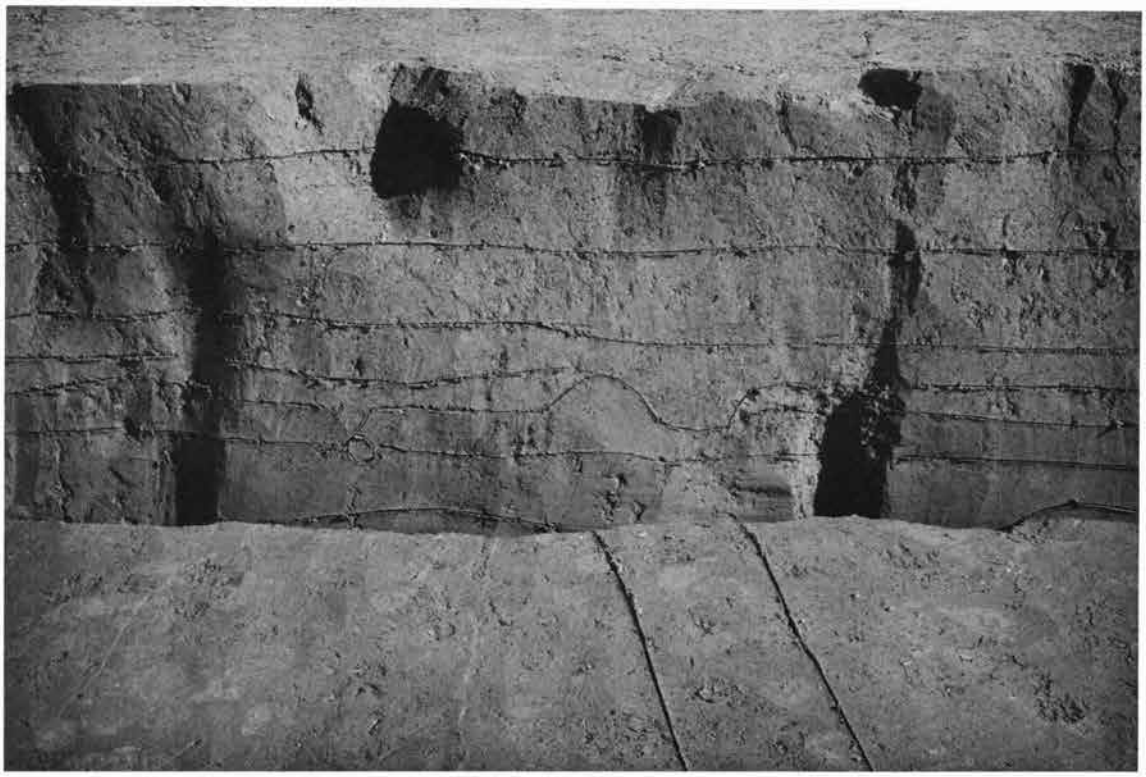


(2)溝ＳＤ39 甕出土状況

図版第15　内里八丁遺跡

(1)A地区第３遺構面全景（南から）

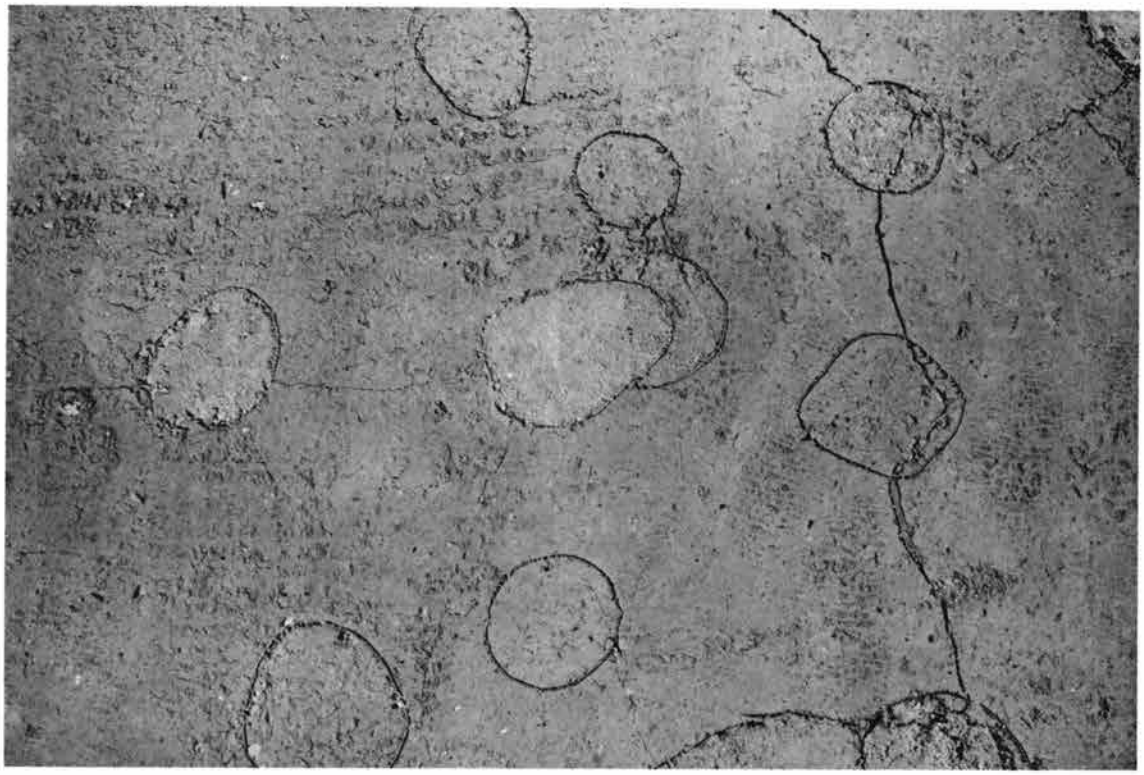
(2)水田遺構及び稲株痕跡（南から）



(1)東壁断面にみる水田42北側畦畔

(2)畦畔検出状況

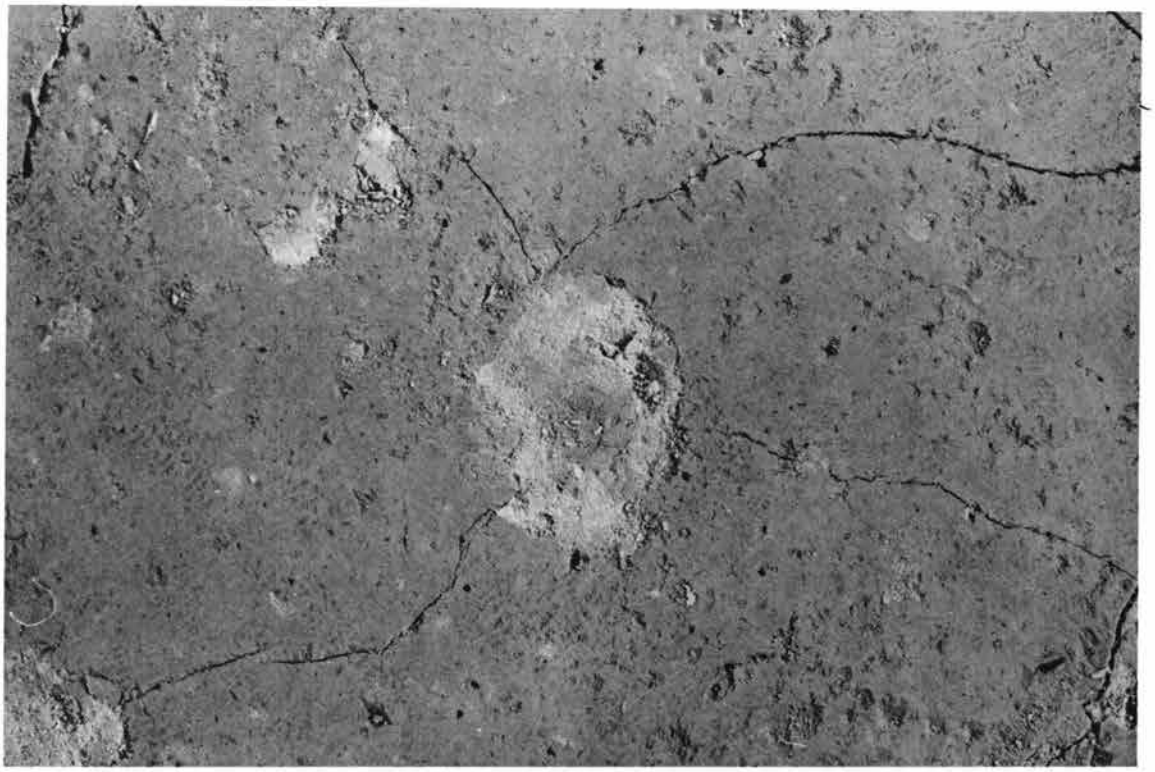
図版第17　内里八丁遺跡



(1)稲株痕跡

(2)稲株痕跡列

図版第18　内里八丁遺跡



(1)A種稲株痕跡

(2)A種稲株痕跡断面

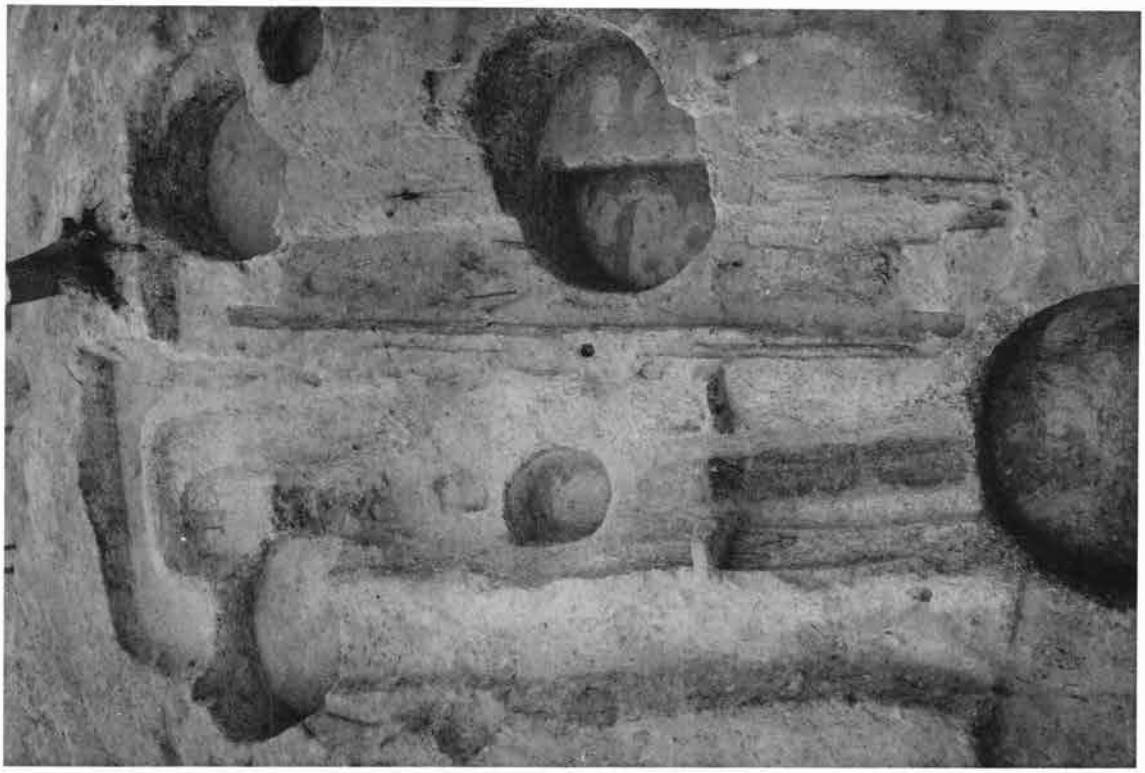
(1)水田跡滞水状況（南から）

(2)水田58出土遺物

図版第20　瓦谷古墳

(1)調査前全景（南から）

(2)主体部全景（第２主体完掘状態 南から）



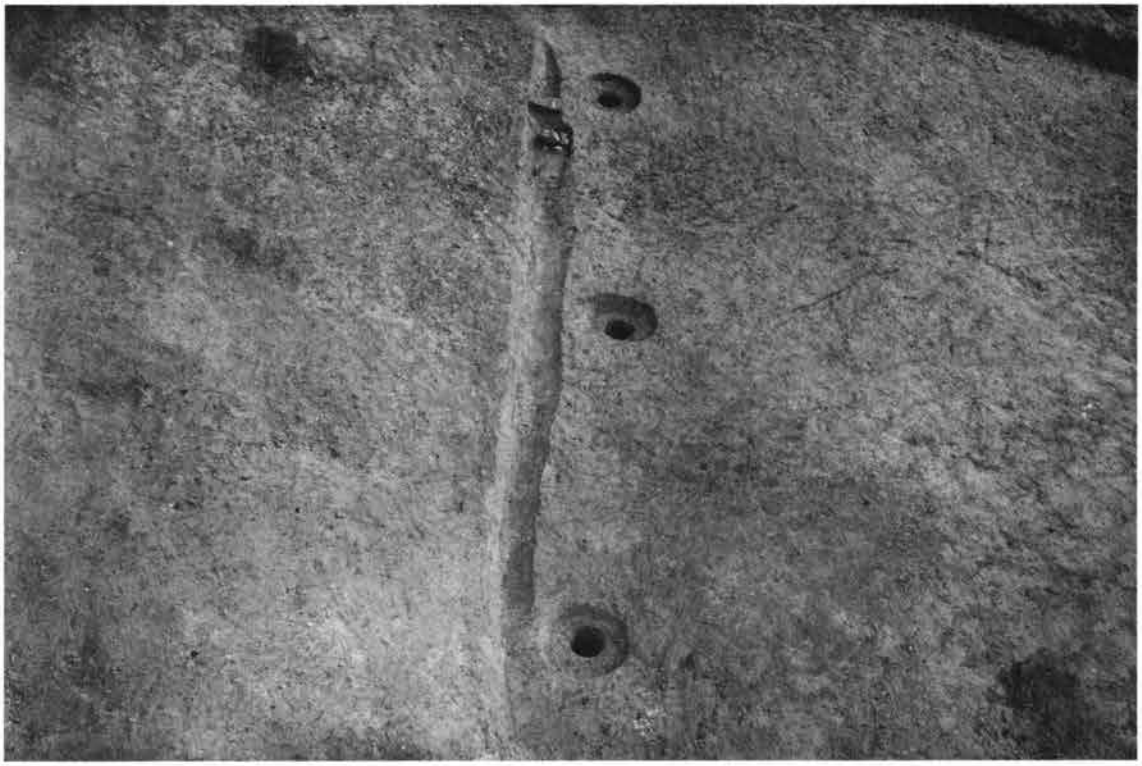
(1)主体部完掘状態（南から）

(2)第１主体棺内木製容器内　鏃出土状態（南から）

(1)埴輪棺05検出状態（北西から）

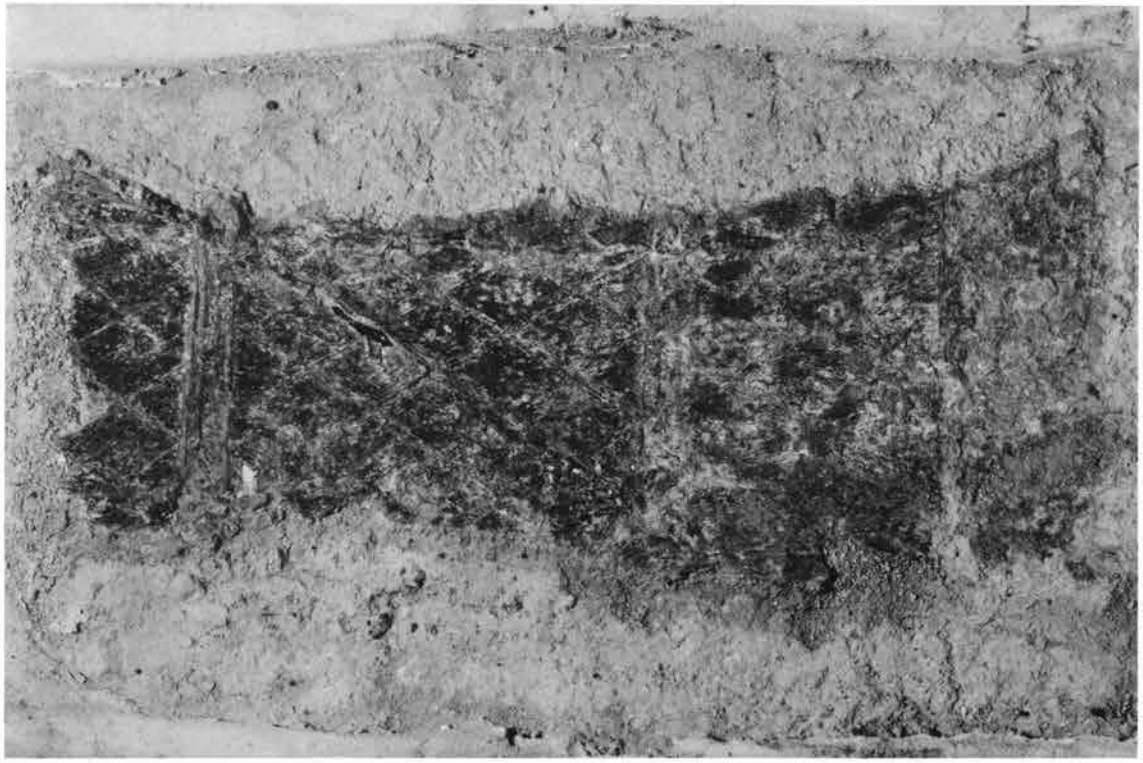
(2)埴輪棺06全景（北東から）

(1)埴輪棺07 検出状態（北東から）



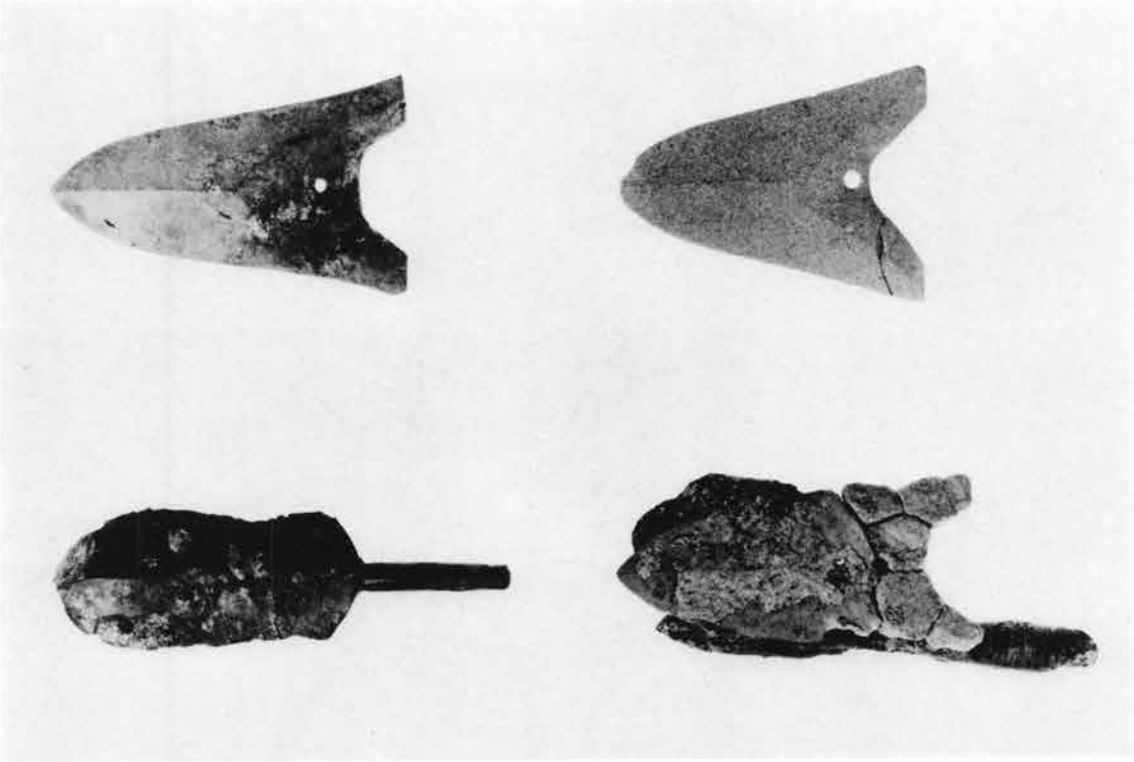
(2)墳丘裾 柱列全景（北から）

(1)仿製変形四首鏡（獣首形鏡）

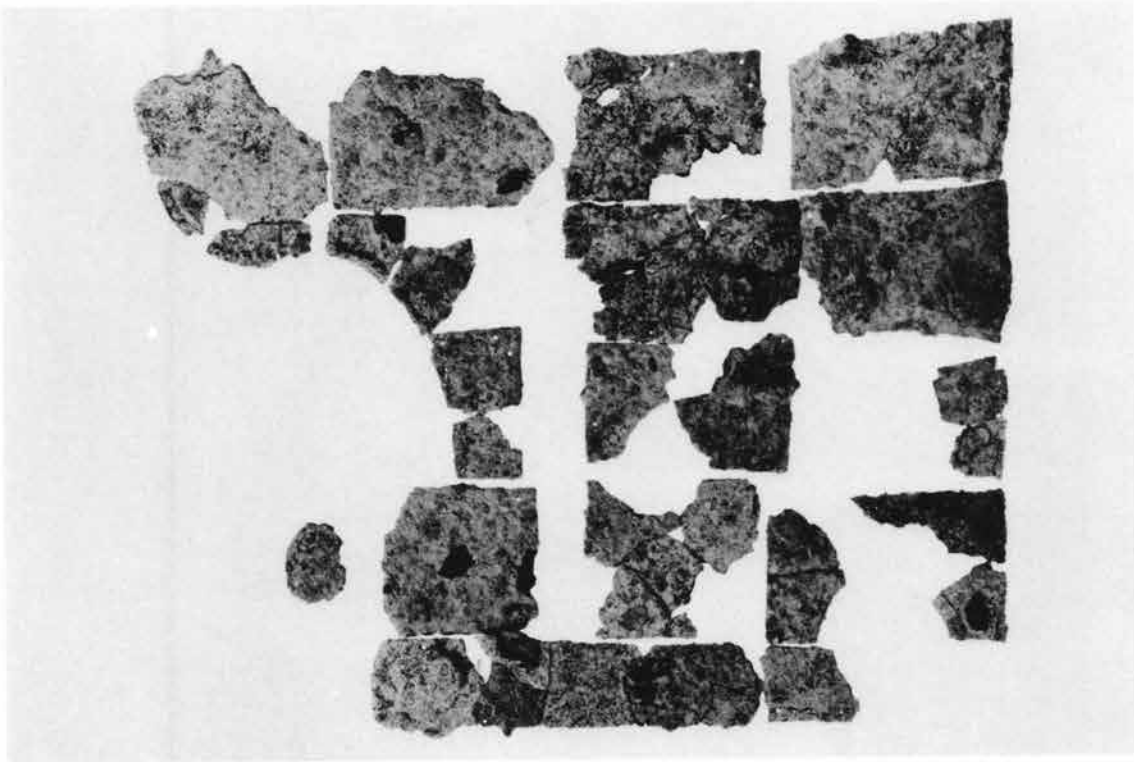


(2)背面

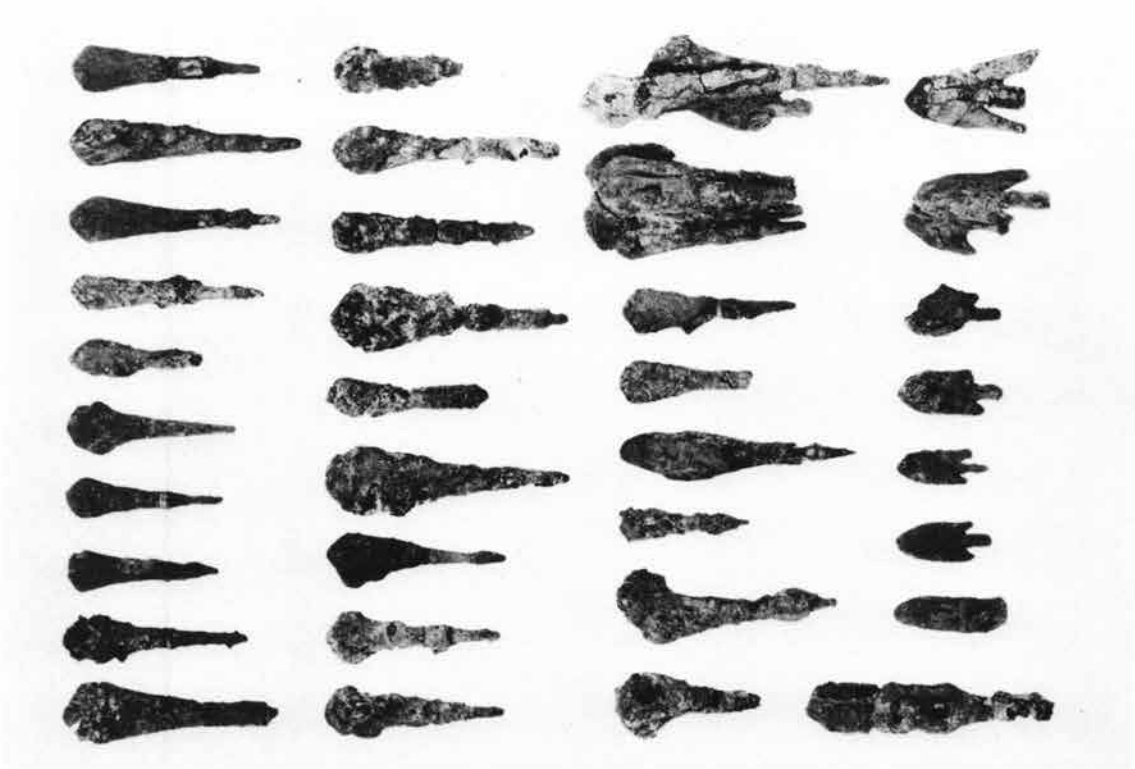
図版第25　瓦谷古墳



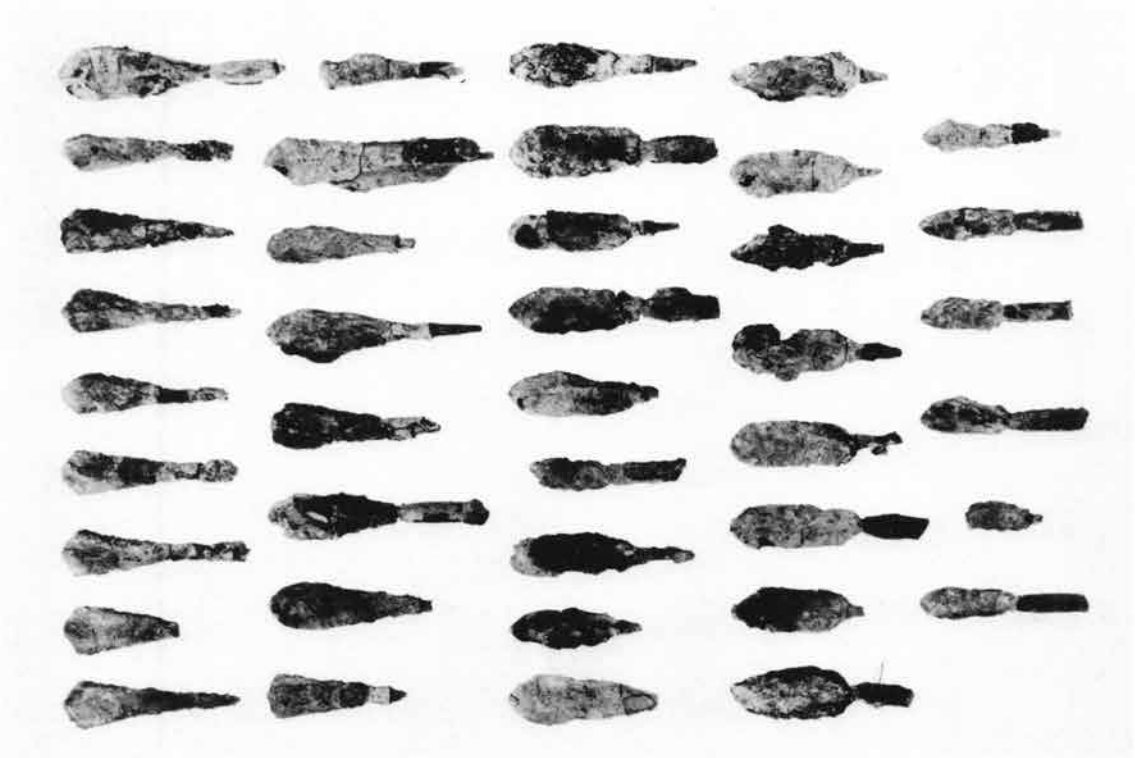
(1)銅鏃・鏃形石製品



(2)方形板革綴短甲



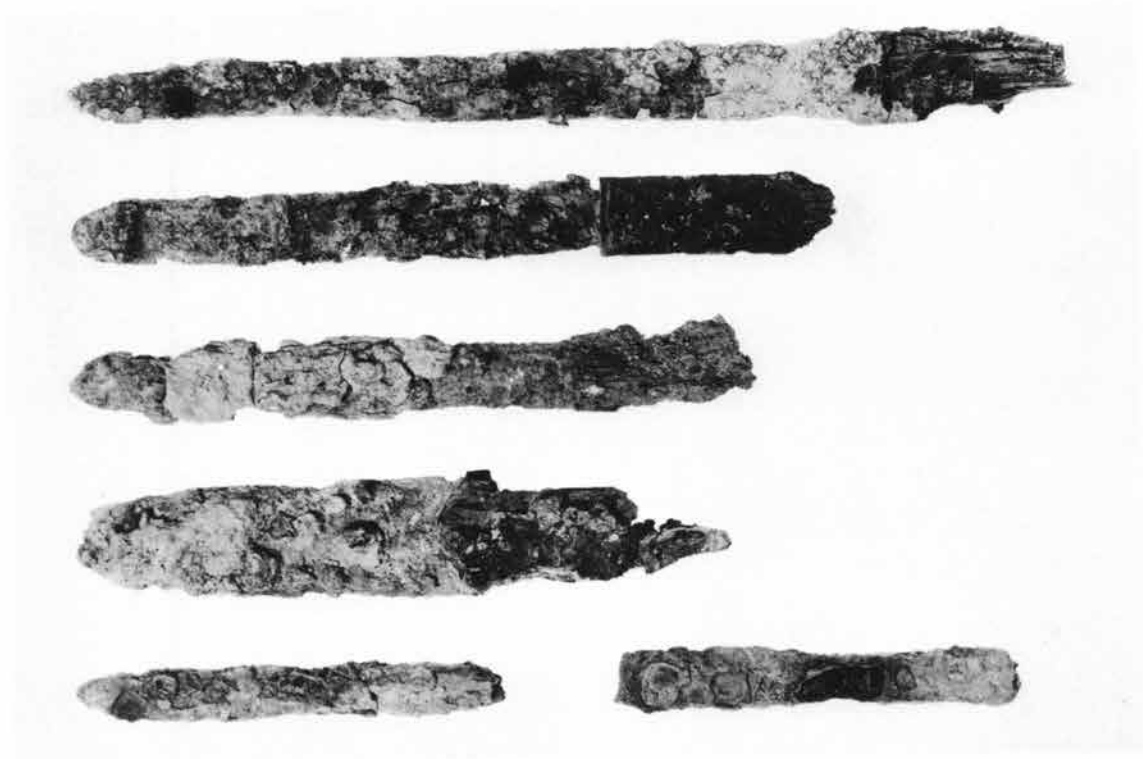
(1)第１主体出土 鉄鏃



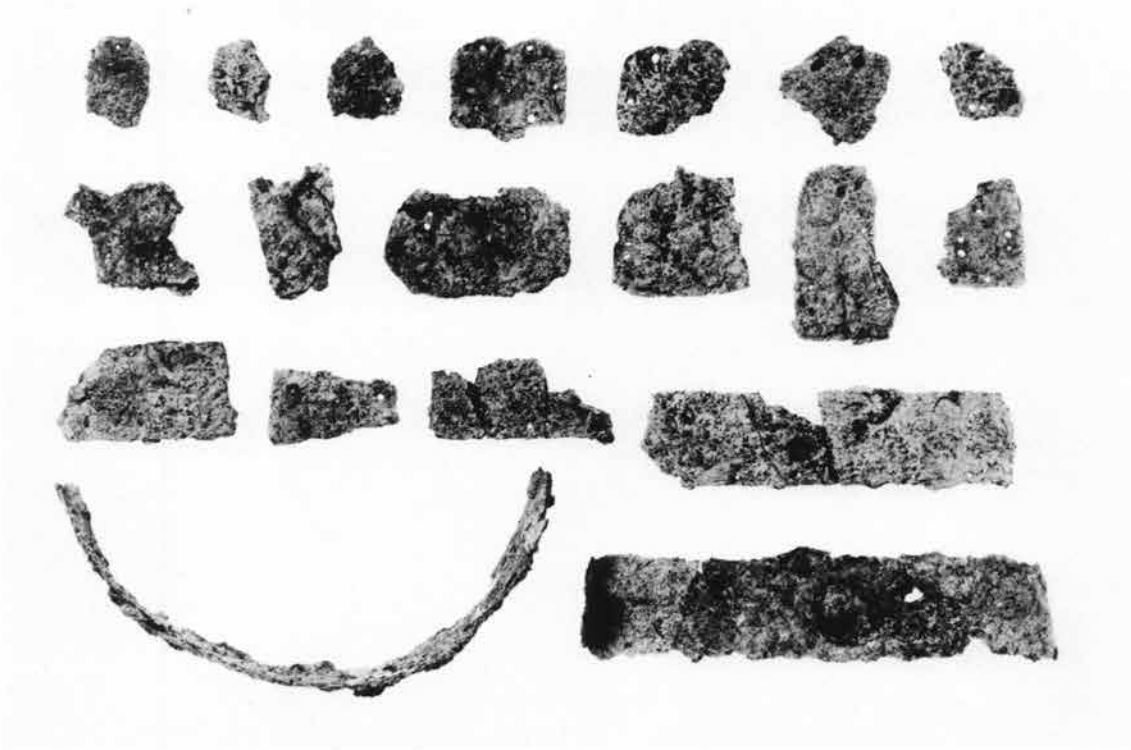
(2)第２主体釧内出土鉄鏃

図版第27　瓦谷古墳

(1)第１主体出土　鉄ヤリ



(2)第２主体出土　鉄ヤリ・鉄ホコ

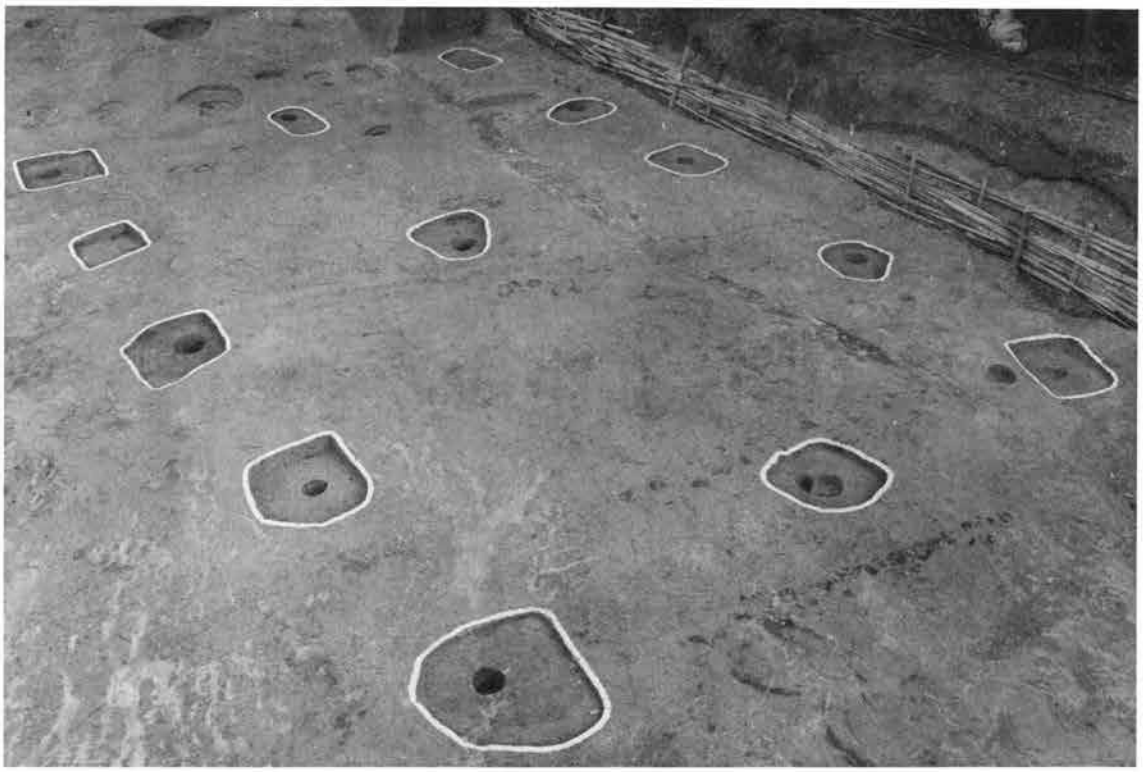


(1)小札革綴冑

(2)埴輪棺07使用特殊壺（特殊壺形埴輪）

(1)調査地全景（西から）

(2)ＳＫ9034（手前）・ＳＫ9035 全景（東から）



(1)ＳＢ9031 全景（北西から）

(2)木樋状木製品出土状態（北東から）

(1) S D9010 遺物出土状態

(2) S D9007 遺物出土状態

図版第32　瀬後谷遺跡

(1) 1 号窯検出状態（東から）

(2) 2 号窯検出状態（北東から）

京都府遺跡調査概報　第46冊

平成3年12月25日

発　行　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075) 933−3877 (代)

印　刷　株式会社　中村太古舎

TEL (0775) 24−4370